

平成 16 年度

財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報



2006



写真1 大宅廃寺 瓦積基壇



写真2 相国寺旧境内 住居跡



写真3 平安京右京六条三坊跡 人形



写真4 平安京左京四条三坊跡 江戸時代の工房跡

平成 16 年度

財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

2006

序

歴史都市京都は平安京建都以来の永くそして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前にさかのぼるはるかなむかしを含む永い期間の貴重な文化財がなお地下に多く埋もれています。

この古都京都の市内のさらなる整備と再開発が進められ、それにともない埋蔵文化財の破壊と消滅を未然に防ぎ、遺跡や遺物を保存するために、昭和 51 年秋、わたしどもの財団法人京都市埋蔵文化財研究所が設立されました。以来、当研究所は平安京やその周辺の多くの遺跡について発掘調査を実施し、数多くの調査成果を挙げており、それらを公表し普及・啓発する事業も推し進めてまいりました。

当研究所は毎年、年報を発刊しその年度に実施しました諸事業についてご紹介、一層のご理解とご支援をたまわる一助にさせていただきたく存じます。その内容は市内の発掘調査事業の概要、試掘や立会調査の成果と概要、あわせて資料の保存処理や復元彩色の内容ならびに普及・啓発の事業の概要などを紹介しています。

なお、発掘調査に関しましては本年報とは別に個々の遺跡の発掘調査概報を発刊しておりますが、本年報ではその年度に実施しました発掘調査の全体について一覧していただけるよう、その内容を要約し紹介しております。

本書の内容についてご意見、ご批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

この年度の調査を実施するにあたり原因者の方々をはじめとし、京都市の関連諸機関の各位に多大なご協力をいただきましたことをここに記し、厚く感謝ならびにお礼申し上げます。

平成 18 年 12 月

財団法人京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

凡 例

- 1 本書は、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が平成 16 年度に実施した事業の年次報告である。発掘調査・試掘立会調査（第 1 章）、資料整理（第 2 章）、普及啓発事業等報告（第 3 章）とした。
- 2 本書中に示した方位・座標値は、日本測地系（改正前）平面直角座標系VIによつた。ただし座標値は単位（m）を省略している。座標および水準は、京都市遺跡発掘調査基準点と京都市水準点を使用した。
- 3 本書中の地図は、京都市長の承認を得て、同市発行の都市計画基本図（縮尺：1/2,500）、市街図（縮尺：1/30,000）を複製して調整した。
- 4 長岡京の条坊呼称は、新呼称に準拠した。
- 5 遺構表示のうち、表示記号で示したものは、独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所の用例に従った。
- 6 土器編年の型式は、当研究所『研究紀要』第 3 号の「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」に従った。なお、「平安京 I～V 期」「京都 VI～XIV 期」を「京都 I～XIV 期」で統一した。
- 7 各報告の調査位置図の方位は北を上配置した。黒塗り部分が、調査対象地である。縮尺は、1/5,000 ないしは 1/10,000 とした。
- 8 平成 15 年度調査のうち、文化庁国庫補助事業による発掘調査は、『京都市内遺跡発掘調査概報』に、同じく市内遺跡立会調査は『京都市内遺跡立会調査概報』（いずれも京都市文化市民局発刊）に報告されている。
- 9 掲載写真は一部を除き村井伸也・幸明綾子が撮影した。
- 10 各報告は、文末に記されているものは、各調査担当者が執筆した。その他のものは発刊された概報などから編集したものである。
- 11 本書の作成にあたっては、編集・調整を資料課が行った。
- 12 当年報は、従来から発刊してきた『〇〇年度 京都市埋蔵文化財調査概要』を平成 15 年度より書名変更したものである。

目次

第1章 調査報告

I 平成16年度の発掘調査概要	1
1 史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮廡院跡	7
2 平安京左京三条四坊跡1	8
3 平安京左京三条四坊跡2	9
4 名勝滴翠園・平安京左京七条二坊跡	10
5 平安京右京一条四坊跡	11
6 平安京右京三条一坊跡1	12
7 平安京右京三条一坊跡2	13
8 平安京右京三条一坊跡3	14
9 平安京右京三条二坊跡	15
10 平安京右京三条四坊跡	16
11 平安京右京六条三坊跡	17
12 平安京左京八条一坊跡・御土居跡	18
13 長岡京右京一条四坊跡	19
14 史跡賀茂御祖神社境内	20
15 上京遺跡	21
16 相国寺旧境内	22
17 白河街区跡・岡崎遺跡	23
18 山科本願寺跡1	24
19 山科本願寺跡2	25
20 大宅廃寺・大宅遺跡	26
21 醍醐寺子院跡	27
22 特別史跡・特別名勝 醍醐寺三宝院	28
23 史跡・名勝 嵐山1	29
24 史跡・名勝 嵐山2	30
25 史跡・名勝 嵐山3	31
26 鳥羽離宮150次調査	32
27 伏見城跡	33
II 平成16年度の試掘・立会調査概要	34
1 平安京左京八条四坊跡	35
2 平安京跡	38
3 平安京跡・烏丸丸太町遺跡（閑院宮邸跡）	41
4 常盤仲之町遺跡	56
5 史跡・特別名勝 天龍寺庭園	58
6 伏見城跡1	63
7 伏見城跡2	75

第2章 資料整理

I 保存処理	78
1 出土木製品の受入れ状況	78
2 木製品保存処理	78
3 金属製品の受入れと保存処理	78
4 ガラスの比重測定	78
5 骨の受入れと保存処理	78
6 遺構・遺物の取上げ	78
7 修羅の保存処理	78
8 受託事業	79
II 復元彩色	79

第3章 普及啓発事業等報告

I 普及啓発事業報告	80
1 宝くじイベント共催事業「つちの中の京都」事業	80
2 現地説明会の開催、他	80
3 報告書の刊行	80
4 「リーフレット京都」(No.183～No.194)の発行	81
5 研究会等への派遣	81
6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加	81
7 講師等の派遣	82
8 ホームページアクセス件数	82
II 京都市考古資料館状況	82
1 速報展の実施	82
2 特別展示の実施	82
3 第25回小・中学校夏期教室の開催	84
4 文化財講座の開催	84
5 考古資料の貸出	85
6 博物館学芸員課程実習生の受入れ	85
7 生き方探求・チャレンジ体験	85
8 修学旅行生の発掘調査体験学習の受入れ	87
9 教育機関の学外授業等の受入れ	87
10 共催事業の実施	87
11 入館状況	88
III 役職員名簿	89

目 次

カラー図版 1

写真 1 大宅廃寺 瓦積基壇

写真 2 相国寺旧境内 住居跡

カラー図版 2

写真 3 平安京右京六条三坊跡 人形

写真 4 平安京左京四条三坊跡 江戸時代の工房跡

図 1	調査位置図	6
図 2	史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮廩院跡調査位置図	7
図 3	” 第 2 面遺構平面図	7
図 4	” 第 3 面遺構平面図	7
図 5	” 第 2 面全景	7
図 6	平安京左京三条四坊跡 1 調査位置図	8
図 7	” 江戸時代前期遺構配置図	8
図 8	平安京左京三条四坊跡 2 調査位置図	9
図 9	” 第 1 遺構平面図	9
図 10	” SX 2 実測図	9
図 11	名勝滴翠園・平安京左京七条二坊跡調査位置図	10
図 12	” 調査区配置図	10
図 13	” 調査区全景	10
図 14	平安京右京一条四坊跡調査位置図	11
図 15	” 周辺遺構配置図	11
図 16	平安京右京三条一坊跡 1 調査位置図	12
図 17	” 遺構平面図	12
図 18	平安京右京三条一坊跡 2 調査位置図	13
図 19	” 遺構平面図	13
図 20	” 周辺遺構配置図	13
図 21	平安京右京三条一坊跡 3 調査位置図	14
図 22	” 遺構平面図	14
図 23	平安京右京三条二坊跡調査位置図	15
図 24	” 遺構平面図	15
図 25	平安京右京三条四坊跡調査位置図	16
図 26	” 遺構平面図	16
図 27	平安京右京六条三坊跡調査位置図	17
図 28	” 遺構平面図	17
図 29	平安京左京八条一坊跡・御土居跡調査位置図	18
図 30	” 調査実測図	18
図 31	長岡京右京一条四坊跡調査位置図	19

図 32	”	遺構変遷図	．．．．．	19
図 33		史跡賀茂御祖神社境内調査位置図	．．．．．	20
図 34	”	遺構平面図	．．．．．	20
図 35		上京遺跡 調査位置図	．．．．．	21
図 36	”	遺構平面図	．．．．．	21
図 37	”	調査区全景	．．．．．	21
図 38		相国寺旧境内調査位置図	．．．．．	22
図 39	”	遺構平面図	．．．．．	22
図 40	”	竪穴 196・かまど跡	．．．．．	22
図 41		白河街区跡・岡崎遺跡調査位置図	．．．．．	23
図 42	”	土壌断面状況	．．．．．	23
図 43	”	A4 区 T2 全景	．．．．．	23
図 44		山科本願寺跡 1 調査位置図	．．．．．	24
図 45	”	遺構平面図	．．．．．	24
図 46		山科本願寺跡 2 調査位置図	．．．．．	25
図 47	”	御土居平面図	．．．．．	25
図 48	”	御土居断面図	．．．．．	25
図 49		大宅廃寺・大宅遺跡調査位置図	．．．．．	26
図 50	”	遺構実測図	．．．．．	26
図 51		醍醐寺子院跡調査位置図	．．．．．	27
図 52	”	遺構平面図	．．．．．	27
図 53		特別史跡・特別名勝 醍醐寺三宝院調査位置図	．．．．	28
図 54	”	トレンチ配置図	．．．．．	28
図 55	”	旧排水施設	．．．．．	28
図 56		史跡・名勝 嵐山 1 調査位置図	．．．．．	29
図 57	”	遺構平面図	．．．．．	29
図 58		史跡・名勝 嵐山 2 調査位置図	．．．．．	30
図 59	”	遺構平面図	．．．．．	30
図 60		史跡・名勝 嵐山 3 調査位置図	．．．．．	31
図 61	”	遺構平面図	．．．．．	31
図 62		鳥羽離宮 150 次調査調査位置図	．．．．．	32
図 63	”	遺構平面図	．．．．．	32
図 64	”	土器実測図	．．．．．	32
図 65		伏見城跡調査位置図	．．．．．	33
図 66	”	遺構平面図	．．．．．	33
図 67		平安京左京八条四坊跡調査位置図	．．．．．	35
図 68	”	トレンチ配置図	．．．．．	36
図 69	”	1・2 区土層断面図	．．．．．	36
図 70	”	3・4 区土層断面図	．．．．．	37
図 71	”	1 区全景	．．．．．	37
図 72	”	2 区全景	．．．．．	37

図 73	"	3 区全景	37
図 74	"	4 区全景	37
図 75		平安京跡調査位置図	38
図 76	"	土層断面図 1	39
図 77	"	土層断面図 2	39
図 78	"	土層断面図 3	40
図 79	"	土層断面図 4	40
図 80	"	土層状況	40
図 81		平安京跡・烏丸丸太町遺跡（閑院宮邸跡）調査位置図	41
図 82	"	調査前全景	41
図 83	"	トレンチ・遺構配置図	42
図 84	"	南北立面図	43
図 85	"	1 トレンチ実測図	44
図 86	"	2 トレンチ実測図	46
図 87	"	3 トレンチ実測図	48
図 88	"	4 トレンチ実測図	50
図 89	"	1 トレンチ全景	52
図 90	"	2 トレンチ全景	52
図 91	"	3 トレンチ堀内側 州浜状遺遺構	52
図 92	"	4 トレンチ全景	52
図 93	"	5 トレンチ全景	53
図 94	"	6 トレンチ全景	53
図 95	"	7 トレンチ全景	53
図 96	"	8 トレンチ全景	53
図 97	"	魚溜り状遺構・飛び石状遺構全景	54
図 98	"	中島北部積み石完掘状況	54
図 99		常盤之町遺跡トレンチ配置図	56
図 100	"	調査位置図	56
図 101	"	土層断面図 1	57
図 102	"	土層断面図 2	57
図 103		史跡・特別名勝 天龍寺庭園調査位置図	58
図 104	"	調査区配置図	58
図 105	"	土壇全景	58
図 106	"	土壇実測図	59
図 107	"	1 区全景	60
図 108	"	2 区全景	60
図 109	"	1 区実測図	60
図 110	"	2 区実測図	61
図 111		伏見城跡 1 調査位置図	63
図 112	"	調査地全景	64
図 113	"	1 トレンチ全景	64

図 114	”	2 トレンチ全景	・ ・ ・ ・ ・ 64
図 115	”	2 トレンチ堀	・ ・ ・ ・ ・ 64
図 116	”	1 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 65
図 117	”	2 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 66
図 118	”	2 トレンチ東端実測図	・ ・ ・ ・ ・ 68
図 119	”	3 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 68
図 120	”	4 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 69
図 121	”	5 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 70
図 122	”	6 トレンチ実測図	・ ・ ・ ・ ・ 71
図 123	”	出土軒瓦拓影	・ ・ ・ ・ ・ 72
図 124		伏見城跡 2 調査位置図	・ ・ ・ ・ ・ 75
図 125	”	トレンチ配置図	・ ・ ・ ・ ・ 76
図 126	”	調査状況	・ ・ ・ ・ ・ 76
図 127		保存処理 大宅廃寺遺構取上げ作業	・ ・ ・ ・ ・ 79

表 目 次

表 1		平成 16 年度調査一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 2
表 2		その他契約一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 5
表 3		保存処理済木製品一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 78
表 4		大宅廃寺遺構取上げ作業	・ ・ ・ ・ ・ 79
表 5		講師等の派遣一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 83
表 6		文化財講座開催一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 84
表 7		貸出一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 86
表 8		チャレンジ体験実施校一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 87
表 9		学外授業受入れ一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 87
表 10		入館者数一覧表	・ ・ ・ ・ ・ 89
表 11		役員名簿	・ ・ ・ ・ ・ 89
表 12		職員名簿	・ ・ ・ ・ ・ 90

第1章 調査報告

第1章は、発掘調査（Ⅰ）と試掘・立会・確認調査（Ⅱ）とした。

平安宮・平安京の調査位置図には、現段階での復元推定線を入れ利用の便をはかった。

Ⅰ 平成16年度の発掘調査概要

平成16年度に実施した発掘調査件数は、表1に示した通り32件であった。このうち27件の概要を掲載した。以下、主な調査を紹介したい。

今年度の調査で特徴的であったことは、史跡・名勝嵐山地区で3件（Ⅰ-23・Ⅰ-24・Ⅰ-25）の発掘調査と1件（Ⅱ-05）の試掘調査が近接し相次いで行われたことである。発掘調査地点では、いずれも亀山殿や天龍寺に関係する遺構や遺物が発見されており、嵐山一帯の歴史の変遷が明確となった。古図資料でしか知られていなかった亀山殿や天龍寺関係の明確な遺構を確認できたのは大きな成果であった。また、天龍寺霊庇廟に関連するとみられる遺構の発見も特筆できる成果であった（Ⅰ-24）。

平安京左京域の調査のうち、三条四坊十町の調査（Ⅰ-02）は、柳池中学校（現、御池中学校）で実施したもので、京都市内では初めてとなる江戸時代の真鍮工房跡を検出した。炉跡や関連遺物に注目が集まった。

平安京右京域の調査のうち、三条四坊十三町（Ⅰ-10）で実施した調査は、都市計画街路葛野大路道路改良工事に伴うもので1988年の試掘調査から開始し、今回で全ての関連調査を終了した。三条大路などの平安京条坊に関係する遺構をはじめとして多くの成果をあげることができた。右京一条四坊十三町（Ⅰ-05）の調査は、平安時代後期にこの町の西側に造営された法金剛院の東御所とみられる池跡を検出した。

長岡京域で実施した右京一条四坊の調査（Ⅰ-13）は、新設街路建設に伴う継続調査である。今年度は、石見の現集落内に位置する箇所を調査し、中世から近世に続く

集落の遺構を多数検出することができた。すぐ東側には石見城の土塁や曲輪、堀などが残存している。

相国寺旧境内の調査（Ⅰ-16）では、相国寺に関連する遺構を検出した他、下層より飛鳥時代の竪穴住居群や奈良時代の掘立柱建物などが見つかり、古代出雲郷の姿を初めて確認することができた。

大宅廃寺の調査（Ⅰ-20）では、瓦積み基壇と礎石根固め石を検出し、既に発見している基壇とともに伽藍配置を考える上で大きな成果をあげることができた。

遺物として注目されたものは、平安京右京六条三坊六町（Ⅰ-11）の調査で、平安時代の井戸跡から出土した「人形（ひとがた）」があげられる。男女一対で出土したもので各々に名前が墨書されていた。立体的に精巧につくられ、いずれも腕を後ろに組んでいるものである。（巻頭カラー図版参照）

※ 報告の詳細については、研究所ホームページ

（<http://www.kyoto-arc.or.jp/>）- 活動内容 - 調査報告書（シリーズ）にpdf形式で公開しておりますのでご活用ください。

表 1 平成 16 年度調査一覧表 (1)

契約番号	遺跡名	略記号	調査住所	内容	委託者名	担当者	面積 (㎡)	期間	本書 番号	備考
H16-001	京都市内遺跡	2004BB-	京都市内一円	立会	京都市長 (国庫補助)	吉本・堀内		2004.04.01 ～ 2005.03.31		概報
H16-004	平安京跡(左京三 条四坊十町)・烏丸 御池遺跡	2003HK- RC002	中京区御池通富 小路西入東八幡 町 579 (柳池中 学校)	発掘	京都市長	上村・小檜 山・大立目・ 尾藤・藤村・ 東	2092	2003.08.06 ～ 2004.09.24	I -02	2004-10
H16-005	平安京跡(右京三 条四坊十三町、三 条大路、無差小路)	2003HK- IR012	右京区山ノ内西 八反田町	発掘	京都市長	能芝(勉)・ モンペティ	775	2004.01.22 ～ 2004.05.07	I -10	2004-01
H16-006	平安京跡・御土居 跡	2004HK- VH001・2	中京区壬生花井 町～下京区観喜 寺町	発掘	西日本旅客鉄道株 式会社	津々池・吉 村	76・272	2004.04.20 ～ 2004.05.31 ・2004.10.18 ～ 2004.12.17	I -12	2006
H16-008	平安京右京六条三 坊六町跡	2004HK- OM001	右京区西院西溝 崎町 14、22-2、 23-1、23-2	発掘	株式会社公益社	南	580	2004.04.19 ～ 2004.06.11	I -11	2004-02
H16-009	平安京右京三条一 坊七町	2004HK- UI019	中京区西ノ京星 池町 39	発掘	京都市長	布川	95	2004.05.06 ～ 2004.05.31	I -07	2004-03
H16-013	史跡・特別名勝 天龍寺庭園	2003UZ- TN001	右京区嵯峨天龍 寺芒ノ馬場町 68	確認 ・ 試掘	大本山 天龍寺	丸川	29	2004.02.23 ～ 2004.03.31	II -05	
H16-015	平安京左京三条四 坊十町・烏丸御池 遺跡	2004HK- RC003	中京区御池通富 小路西入東八幡 町(元柳池中学 校)	発掘	京都市長	尾藤	100	2004.05.21 ～ 2004.07.09	I -03	2004-04
H16-016	伏見城跡	2004FD- CL001	伏見区桃山町大 蔵地内	試掘	京都市長	丸川・桜井	1970	2004.05.06 ～ 2004.07.13	II -06	
H16-017	史跡名勝嵐山	2004UZ- OH001	右京区嵯峨天龍 寺芒ノ馬場町 11	試掘	財団法人小倉百人 一首文化財団	内田	471	2004.05.06 ～ 2004.06.04		2004-07
H16-020	相国寺旧境内	2004RH- SH004	上京区今出川通 烏丸東入相国寺 門前町 701	発掘	宗教法人相国寺	東・能芝 (妙)	1100	2004.06.21 ～ 2004.11.30	I -16	2004-14
H16-021	鳥羽離宮跡	2004TB- TB150	伏見区竹田浄菩 提院町 64	発掘	京都市長 (国庫補助)	山口	81.25	2004.05.25 ～ 2004.06.06	I -26	2004 国補
H16-022	平安京跡・烏丸丸 太町遺跡	2004HK- GX001	中京区光り堂町 地内(麩屋町～ 烏丸)	立会	京都市長	吉村	1600	2004.06.07 ～ 2004.12.21	II -02	
H16-023	醍醐寺子院跡	2004FD- DK001	伏見区醍醐中山 町 46-9 他地内	発掘	京都市長	吉村	150	2004.07.27 ～ 2004.08.16	I -21	2004-05
H16-024	史跡・名勝嵐山	2004UZ- RG001	右京区嵯峨天龍 寺芒ノ馬場町 7	試掘 ・ 確認	大藤産業株式会社	本	253	2004.07.01 ～ 2004.07.16		2004-11
H16-025	史跡・名勝嵐山	2004UZ- OH002	右京区嵯峨天龍 寺芒ノ馬場町 11	発掘	財団法人小倉百人 一首文化財団	内田・ト田	800	2004.06.07 ～ 2004.09.25	I -23	2004-07
H16-026	平安京右京一条四 坊十三町	2004HK- JH001	右京区花園伊町 41-7	発掘	財団法人泉谷病院	加納・モ ンペティ・ 津々池	700	2004.06.07 ～ 2004.08.28	I -05	2004-08

表1 平成16年度調査一覧表(2)

契約番号	遺跡名	略記号	調査住所	内容	委託者名	担当者	面積 (㎡)	期間	本書 番号	備考
H16-027	平安京右京三条一坊二町・朱雀大路・西ノ京遺跡	2004HK-UY001	中京区西ノ京梅尾町	試掘	西日本旅客鉄道株式会社	能芝(勉)	70	2004.07.1 ～ 2004.07.02		2004-06
H16-028	大宅廃寺・大宅遺跡	2004RT-QT001	山科区大宅鳥井脇町24	発掘	京都市長 (国庫補助)	網	36	2004.06.07 ～ 2004.06.25	I-20	2004 国補
H16-030	平安京右京三条一坊二町	2004HK-UY002	中京区西ノ京梅尾町	発掘	西日本旅客鉄道株式会社	能芝(勉)・ 近藤(奈)	466.5	2004.07.12 ～ 2004.09.03	I-06	2004-06
H16-031	長岡京跡	2004NG-NS003	西京区大原野石見町地内	発掘	京都市長	南・清藤	1943	2004.07.20 ～ 2005.02.14	I-13	2004-15
H16-033	平安京右京三条一坊	2004HK-YU001	中京区西ノ京梅尾町1番7、2番10	発掘	学校法人立命館	網・山口	3791	2004.07.27 ～ 2004.01.14	I-08	2004-16
H16-035	名勝 滴翠園(滄浪池)	2004HK-WI012	下京区堀川通花屋町下る本願寺門前町地内	発掘・ 立会	宗教法人浄土真宗 本願寺派本願寺	桜井	20	2004.08.09 ～ 2005.12.28	I-04	
H16-037	史跡・名勝嵐山	2004UZ-RG002	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町7	発掘	大藤産業株式会社	布川・本	700	2004.08.12 ～ 2004.11.12	I-24	2004-11
H16-040	上京遺跡	2004RH-KO001	上京区寺之内通新町西入妙顕寺前町515-24他	発掘	財団法人不審菴	吉崎	190	2004.08.23 ～ 2004.09.16	I-15	2004-09
H16-041	史跡旧二条離宮(二条城)・平安宮廂院跡	2004HK-KR002	中京区二条通竹屋町通堀川西入二条城町	発掘	京都市上下水道事業管理者	尾藤	43	2004.09.13 ～ 2004.11.08	I-01	2004-13
H16-042	平安京跡(左京六条三坊五・六町、楊梅小路、町尻小路)	2004HK-WD002	下京区楊梅新町東入上柳町224(旧尚徳中学校・楊梅幼稚園跡地)	発掘	京都市長	丸川・ト田・ 能芝(勉)・ 尾藤・モン ペティ	2250	2004.09.07 ～ 2005.07.08		2005
H16-043	伏見城跡	2004FD-MY001	伏見区桃山水野左近東町19(桃山中学校)	試掘	京都市長	モンペティ	35.1	2004.11.01 ～ 2004.11.05	II-07	
H16-044	史跡・名勝 嵐山	2004UZ-OK001	右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町10-1・10-14	発掘	京都市長 (国庫補助)	平尾	80	2004.10.26 ～ 2004.11.30	I-25	2004 国補
H16-045	法勝寺跡・岡崎遺跡	2004KS-JC001	左京区岡崎法勝寺町地内・南御所町地内	発掘	京都市上下水道事業管理者	吉村・長宗	182	2005.01.11 ～ 2005.03.09	I-17	2004-17
H16-050	平安京跡・烏丸丸太町遺跡(閑院宮邸跡)	2004HK-GW001	上京区京都御苑3	試掘	財団法人京都伝統建築技術協会	近藤(奈)	29.7	2004.11.01 ～ 2004.12.01	II-03	
H16-053	中臣遺跡	2004RT-NK082	山科区勸修寺東栗栖野町地内	発掘	京都市長	能芝(妙)	45	2005.03.22 ～ 2005.04.08		2005
H16-054	平安京跡(右京三条二坊十三町)	2004HK-RU001	中京区西ノ京三条坊町14番1他	発掘	株式会社ダイマルヤ	山口	178	2005.02.22 ～ 2005.03.08	I-09	2004-19
H16-055	淀城跡・長岡京跡	2004NG-YE003	伏見区淀池上町地内	発掘	京都市長	内田	130	2004.11.30 ～ 2005.03.02		2005
H16-056	常盤仲之町遺跡	2004UZ-SN001	右京区太秦蜂岡町他地内	立会	京都市長	津々池		2005.03.07 ～ 2005.03.09	II-04	

表 1 平成 16 年度調査一覧表 (3)

契約番号	遺跡名	略記号	調査住所	内容	委託者名	担当者	面積 (㎡)	期間	本書 番号	備考
H16-058	特別史跡・特別名勝醍醐寺三寶院庭園	2004FD-DT006	伏見醍醐東大路町	発掘・立会	宗教法人醍醐寺	近藤 (奈)	30	2004.12.16 ～ 2005.03.08	I -22	
H16-061	伏見城跡	2004FD-TK001	伏見区下板橋町・鷹匠町・竹中町	発掘	株式会社長谷工コーポレーション関西	平尾	766	2005.01.11 ～ 2005.03.25	I -27	2004-18
H16-062	白河街区跡・岡崎遺跡	2004KS-OJ001	左京区岡崎天王町地内	発掘	京都市長	近藤 (奈)・木下・本・小檜山	1,277	2005.03.09 ～ 2005.07.29		2005
H16-064	山科本願寺跡	2004RT-HG006	山科区西野左義長町 13-2	発掘	京都市長 (国庫補助)	小檜山	320	2005.01.17 ～ 2005.03.18	I -18	2005 国補
H16-065	史跡賀茂御祖神社境内	2004RH-UU004	左京区下鴨泉川町 59	発掘	宗教法人賀茂御祖神社	桜井	50	2005.02.14 ～ 2005.03.31	I -12	2004-12
H16-067	平安京跡 (左京八条四坊十・十五町)	2004HK-BQ005	下京区上之町地内	試掘	京都市長	布川	92	2005.03.01 ～ 2005.03.26	II -01	
H16-070	山科本願寺跡	2004RT-HG007	山科区西野山階町 30	発掘	京都市長 (国庫補助)	清藤	140	2005.03.01 ～ 2005.03.15	I -19	2005 国補
H16-072	平安京跡 (右京五条三坊三町)	2004HK-QP001	右京区西院矢掛町 16・17	発掘	小澤フサ枝	東・長戸	494	2005.03.11～ 2005.4.28		2005

本書番号欄： I - *・II - *は、本書第 1 章の報告番号を示す。

2005・2006 は、本書次年度以降にて報告することを示す。

備考欄： 2004 - *は、2004 年度発掘調査分の京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報番号を示す。

2004 国補は、『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005 年 3 月 31 日にて報告を示す。

2005 国補は、『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年 3 月 31 日にて報告を示す。

概報は、『京都市内遺跡立会調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005 年 3 月 31 日 (4～12 月調査分)

および、『京都市内遺跡立会調査概報 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006 年 3 月 31 日 (1～3 月調査分)

にて報告を示す。

表2 その他契約一覧表

契約番号	内容	対象	所在地	委託者	担当者	備考
H16-010	保存処理	東京都港区内	東京都港区芝	東京都港区教育委員会	竜子	
H16-011	測量	京都大学農学部構内遺跡	京都市左京区北白川追分町	鴻池・東洋・公成特定建設工事共同企業体	宮原	
H16-018	測量	大報恩寺境内遺跡	京都市上京区七本松通五辻老松町他	関西文化財調査会	宮原	
H16-019	保存処理	史跡出島和蘭商館跡	長崎市出島町	長崎市教育委員会	竜子	
H16-029	調査支援業務	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市内	宜野湾市教育委員会	辻（純）	
H16-032	保存処理	落合町・車塚古墳青銅鏡	岡山県落合町	岡山県落合町	竜子	
H16-034	測量	菟道遺跡	宇治市菟道藪里	文化財京都	宮原	
H16-036	保存処理	東京大学構内	東京都文京区本郷	国立大学法人東京大学	竜子	
H16-038	遺物撮影	長岡京跡	長岡京市奥海印寺東条	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	村井・幸明	
H16-039	分布図作成システム導入	宜野湾市内	宜野湾市瑞慶覧地区	宜野湾市	辻（純）	
H16-046	整理	栢ノ杜遺跡	京都市伏見区醍醐南端山町	京都市（国庫補助）	南	
H16-047	整理	小野瓦窯跡	京都市左京区上高野小野町	京都市（国庫補助）	吉崎	
H16-048	整理	鳥羽離宮跡	京都市伏見区竹田浄菩提院町	京都市（国庫補助）	山口	
H16-049	整理	大宅廃寺跡	京都市山科区大宅鳥井脇町	京都市（国庫補助）	網	
H16-052	測量	八幡市内遺跡	八幡市内	八幡市	宮原	
H16-057	測量	平安京跡	京都市南区東九条殿田町	古代文化調査会	宮原	
H16-059	遺物撮影	長岡京跡	長岡京市内	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	村井・幸明	
H16-060	整理	史跡・名勝嵐山	京都市右京区嵯峨天竜寺芒ノ馬場町	京都市（国庫補助）	平尾	
H16-063	資料整理	基地内遺跡ほか	沖縄県宜野湾市内ほか	宜野湾市教育委員会	辻（純）	
H16-066	測量	平安京跡	京都市下京区東洞院四条下元悪王子町	古代文化調査会	宮原	
H16-068	遺物撮影	長岡京跡	長岡京市内	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	村井・幸明	
H16-069	遺物撮影	長岡京跡	長岡京市内	財団法人長岡京市埋蔵文化財センター	村井・幸明	
H16-071	遺物復元	宮津城跡	京都府宮津市内	株式会社文化財サービス	村上・出水	
H16-073	展示業務	平安京跡・史跡旧二条離宮	元離宮二条城	京都市	中村	
H16-075	報告書刊行	平安京跡発掘・立会	京都市内一円	京都市（国庫補助）	吉本	
H16-076	測量	名勝滴翠園	京都市下京区堀川通花屋町下本願寺門前町	花豊造園株式会社	宮原	

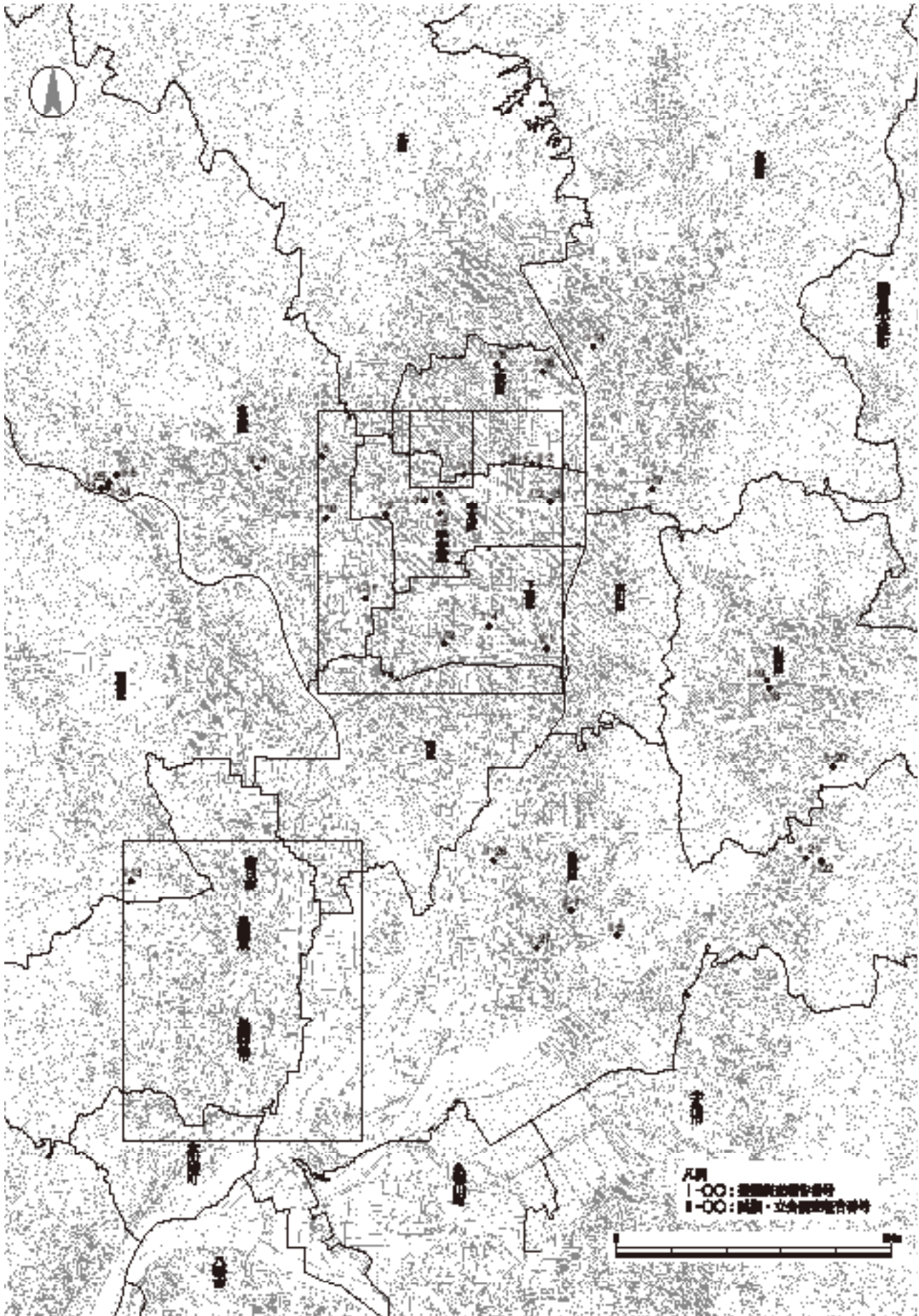


図1 調査位置図

1 史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮廡院跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調概報 2004-13 『史跡旧二条離宮（二条城）・平安宮廡院跡』 2005.2.28

経過 二条城北側の竹屋町通内で公共下水道埋設工事の計画が持ち上がり、縦坑部分の発掘調査を実施することとなった。本調査は2002年度の調査に続く2次調査である。調査地は、史跡旧二条離宮（二条城）内にあたり、平安時代には平安宮廡院の北端に位置する。

遺構 桃山時代から明治時代までの遺構を検出した調査面は、6面を数えた。第1面では、江戸時代末期から明治以降にかけての路面、第2～4面では、江戸時代前半期から後半期の路面を3面、第5面では、江戸時代初頭の整地層、第6面では、桃山時代から江戸時代初頭の土取穴を検出した。

遺物 平安時代から明治時代にかけての遺物が出土した。平安時代の遺物は、混入遺物として、第6面の土取穴などから、瓦類が多く出土した。土器類は少なく、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・黒色土器・瓦・輸入青磁・白磁などである。室町時代の遺物は、混入で第5面より少量の土師器・焼締陶器と多くの瓦類などが出土した。桃山時代の遺物は、少量の土師器・瓦（金箔瓦）などが第6面の土取穴などから出土している。江戸時代の遺物は、多くは第1面の路面構築土などから出土している。国産施釉陶器・焼締陶器・染付・国産磁器・棧瓦などがあり、江戸時代末期（19世紀）の遺物が多い。

小結 調査地は、近世には、二条城を中核とした京都所司代屋敷など江戸幕府の役所などが建てられており、この地域一帯は、京都における官庁街として機能していた場所であった。しかし、明確な遺構は、二条城造営時以降のものと考えられるもので、それ以前の明確な遺構は検出できなかった。調査では、路面と側溝のあり方から、江戸時代初頭以降の二条城北側の土地利用変遷が確認できた。

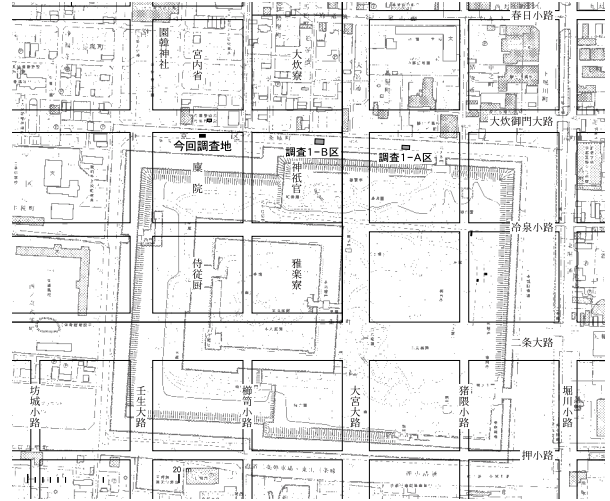


図2 調査位置図

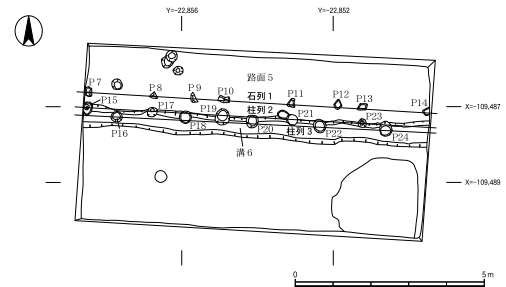


図3 第2面遺構平面図

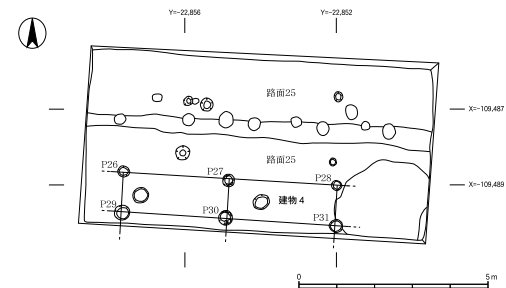


図4 第3面遺構平面図



図5 第2面全景

2 平安京左京三条四坊跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-10『平安京左京三条四坊十町跡』2004.12.18

経過 京都市立柳池中学校内の校舎および複合施設の新築整備事業工事に伴う調査である。当地は平安京跡・烏丸御池遺跡に含まれる。調査は対象地を 1 区と 2 区に分けて実施した。1 区は、旧校舎基礎・地下室・水槽などを考慮して、南北に長い不整形の調査区となった。

遺構 弥生時代から古墳時代・平安時代・鎌倉時代から室町時代・桃山時代・江戸時代に分かれ、江戸時代以降の遺構が大半を占め、他の時期の遺構は少ない。

第 1 面では、江戸時代の遺構を検出した。工房・石垣・建物・井戸・竪穴（石室など）・土壇・柱穴などが多数あり、かなり重複する。第 2 面では、鎌倉時代から江戸時代前半の石垣・建物・井戸・竪穴・土壇・柵列などを検出した。第 3 面では、平安時代後期から室町時代の井戸・竪穴・土壇・溝などを検出した。第 4 面では、平安時代の井戸・土壇・柱穴などを検出した。第 5 面では、1 区のみで平安時代以前の遺構を検出した。

遺物 弥生時代から近代にわたる各時代の遺物が出土した。内容は、土器陶磁器類・瓦類・土製品・木製品・金属製品・骨角製品・ガラス製品・石製品・動植物遺体などの種類がある。遺物のほとんどが土器類で、次に瓦類・土製品で、他の種類の遺物は少ない。遺物の時期は、江戸時代に属する遺物が 7～8 割を占め、他の時期のものは少ない。

弥生時代から古墳時代の遺物は、中期後半（IV 様式後半）から古墳時代前期（庄内式併行期）の土器類である。高杯・器台・壺・甕などがある。

小結 今回検出した金属生産関連工房は、出土した土器などから、江戸時代の前期、約 30 年間にわたり、操業を行ったことが明らかとなった。特に北側の廃棄土壇には、坩堝などの工具や炭などの生産廃棄物が大量に捨てられていたことから考え、町屋の中における大規模な工房であった様子がうかがえる。

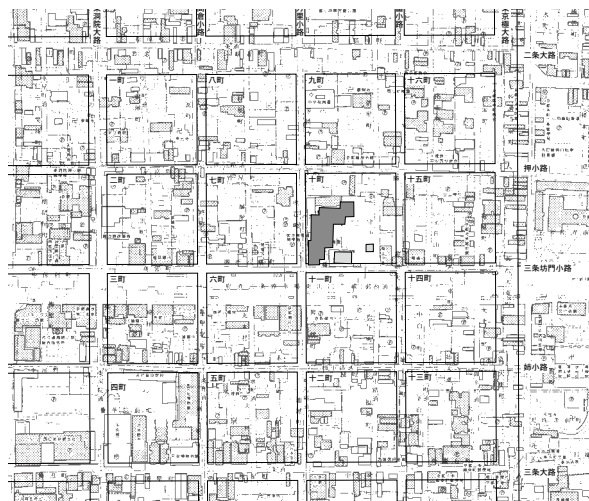


図 6 調査位置図

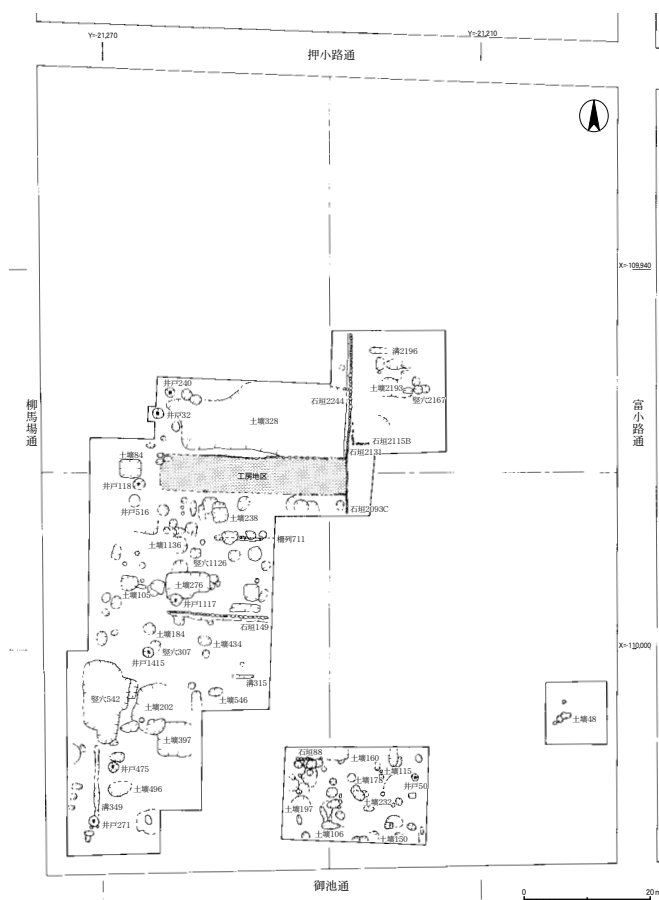


図 7 江戸時代前期遺構配置図

3 平安京左京三条四坊跡2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-4 『平安京左京三条四坊十町跡』 2004.9.30

経過 元京都市立柳池中学校敷地内の校舎および複合施設の新築・整備事業の一環として、京都市消防局による耐震性防火水槽の設置に伴う調査である。

遺構 第1面では、江戸時代後期や前期の石組み井戸・室・甕をすえた遺構などを検出した。第2面では、江戸時代前期の土壇・柱穴・石組み遺構を検出した。第3面では、室町時代の石組み東西溝・柱穴・南北溝を検出した。第4面では、平安時代末期の井戸や平安時代後期の土壇などを検出した。第5面では、古墳時代の流路を検出し、埋土から土師器甕の体部が出土した。

第1面で検出した室(SX2)は、南北2.5m、東西1.3m以上で、深さは約2.0mである。西壁下で礎石を3基検出した。室の壁は木材で押さえていたものと考えられる。横棧を組んだ縦板組の室の可能性もある。この室より鹿角製品などがまとめて出土した。

遺物 出土遺物は土器類が大部分を占め、他の遺物は少ない。調査では、第1面から第5面でそれぞれ遺物が出土したが、新しい時代の遺構の埋土に、古い時代の遺物が混入している。出土量としては、江戸時代後期以降、江戸時代前期、室町時代・鎌倉時代、平安時代と少なくなる。

小結 調査地の町内には角細工を生業としている店の存在が、元禄時代の『京独案内手引集』に記されている。また、江戸時代の1685年(貞享2年)刊行の『京羽二重』には、「三条坊門通(御池通)とみのかうじ(富小路)に目貫小柄類」の店などと記述がある。今回の調査地から出土した遺物には、多数の角の先端部分の切り落とし、あるいは角の芯の海綿状部分の切り落としや加工品などが多くあり、江戸時代後期には前記店と関係のある骨細工の工房の存在が考えられる。

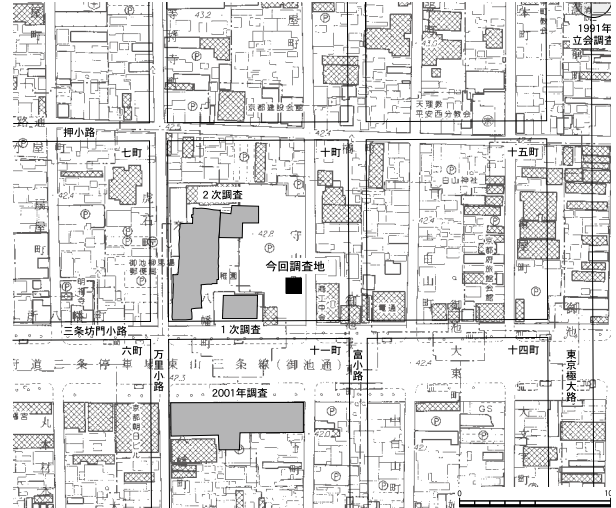


図8 調査位置図

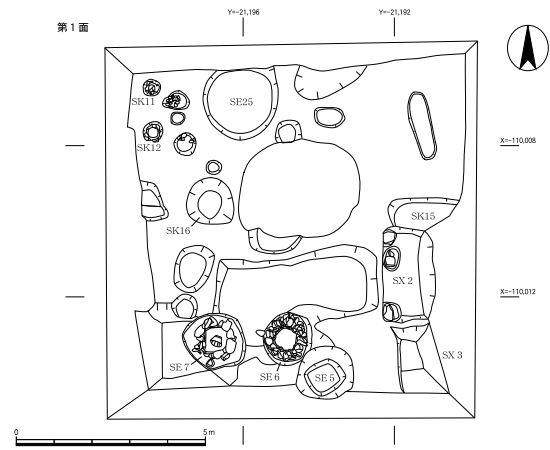


図9 第1面遺構平面図

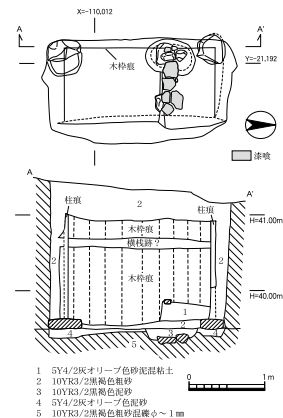


図10 SX2実測図

4 名勝滴翠園・平安京左京七条二坊跡

経過 西本願寺名勝滴翠園保存整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘・立会調査である。調査は 1996 年度から継続しており、今回は第 12 次調査となる。今年度の調査範囲は、おもに滄浪池を東西に二分する龍背橋から東側の部分と、黄鶴台の前面部分で実施した。

遺構 Fゾーンでは、新たに 14 個の石を検出した。Eゾーンでは、新たに 38 個の石を検出した。Dゾーンでは、新たに 21 個の石を検出した。Cゾーンでは、新たに 25 個の石を検出した。Bゾーンでは、新たに 1 個の石を検出した。Aゾーンでは、新たに 25 個の石を検出した。P・Qゾーンでは、新たに 28 個の石を検出した。M・N・Oゾーンでは、新たに 7 個の石を検出した。

遺物 今回の調査は基本的に表土剥ぎのみで、景石の周囲を掘り下げたのはごく一部だけである。遺物は混入が多く、平安時代から江戸時代までの遺物が同じ土の中から出土している。

小結 今回の調査では、ほとんどのゾーンで表土を剥ぐのみであったので、出土遺物が少なく小片である。このため、遺物から詳しい年代を特定することは難しい。また、今回新たに検出した石のほとんどは、雨水による流土によって自然に埋没したものや、樹木の成長によって樹根で隠れてしまったものと考えられるため、ここでも、年代特定は難しい。しかし、後世に追加された園路や憶昔亭、それに伴う中門や飛び石・東待合などの付設工事によって、景石の移動がなされたと考えられる部分を写真資料などから確認することができた。

(桜井 みどり)

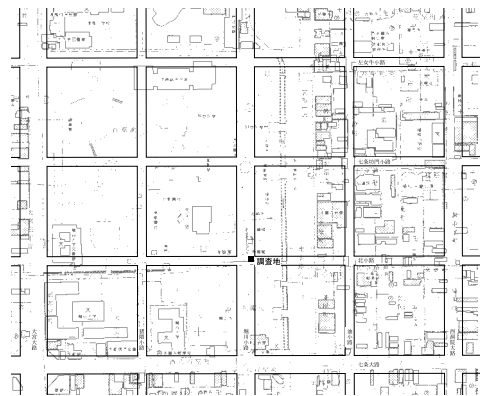


図 11 調査位置図

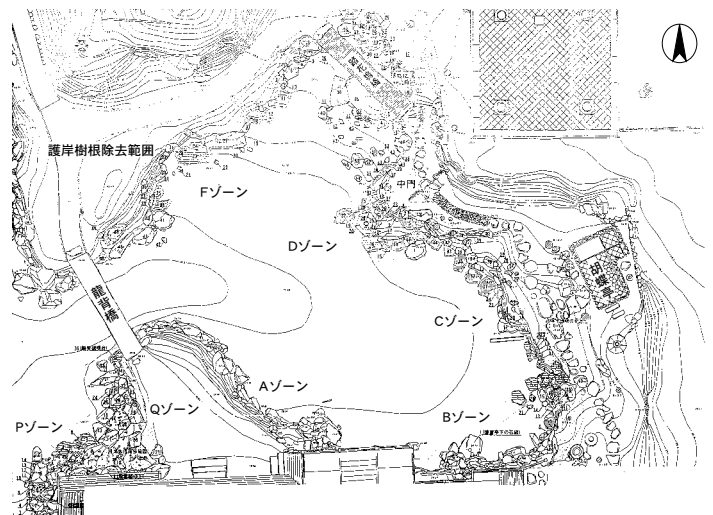


図 12 調査区配置図



図 13 調査値全景 (西より)

5 平安京右京一条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-8『平安京右京一条四坊十三町跡』2004.10.31

経過 泉谷病院移転新築工事に伴う発掘調査である。隣接する既調査では平安時代後期の池跡などを検出しており、関連遺構の検出が予測されたため工事に先立ち発掘調査を実施することとなった。

遺構 北東から南西にかけて、平安時代後期から鎌倉時代の池の岸を約22mにわたって検出した。池岸部の堆積状況は、礫敷の洲浜層が最も厚い部分で0.3m、次に砂敷の洲浜層とその地業が最も厚い部分で0.3mあった。それぞれに対応する池の堆積土も2層あり、この池は少なくとも2回、園池として整備されたことがわかる。陸部には黒色粘質土層に代表される平安時代後期の整地層が約0.2～0.7mの厚さで数層あり、その上には礫が2～3cmの厚さで敷かれていた。それより下は旧流路の堆積層と認められる砂礫層があった。調査区東側に設けた拡張区では南北方向で西側に落ちる池岸を検出した。

遺物 出土遺物は土器が大部分を占める。そのほとんどが平安時代後期から鎌倉時代初頭に納まるが、平安時代前期・中期に属する破片が少量混入していた。大部分は池の汀部分から出土した。旧流路の堆積土からは土師器の小片を検出した。第3面の土壌からは相当数の遺物が出土した。中世から近世に属する遺物は少ないが、耕作土層とさらに古い耕作土層から出土した。なお、調査開始時の重機掘削中に縄文時代の石鏃が出土した。

小結 今回の調査成果と、既往の周辺調査から、右京一条四坊十三町内には平安時代後期から鎌倉時代初頭までの間、南半部に園池を有する1町規模の邸宅があったことがわかってきた。この邸宅は、『中右記』長承4年(1135)三月二十七日の条にある北斗堂供養の後に鳥羽上皇と待賢門院璋子が「東新御所」に渡ったという記述に相当するものとみられる。

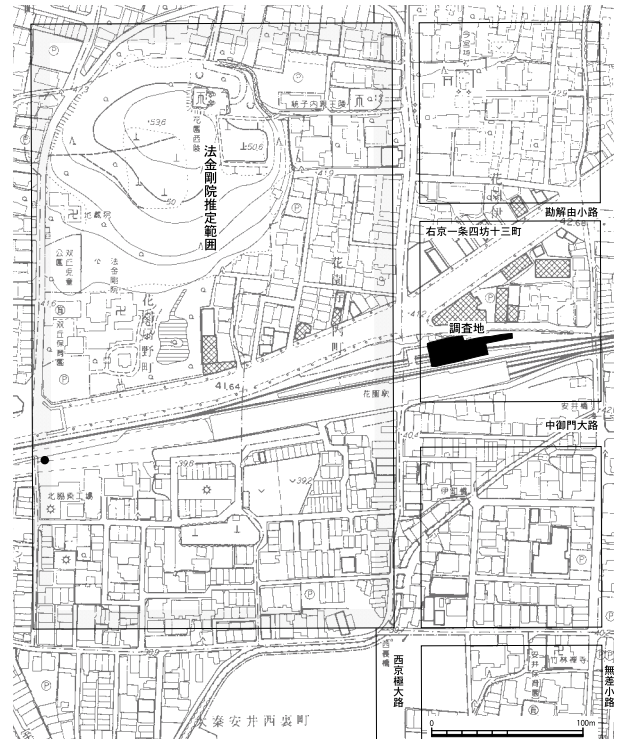


図14 調査位置図

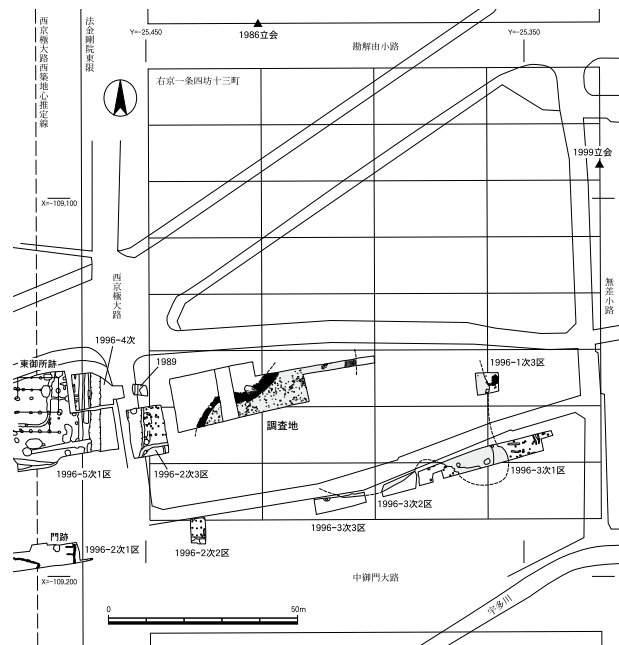


図15 周辺遺構配置図

6 平安京右京三条一坊跡 1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6『平安京右京三条一坊二町跡』2004.10.29

経過 この調査は、(仮称) JR 二条駅東 NK ビル新築工事に伴い実施した発掘調査である。平安京条坊では敷地のほぼ中央から東側が朱雀大路に該当し、西側は右京三条一坊二町の宅地内の東端部にあたる。右京三条一坊二町は平安京諸官衙のうち穀倉院が所在したところである。

遺構 検出した遺構は、平安時代前期の溝、平安時代末期から鎌倉時代初頭と推定される溝、整地層(湿地状遺構 69)、江戸時代中期以降の池状遺構(湿地状遺構 11)、耕作溝群、江戸時代後期から明治時代の耕作に伴う用排水路(溝 1)、土壌(肥溜)などである。

溝 70 は、調査区の西端を南北に縦断する南北溝である。溝断面の形状はレンズ状で、幅は約 190cm、深さ約 40cm である。中心が推定朱雀大路西側築地心より、西約 4 m に位置することから、穀倉院に関連する内溝である可能性が高い。溝 64 は、逆台形状を呈し、幅 1 ~ 1.3 m、深さ約 50cm である。溝の中心が平安京条坊の推定朱雀大路西側築地心より東約 4.5 m に位置しており、12 世紀後半代の朱雀大路西側溝と推定される。

遺物 弥生時代・平安時代前期・平安時代末期から鎌倉時代・江戸時代中期・江戸時代後期から明治時代の遺物が出土している。土器類では近世のものが大半を占める。平安時代末期から鎌倉時代初頭の出土遺物はほとんどが瓦類である。湿地状遺構 69 の埋土や、溝 64 上面の整地層からのものが主体である。平安時代の遺物は溝 64・溝 70 がある。溝 64 は 12 世紀後半代、溝 70 は 9 世紀中頃までの遺物が出土している。

小結 今回の調査の平安時代の遺構としては、朱雀大路の西側溝と、穀倉院に関連する二町の東側内溝を検出した。朱雀大路西側溝の埋没年代は、出土した土器などから平安時代末期頃と推定される。

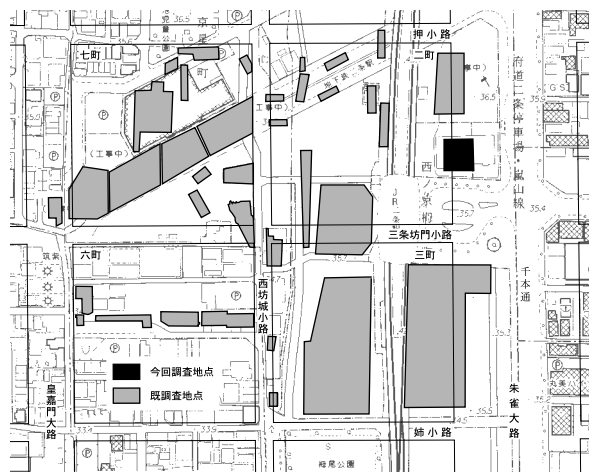


図 16 調査位置図

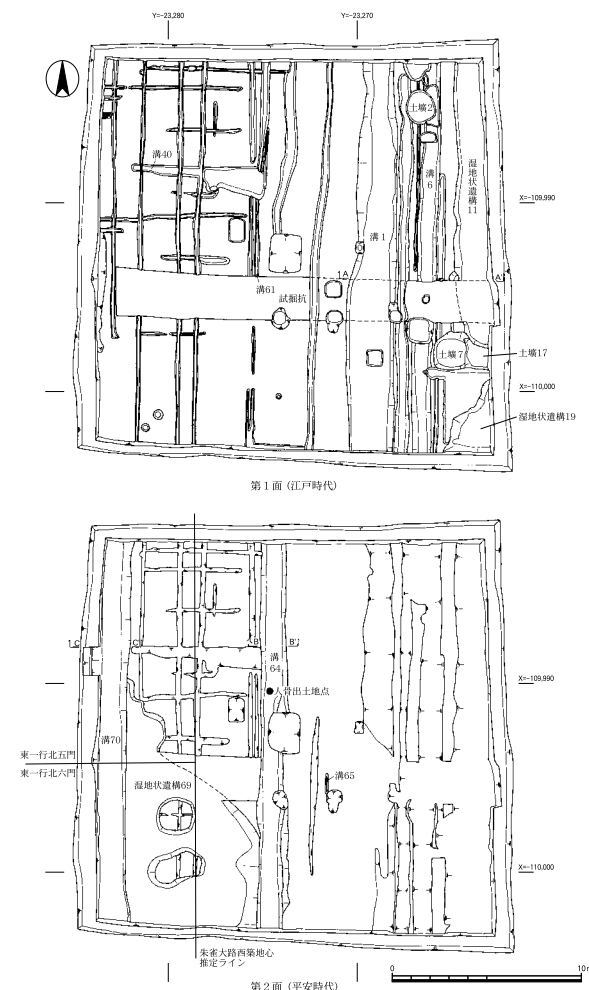


図 17 遺構平面図

7 平安京右京三条一坊跡 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004- 3 『平安京右京三条一坊七町跡』 2004. 7.30

経過 調査は、京都都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）都市計画事業二条駅地区土地区画整理事業に伴うもので、同事業関連の調査としては1992年度から続く19次調査となる。

遺構 地山直上で平安時代から江戸時代の遺構を検出した。遺構は、希薄で平安時代前期では土壌58を検出したのみである。その他、時期不明ではあるが、南北方向の柱列を検出した。江戸時代の遺構としては、溝と柱穴列を検出した。

遺物 出土遺物は、平安時代から江戸時代のものが出土した。江戸時代のものが大半である。平安時代の遺物は、後世の遺構からの出土が多く、小片である。また瓦類は、小片の軒丸瓦片が1点、丸瓦と平瓦が、後世の遺構から数十点出土している。中世の出土遺物は、少なく小片で、江戸時代の出土遺物は、土取穴から主に出土しているが、全体の形がわかるものは少ない。

小結 調査区西半部で検出した南北柱穴列は、調査区北側の御池通の1997年度調査で検出した南北棟建物SB1と、調査区南側の2001年度調査の七町地区で検出した南北棟建物SB20をつなぐ線上に位置する。調査区の南北柱間約1.8mは、前述の検出した南北棟建物の柱間とほぼ一致する。1997年度調査と2001年度調査の遺構から、確認できた南北柱穴列の長さは、約56.5mに及び、31間を復元できる。両調査の報告では、これらの柱穴列を南北建物としたが、2条の柵列であると考えるのが妥当と思われる。この遺構は、既往調査結果や出土遺物から平安時代中期のものとみられる。

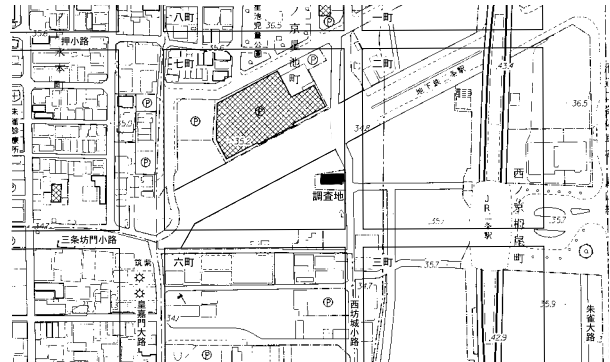


図18 調査位置図

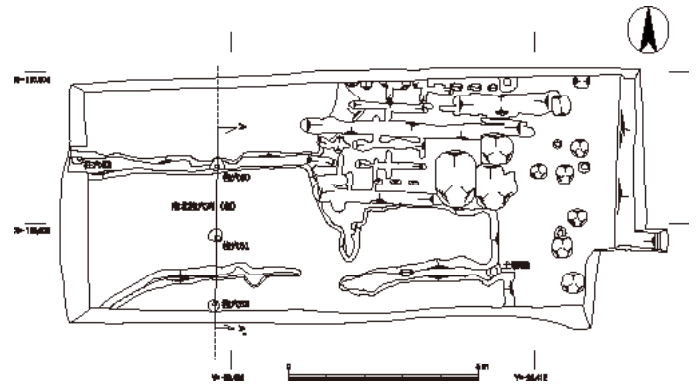


図19 遺構平面図

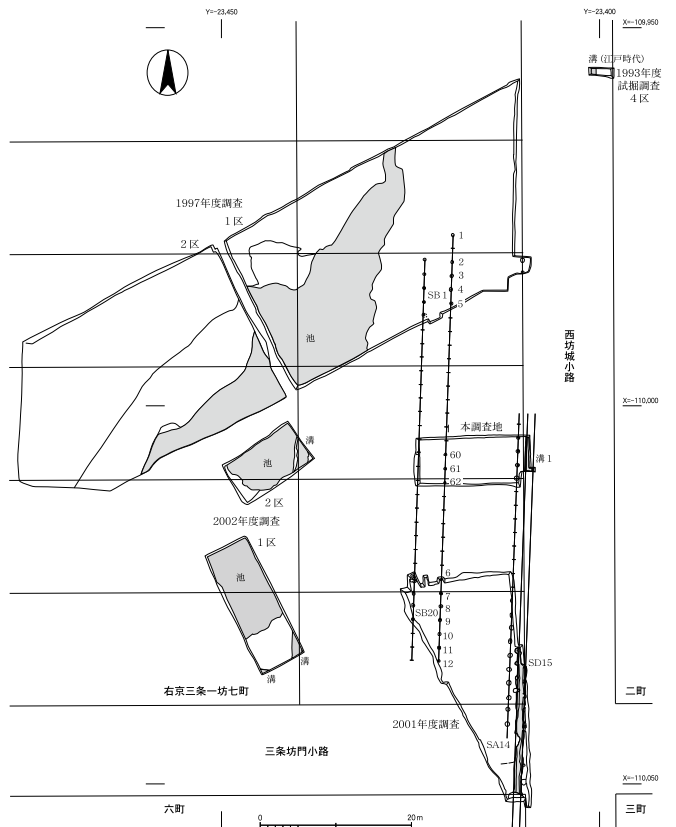


図20 周辺遺構配置図

8 平安京右京三条一坊跡 3

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-16『平安京右京三条一坊四町跡』2005. 3.31

経過 今回の発掘調査は、立命館大学法科大学院（仮称）新築工事に先だって実施した。調査地は平安京右京三条一坊四町にあたり、藤原良相邸である「西三条第」の有力な候補地となっているが、直接「西三条第」に関わる遺構はまだ確認できていないのが現状である。

遺構 検出した主な遺構は、平安時代前期から中期の遺構が掘立柱建物 1 棟・礎敷き遺構、平安時代後期から鎌倉時代の遺構が門遺構・朱雀大路西側溝・姉小路南側溝・石敷き流路で、江戸時代から明治時代の遺構が西高瀬川舟入り本体と舟入りに流れ込む流路・建物 2 棟・南北柵列 2 条・石垣などである。中近世の遺構は耕作小溝群だけであるが、遺構面はこれら耕作地としての土地利用に伴い広範囲にわたり削平を受けていた。

遺物 出土遺物には、瓦・土師器・須恵器・黒色土器・緑釉陶器・灰釉陶器・輸入陶磁器・国産施釉陶器・染付・焼締陶器・木製品・金属製品がある。大半が瓦類であり、朱雀大路西側溝および朱雀大路路肩整地から多く出土している。瓦類には軒平瓦・軒丸瓦・平瓦・丸瓦・鴟尾がある。土器類では 9 世紀中頃の土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。朱雀大路西側溝新段階の溝から 12 世紀中頃の土師器・須恵器が、旧段階のものからは 11 世紀中頃の土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。

小結 今回の調査成果は大きく見て、平安時代では朱雀大路および姉小路に関する条坊遺構を確認するとともに不明瞭ながら四町内の宅地利用の様相を復元するための資料を得ることができたことである。また、明治時代では西高瀬川に関連する舟入り遺構を発見したことである。

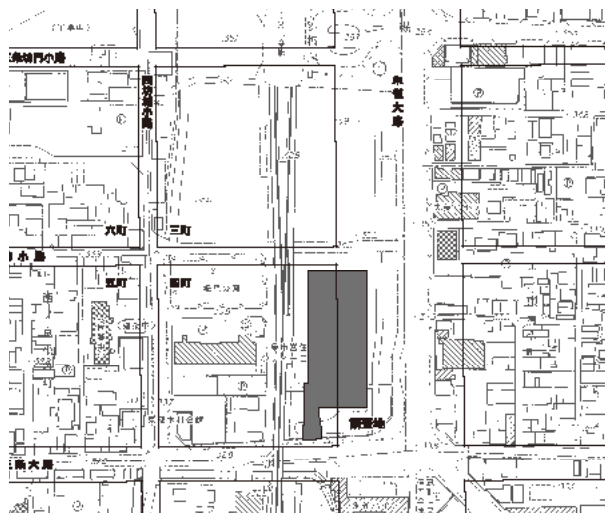


図 21 調査位置図

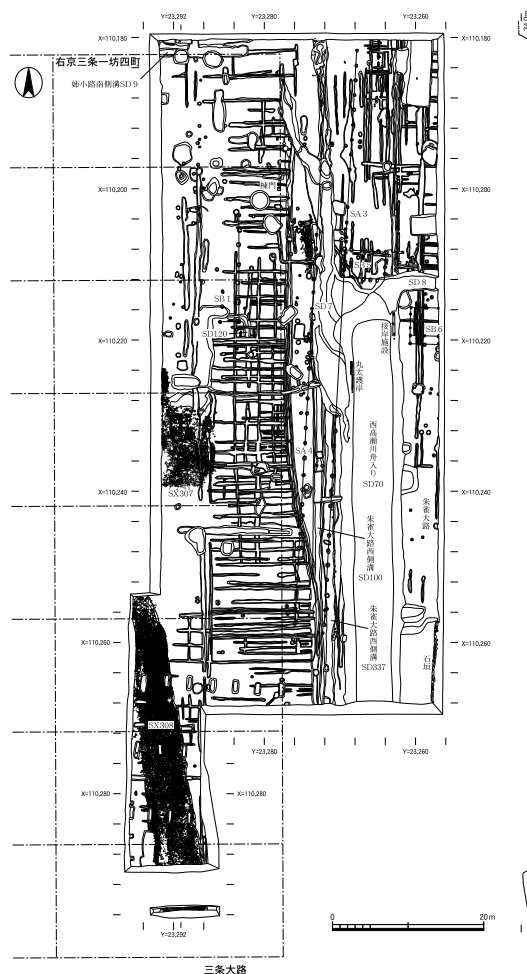


図 22 遺構平面図

9 平安京右京三条二坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-19『平安京右京三条二坊十三町跡』2005. 5.31

経過 今回の調査は、西大路御池マンション（仮称）新築工事に先立って実施した。調査地は平安京右京三条二坊十三町の東部にあたる。調査地に関する文献史料はないが、既往の周辺の調査では、平安時代の建物跡、条坊関連の溝や川跡、井戸、土壇など多数の遺構が検出されている。十三町内では1984年度に当敷地内において試掘調査を行い、平安時代中期の溝を3条検出している。

遺構 遺構総数は5基と非常に少ない。

柱穴 Pit 1は、径25cm、深さ15cmの円形。平安時代前期の須恵器壺底部が1点のみ出土している。関連する遺構は確認できず、この遺構の時期は特定できない。

土取り跡 SX 4は、調査区北端部分に約12mを検出した。輪郭は不明瞭だが、砂礫を避けて掘り進められた様子が確認できた。埋土には15世紀頃の土師器や、それ以前の瓦器・山茶椀、平安時代前期の緑釉陶器・須恵器・瓦などが出土している。

遺物 平安時代から江戸時代の遺物が出土している。瓦・土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・国産施釉陶器・染付・焼締陶器などであるが、量は非常に少なく、いずれも小片で時期的なまとまりも見られない。

小結 調査地は、東に野寺小路川、西は道祖大路の川に挟まれた宅地内にあたることから利用状況の解明が期待された。しかしながら、調査区の大部分が近代の田畑造成による削平を受け、近代の削平をまぬがれた部分でも、中世の土取りによる攪乱で平安時代の遺構面を確認することはできなかった。

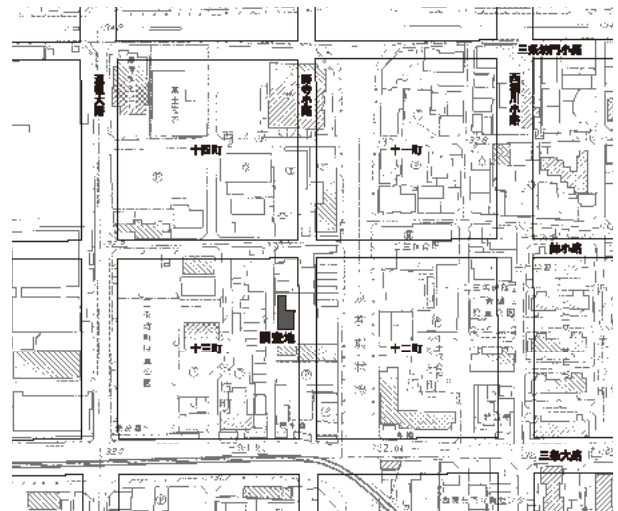


図23 調査位置図

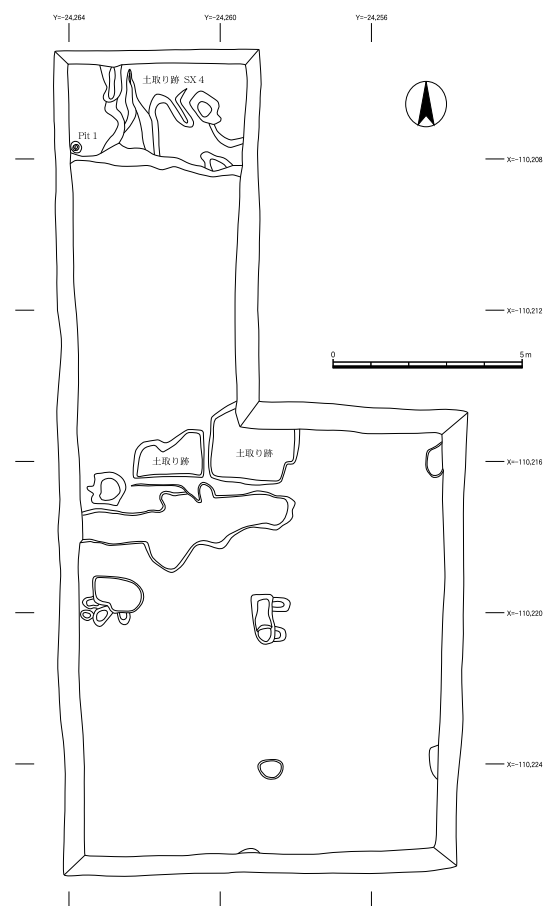


図24 遺構平面図

10 平安京右京三条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004- 1 『平安京右京三条四坊十三町跡』 2004. 6. 30

経過 葛野大路道路改良事業に伴い、現在の三条通以北において、発掘調査を実施した。葛野大路改築に伴う発掘調査は 1988 年から継続して行われており、今回の調査は 12 次にあたり、太子道以南では最後となる。

調査予定地域は、宅地と耕作地にまたがり、残土を場内処理する関係から 1 区、2 区の調査区に分けて実施した。

遺構 1 区の遺構は、いずれも耕作土直下で地山を切り込むかたちで検出した。検出した遺構は、平安時代前期の建物、柵、溝、平安時代末期ないしは鎌倉時代以降と推定される建物、江戸時代末期から近代初頭の耕作溝、明治時代の瓦窯 2 基（だるま窯）とそれに伴う瓦溜と土取穴である。

2 区では、平安時代の溝や近世および近代の瓦溜を検出した。近世・近代の大型土壌でそれ以前の遺構はほとんど残存していない。わずかに、平安時代前期と推定できる溝を検出した。

遺物 1 区では、縄文時代の石器類から明治時代の遺物まで幅広く出土した。出土遺物の大半は、近代の瓦窯に伴う瓦溜の瓦類と窯体片である。土器・陶磁器類には平安時代前期の椀・皿類、江戸時代後半以降の陶磁器類などがある。

2 区では、土取穴や瓦溜から、瓦類が多量に出土した。また、少量ながら平安時代から江戸時代の土器・陶磁器類も含まれている。

小結 平安時代の遺構は、明治時代に操業されていた瓦窯に関連する土取穴と瓦溜で大半は壊されていた。しかし、1 区で 8 次調査で報告されていた柱穴につながる柱穴を検出し、2 間×5 間の建物に復元できた。また、1 区では無差小路の西側溝、2 区では三条大路の北側溝と推定できる溝を部分的ではあるが検出した。

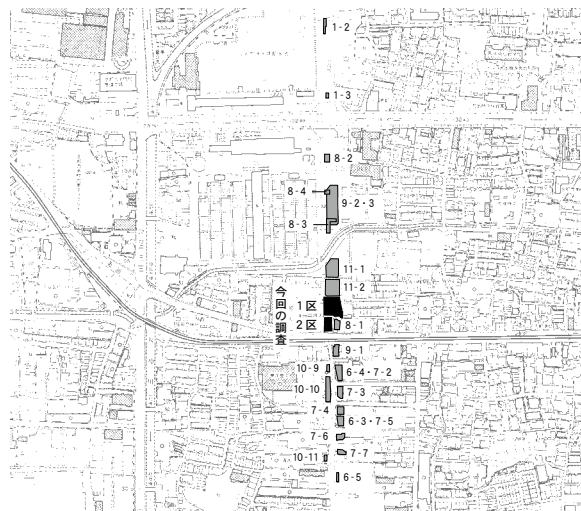


図 25 調査位置図

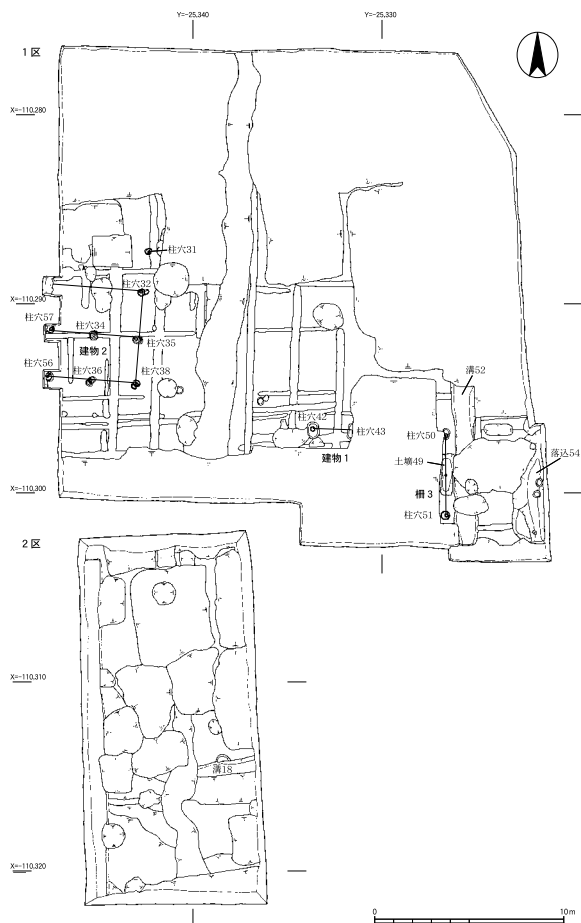


図 26 遺構平面図

11 平安京右京六条三坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004- 2 『平安京右京六条三坊六町跡』 2004. 7.30

経過 株式会社公益社による施設建設に伴う調査を実施した。調査区を馬代小路東側溝推定地を含むように、東西 20 m、南北 30 m に設定した。調査の結果、平安時代の掘立柱建物 3 棟、井戸 1 基、流路化した馬代小路、中世以降の素掘り溝などを検出した。なお、井戸からは人名が墨書された男女 1 組の人形が出土しており、当時の精神生活を知る上で貴重な資料を得た。

遺構 平安時代前期の遺構として、掘立柱建物 2 棟、井戸 1 基（覆屋）、溝などを検出した。溝は、馬代小路東築地推定ライン近くに存在することから、馬代小路東築地内溝である可能性がある。平安時代後期の遺構として、掘立柱建物 1 棟、流路 1 条、溝 4 条などを検出した。流路は、幅 5 m 以上、深さ 0.5 ～ 0.6 m を測る。馬代小路の道路部分全面が川と化しており、直線的な流れは人工的に掘削したものであることが明らかである。

遺物 全体に遺物の出土量は少ない。平安時代の土器類、瓦類、木製品が主に出土している。土器類は、平安時代前期のものが多く、土師器、須恵器、黒色土器が主で、緑釉陶器、灰釉陶器、輸入陶磁器は細片を含めてもほとんどない。

人形は、男性像が高さ 23cm、幅約 4 cm、厚さ約 2.5cm、女性像が高さ 16.5cm、幅 2.5cm、厚さ 1.5cm、いずれも一木で削りだして立身を表している。「葛井福万呂」、「檜口阿古□□」の墨書がある。

小結 前期の遺構は、井戸から出土した土器によって 9 世紀の前半には廃絶しており、平安遷都当初の宅地にもなうものとみられる。

男女 1 組の人形は、その立体的な作りとそれぞれに人名が記されていた点など、今まで類例のないものである。人形の出土状況、人形の精密な作り方などは、従来出土したものとは異なっており、その目的も異なっている可能性が高い。

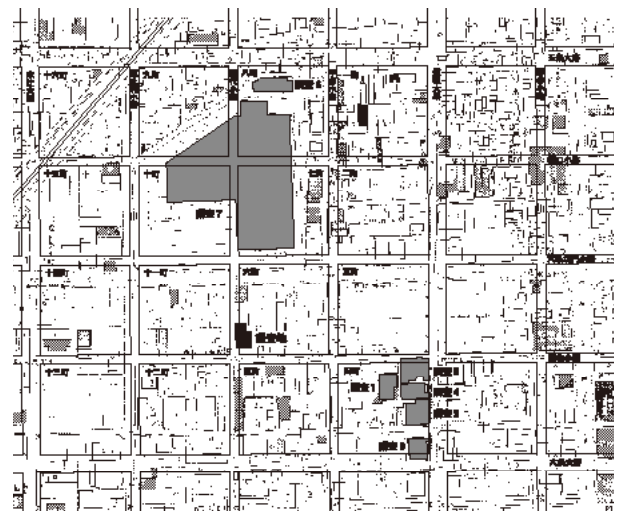


図 27 調査位置図

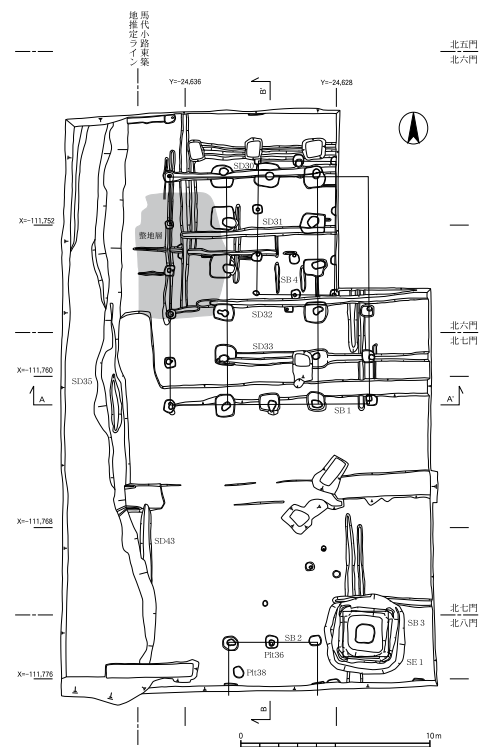


図 28 遺構平面図

12 平安京左京八条一坊跡・御土居跡

経過 今回の調査は、JR 山陰線の複線工事に伴う調査である。調査地は、平安京左京八条一坊一町から塩小路を跨ぐ地点に位置し、朱雀大路の東端に沿う位置にある。近世では、豊臣秀吉による御土居が調査地の東側隣接地を南北方向に築かれた場所にもあたる。調査は、東西幅 3.3m のトレンチを 45 度の法面をつけての掘削となったので 1.45m の最深部で、幅は 0.60m しか調査できなかった。

遺構 東端の側溝掘形を除き、調査区全体から堀の堆積土層を検出した。堆積土層は砂と礫が互層をなしている。西から東に傾斜した形で堆積しており、東側の堆積土層が一番新しい。第 5 層において 19 世紀代の銅版転写の染付小片が検出されており、第 1 層から第 4 層はそれ以後に埋没したことがわかる。最下層は、検出した染付小片から判断すると堆積は 18 世紀までのものと思われる。

遺物 堆積土層の第 1 層は、出土遺物がない。他の堆積土層からの出土数も極端に少なく、磨滅が激しく、また小片である。出土した土器の器種は、江戸時代の陶器や磁器のみである。

小結 調査地は、東に隣接して御土居が南北に造営されていた。したがって、今回検出した堆積土層は、御土居の堀の西肩部に近い部分での最終埋没時期の様相を示しているものとみられる。山陰線が敷設された明治 30 年（1897）頃までの堆積土層である。

（津々池 惣一）

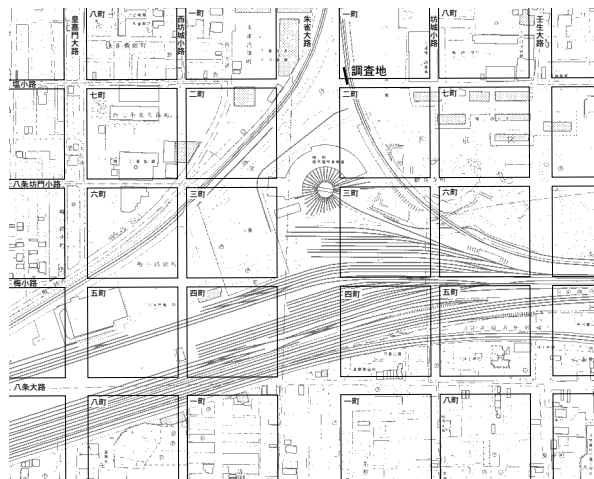


図 29 調査位置図

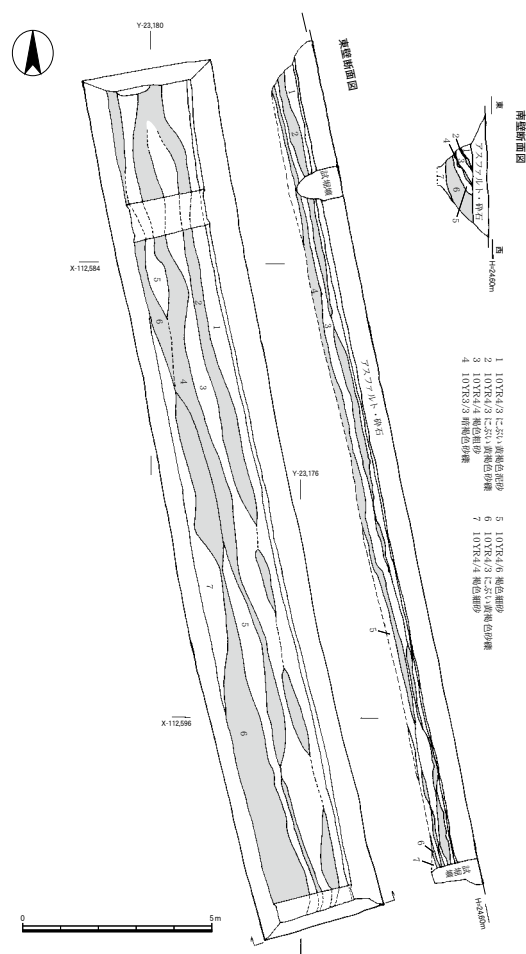


図 30 遺構実測図

13 長岡京右京一条四坊跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-15『長岡京右京一条四坊十五町跡』2005. 3.31

経過 京都市建設局街路部街路建設課による都市計画道路中山石見線の建設に先立って実施した第3次調査で、長岡京右京 831 次調査にあたる。室町時代に造られたと思われる石見城跡が調査地の東側に隣接する。調査地は、善峰川右岸の標高 46.0 m の低位段丘上と標高 44.5 m の氾濫源とにまたがる。この段丘上に 1・2・4 の各トレンチを設定し、氾濫源部分に 3 トレンチを設定し、1 トレンチから順に調査を行った。

遺構 調査地は、長岡京右京一条四坊十五町にあたるが長岡京期の可能性がある遺構としては、1 トレンチで掘立柱建物が検出されたのみである。遺構の中心は、鎌倉時代から室町時代であり、1800 基あまり検出された遺構の大半が、この時期の柱穴である。特に 2 トレンチにおいて遺構密度が高く、段丘斜面では階段状遺構が検出された。長岡京期以前の遺構として、1 トレンチ北半から 2 トレンチ南半にかけて南西から北東方向の流路跡を確認した。流路の最上層からは古墳時代初頭の土器が出土している。

遺物 ほとんどが平安時代末期から室町時代のもので、鎌倉時代前半までが最も多く後半は少ない。室町時代になると再び増加し、室町時代後半になると再び減少する。17 世紀前半までは若干出土するが、これ以降は国産磁器の小片が少量出土するのみである。平安時代以前の遺物では、長岡京期のものはほとんど出土せず、縄文時代から古墳時代までのものも量は少ないが出土している。

小結 今回の調査で検出した主な遺構は、鎌倉時代から室町時代の柱穴であり、合計 1500 基以上を検出した。集落内で継続して宅地としての利用されていたことがわかった。隣接する石見城の残存遺構とともに大きな調査成果をあげることができた。

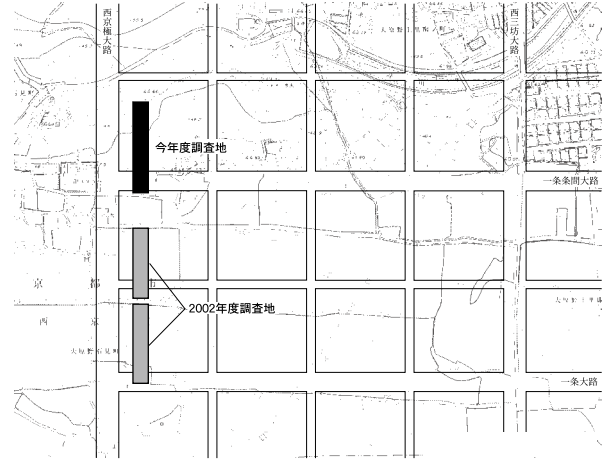


図 31 調査位置図

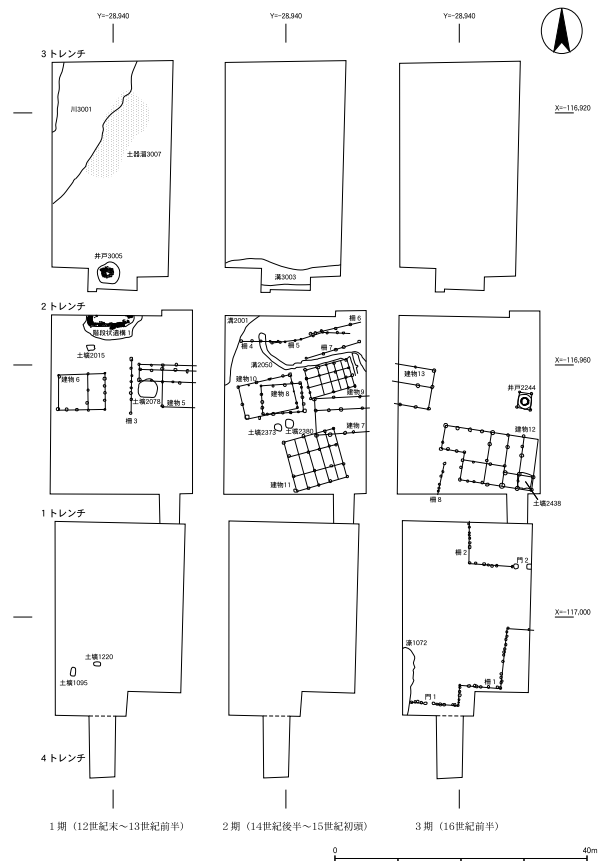


図 32 遺構変遷図

14 史跡賀茂御祖神社境内

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-12『史跡賀茂御祖神社境内』2005.3.31

経過 今回の調査は、平成 3 年度に京都府・京都市文化財保護課の試掘調査で発見され、平成 13 年度に当研究所で再調査した石敷遺構の復元整備事業に伴うものである。調査は、石敷遺構の規模や性格、特徴などを明確にする目的で実施した。先の 2 回の調査区の再発掘と遺構の範囲確定のために新たな調査区（東西 4~5m、南北 9m のトレンチ）を設定した。

遺構 平安時代の遺構として、石敷遺構・土壇（土盛り）、祭祀遺構を検出した。祭祀遺構 1~5 は、掘形が不明瞭なことや、埋土が祭壇状遺構と同質で混入物が無いことなどから、祭壇状遺構と同時期と考えられる。

江戸時代の遺構として、地鎮遺構と祭祀遺構 2 基を検出した。

遺物 平安時代の遺物としては、土師器小片と瓦が出土した。石敷遺構の直下整地層（断割り断面）で平安時代後期の土師器片が出土した。また、瓦は、石敷遺構を覆っている土層で検出した。

江戸時代の遺物としては、銭貨・土師器・鍛造剥片（祭祀 6 周辺）などが出土した。銭貨は、寛永通寶（1750 年代頃に製造された）1 枚である。

小結 石敷遺構 1 の規模は、東西幅約 6m、南北長約 7m の掘込地業の上を混入物の無いグレー系の粘質土で覆い、平らな空間を造りだしていることがわかった。また、石敷遺構の上には、黄褐色土を版築で固めて土盛りし、祭壇を形成している。この祭壇の規模は、調査の結果、東西幅は約 6m 南北 9m 以上であることが確定できた。

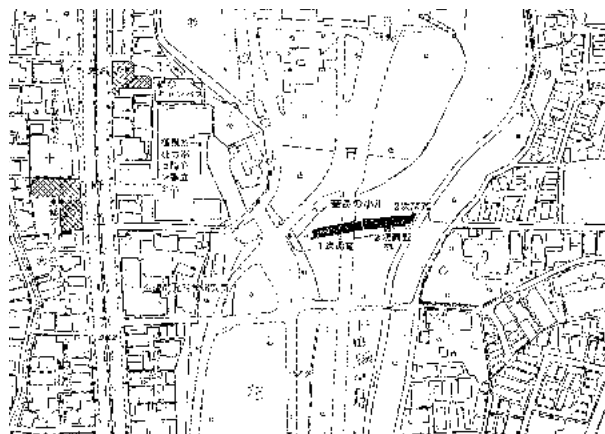


図 33 調査位置図



図 34 遺構平面図

15 上京遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004- 9 『上京遺跡』 2004.11.30

経過 財団法人不審菴茶室建設に伴う調査である。当地は上京遺跡に該当していたため、京都市埋蔵文化財調査センターは、遺構の残存状況を確認するために試掘調査を実施した。その結果、中世の遺構が良好に遺存していることが明らかになり調査を実施する運びとなった。

遺構 検出した遺構は、平安時代、室町時代、江戸時代のものがあり、総数は83基である。平安時代の遺構は後期の溝をわずかに1条確認したにすぎない。室町時代の遺構は今回最も多く検出した。大半が後期（16世紀前半）のもので、重複関係や配置の状況から、これをさらに新・旧2時期に分けることができる。旧期の遺構としては、溝（SD17）・柵（SA41）・土壌群（SK16・18・19・60）がある。この時期の遺構は主軸が真北に対して北で西に振れる特徴がある。これに対して新期の遺構はほぼ正方位に向く。塀（SA14）に伴う布掘掘形が東西方向に伸び、調査区西部で南側へ直角に折れ曲がりさらに調査区外へ延びる。溝（SA15）は、柱痕跡は認められなかったものの、両端の状況や傾斜の状況からこの溝も塀に伴う布掘掘形と考えている。両者の間は約4mあり、この間が通路として機能していたものと考えられる。また、塀（SA14）の南側には井戸（SE8）がある。江戸時代の遺構は瓦溜め（SK4～6）などが主なもので、数は多くない。

遺物 平安時代、室町時代、江戸時代の遺物が出土した。大半は土器類で、室町時代のものが最も多く、ついで江戸時代、平安時代の順である。

小結 今回の調査では室町時代後期の遺構を検出できたことが最も大きな成果である。この時期の遺跡の一端を明らかにすることができたことの意義は大きい。また、合わせて平安時代や江戸時代の遺構も確認でき、当地の変遷を知る手がかりを得たことも成果である。



図35 調査位置図

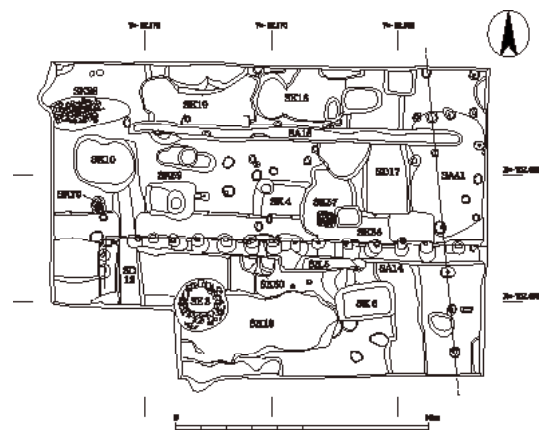


図36 遺構平面図



図37 調査区全景（西より）

16 相国寺旧境内

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-14『相国寺旧境内』2005. 3.31

経過 相国寺境内北東に位置する承天閣美術館が増築されることになり、工事に先立って発掘調査を実施した。調査トレンチは、美術館本体の周囲に、ほぼ連続するトレンチを設定した。

遺構 飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・柵、平安時代の土壇・溝、鎌倉時代の溝・柱穴、室町時代の掘込地業・掘立柱建物・柵・土壇・柱穴、桃山時代から江戸時代の建物基壇・瓦積暗渠・築地・布掘柵列などを検出した。

飛鳥時代の遺構としては、竪穴住居 20 棟と竪穴住居を切って成立する掘立柱建物 1 棟・柵 2 条を検出した。竪穴住居群の存続時期は、出土遺物の検討により 7 世紀半ばから 7 世紀後半に限定できる。竈の取り付け位置および竪穴住居の方位は一定していないが、重複関係が新しいものほど正方位に向かう傾向が見られる。土壇 280 は、径 0.8 m、深さ 0.2 m の円形の土壇で、鉄滓・鞆羽口・礫・焼土が詰め込まれていた。

遺物 土器類は縄文時代から江戸時代まで、瓦類は飛鳥時代から江戸時代までのものが出土している。金属類では竪穴住居から出土した鉄滓・鍛造剥片がある。

小結 今回の調査の最も大きな成果は、飛鳥時代の遺構が確認できたことである。近辺の調査では、初めての発見例となった。竪穴住居群は、藤原京遷都（694 年）前後に廃絶した可能性が高い。多くの竪穴住居内から鉄滓と鍛造剥片を検出したことは、竪穴を工房として使用していた可能性がある。また鞆の羽口・鉄滓・炉壁が出土していることから、近辺に鑄造施設が存在したことは確実とみられる。調査地北西の出雲寺跡とされる地点からの出土瓦が藤原宮・本薬師寺系の軒瓦セットであることや、竪穴住居の存続期間を考え合わせるとこの集団が出雲寺造営に関わっていた可能性を思わせる。



図 38 調査位置図

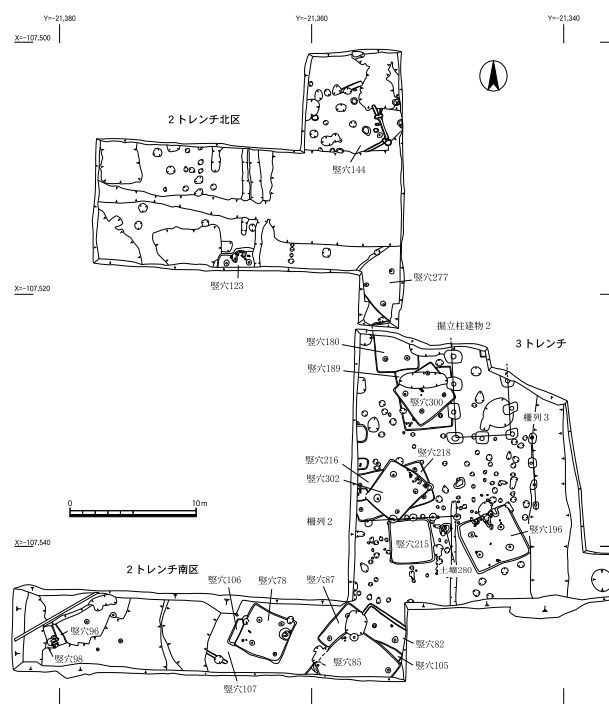


図 39 遺構平面図



図 40 竪穴 196・かまど跡（南東より）

17 白河街区跡・岡崎遺跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-17『白河街区跡・岡崎遺跡』2005. 3.31

経過 京都市上下水道局による配水管の布設替工事が実施されることとなった。当該地は、平安時代後期に造営された六勝寺の一つである法勝寺跡にあたることから、発掘調査を実施することになった。今回の調査区間のうち、二条通は法勝寺の伽藍の中心を東西方向に通るため、予定区間を可能な限り全面発掘調査することとし、一週間単位を目安としたA調査と、1日単位で実施するB調査を実施することとし、各々の調査区を設定した。最長40mを1区画とし、それをA1～7区とした。また、調査の表土や排土を、この区画内に仮置きすることや、埋設管や電柱を避けるため、1区画を2～5分割（T1～5）して調査した。調査地の幅は、全トレンチとも約1mであった。

遺構 対象区間全体が既に大きく削平を受け、顕著な遺構を検出することはできなかった。わずかに平安時代後期の土壌を2箇所検出したのみであった。ただし、部分的に寺院造営のための整地層とみられる土層を金堂跡の南面で確認できたが確証を得るまでにはいたっていない。ほとんどの区間がGL-0.5m前後で自然堆積の砂礫層や一部分であるが黒褐色泥土の堆積層となることがわかった。

遺物 今回出土した遺物は、岡崎遺跡（弥生時代から古墳時代）にかかわる時代のもので、六勝寺（法勝寺跡）にかかわる遺物であった。攪乱からも良好な瓦類の出土があった。

小結 白川による自然堆積層である砂層や砂礫層が全体に広がっていることがわかった。二条通西半部には、この砂礫層にかわって黒褐色系の砂泥層の堆積が広がっていることがわかった。これらは、周辺の調査結果から法勝寺の基盤層となるものであることは明らかである。

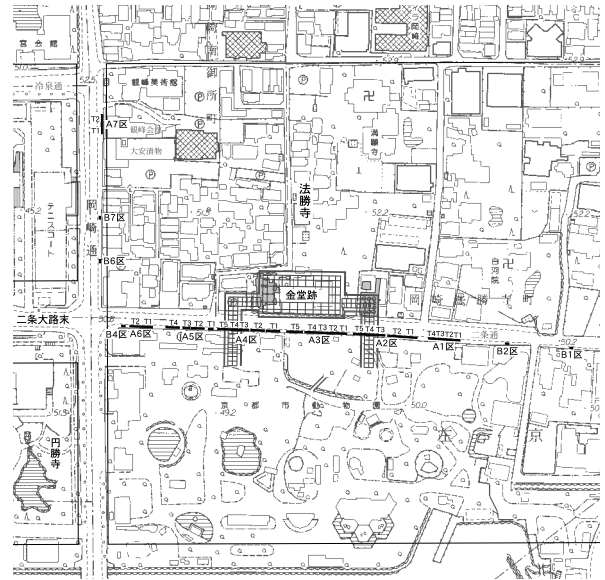


図41 調査位置図



図42 土壌断面状況



図43 A4区T2全景(西より)

18 山科本願寺跡 1

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成 17 年度』京都市文化市民局 2006. 3.31

経過 山科本願寺は、文明 10 年（1478）から造営が開始され、6 年近くの歳月をかけて建設された。その位置は、山科盆地の中央やや西寄り、四ノ宮川と山科川の合流点の西側一帯で、山城国宇治郡山科郷内野村といわれた地域である。今回の調査は、個人住宅兼共同住宅建設に伴う山科本願寺跡 10 次調査である。山科本願寺御本寺跡の南西部に推定される地点である。

遺構 今回の調査で検出した遺構は、土壌 1 以外はおもに室町時代後期のものが中心である。室町時代後期のものは山科本願寺関連の遺構と考えられ、整地層上面で検出した。堀 3 条・柱穴・土壌 3 基・建物・塀・柵・礎敷などを検出した。

遺物 調査で出土した遺物は、整理箱に 8 箱である。土器類が大半を占め、ほかには瓦類・金属製品・石製品・壁土などがある。瓦類は少量の出土であり、■や鬼瓦がわずかに含まれている。出土した遺物総量は、周辺での調査と比較すると少量である。時期別には、室町時代後期の遺物が主体であるが、量的には平安時代中期から鎌倉時代前半以前のものが 1 / 3 以上出土している。桃山時代以降の遺物は、わずかである。また、古墳時代の土師器も少量であるが出土した。

小結 今回検出した堀は、すべて幅に対して深く掘られており、その断面形は逆台形や V 字形を呈しており、防御的な性格が強いとされるものであるこれらの堀の位置を 2 種の古図で検討すると、「光照寺本」では、内寺内の南西隅にあたっており、内寺内と外寺内を区切る東西方向の土塁が存在する地点に近いとみられ、一方、「山科古図」では御本寺内の南西部にあっているとみられる。堀の開削されている状態は「光照寺本」にちかく、一方堀が埋められた後は「山科古図」の段階のように御本寺の範囲が拡がり、当初の内寺内南西部を取り込んでいったことがみてとれる。

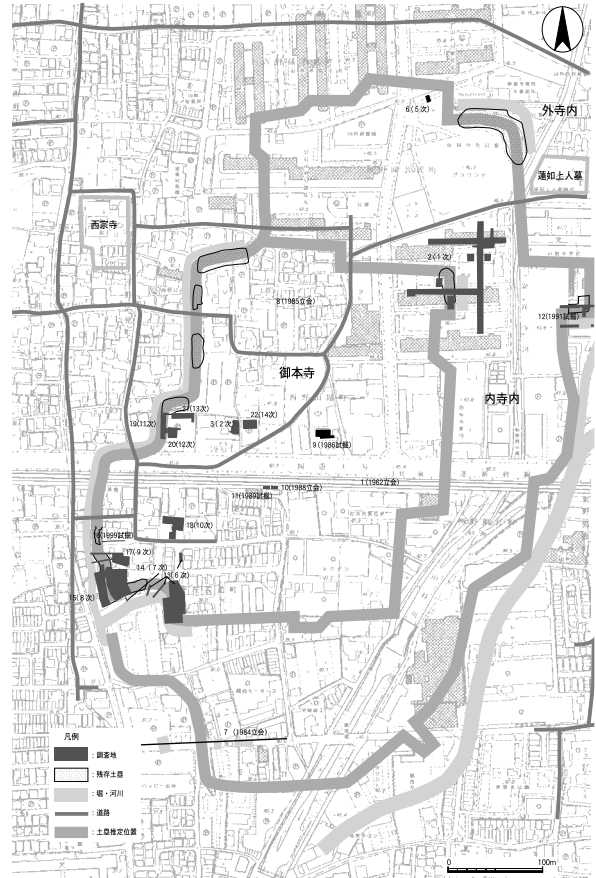
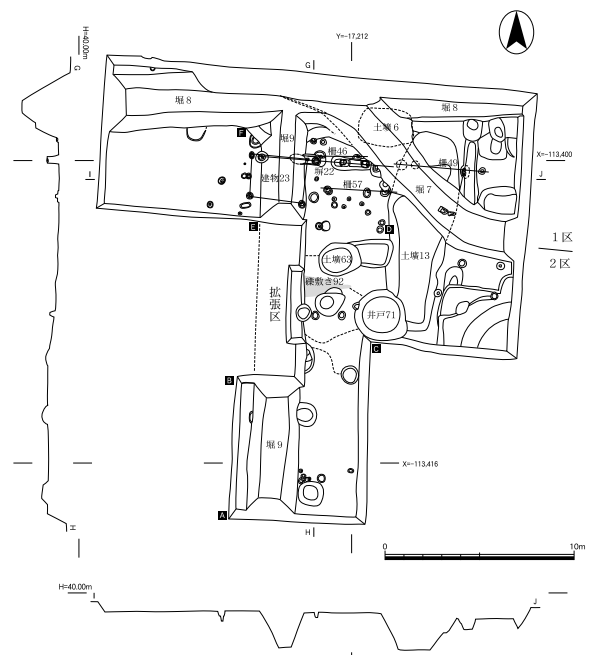


図 44 調査位置図



アルファベットは断面図との対応を示す。
白抜きA-Fは、図49 調査区断面図（2区南半西壁・井戸71・土壌13西壁・堀9西壁断面図）を参照。

図 45 遺構平面図

19 山科本願寺跡 2

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査報告 平成17年度』京都市文化市民局 2006. 3.31

経過 今回の調査は、駐車場の擁壁工事に先立ち、山科本願寺関連の遺構を確認するために実施した第11次発掘調査である。調査地は、西野山階町の国道1号線に面した店舗北側駐車場の西端斜面部分である。そのすぐ西側には、同方向に堀の痕跡と推定される水路が走る。室町時代に築かれた山科本願寺「御本寺」の西辺にあたり、北側には、当時築かれた土塁が東西方向に約25m残存している。土塁の表土層を除去後、構築された当時の土塁下半部西面を検出した。また土塁の構築方法を理解する目的で、調査対象地北部に断割りを入れた。

遺構 土塁の規模は、上部が既に削平されているため調査区内に限ると、南北28m、東西5mで、西端と東端の比高差は3.5mであった。隣接する北側の土塁の高さが、地形測量で現地表面から3.7mであることが判明し、現状での土塁復元高は7.2mとなる。土塁斜面の傾斜角度は約35度であった。

遺物 出土した遺物はほとんどが小片であった。室町時代の遺物としては、白色系の土師器皿が3点、羽釜が1点出土している。いずれも15世紀後葉に相当し、ほ



図46 調査位置図

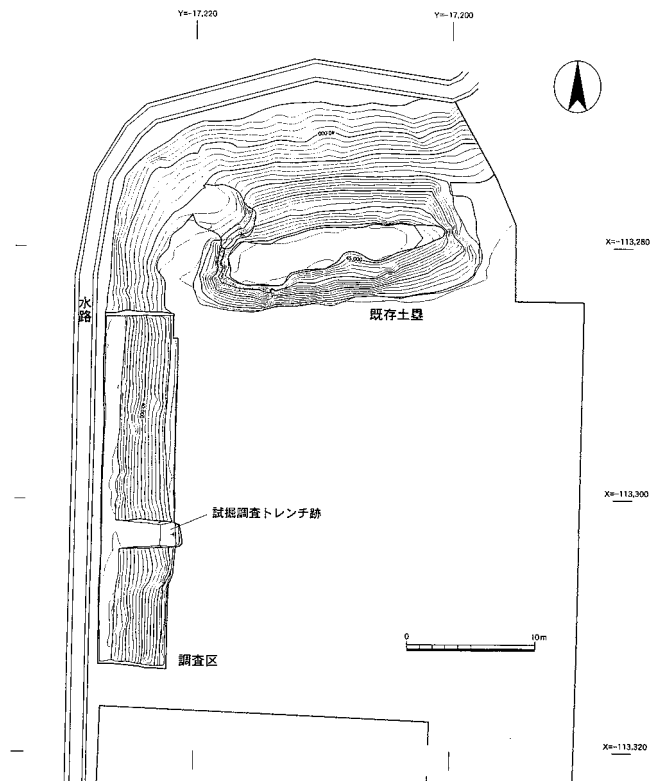


図47 御土居平面図

ぼ山科本願寺成立時期に一致している。

小結 山科本願寺「御本寺」西辺にあたる土塁が、どのような状況で遺存しているかが課題であったが、調査の結果、土塁の下半部の遺存状況はきわめて良好であることが判明した。調査区北部では、土塁の構築状況を確認するため、断面観察を行ったところ、主に砂礫・粘土層の互層堆積であることが判明した。

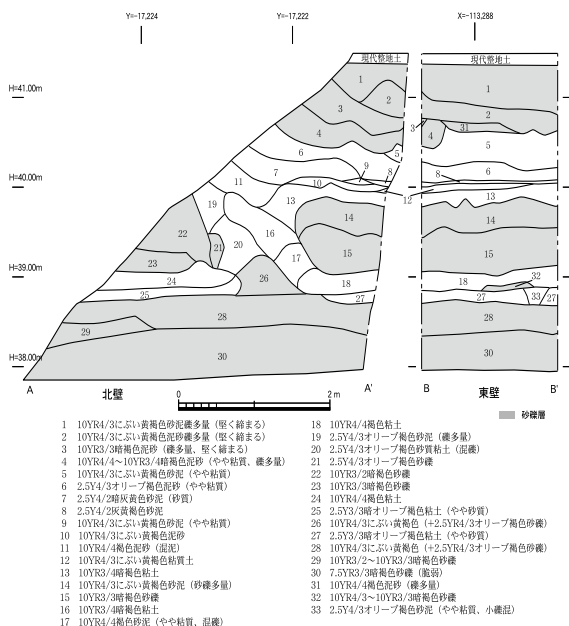


図48 御土居断面図

20 大宅廃寺・大宅遺跡

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005. 3.31

経過 調査地は、創建が7世紀後半に遡る大宅廃寺の伽藍の中心地にあたる。今回の調査区は中門想定地と乱石積基壇建物の中間西寄りに位置し、中心伽藍の存在が想定できた。実際に昭和33年の調査で、当調査地で基壇建物の存在が指摘されている。さらに、平成15年度には調査地北を東西に通る道路で下水道工事に伴う立会調査を行い、調査地真北の地点の東約8mで瓦積基壇を検出している。調査はまず、遺構の遺存状況を調べるために試掘調査から実施し瓦積基壇を発見し、寺院に関する遺構が良好に遺存していることが判明した。

遺構 基壇の構築は、地山層の直上に版築して積み上げている。断面観察によると、基壇内に礎石を据え付ける段階で下層版築と上層版築は様相が異なっており、版築の仕方を変えているようである。版築面上では礎石据付穴を3箇所を確認し、少ないながら建物復元のためのデータを得ることができた。瓦列の東側では、炭や焼土とともに多量の瓦が基壇上から流れ落ちる状況で検出でき、火災による建物基壇の崩壊が想定できた。これらの瓦落ちを除去したところ、幅1mの下成基壇を検出し基壇の構造を明らかにすることができた。調査区東端部から塔の水煙破片が出土し、今回検出した瓦積基壇建物の周辺に塔が存在することが推測できた。

遺物 大半は、基壇東側の瓦落ちや攪乱坑から出土した瓦群である。軒瓦は、紀寺式軒丸瓦と重弧文・藤原宮式軒平瓦が出土している。

小結 今回の発掘調査では、中央建物の南西にあたる伽藍中軸ラインの西側で瓦積基壇建物の東縁を検出したこととなり、既往の成果もあわせると少なくとも金堂1堂説は成立しないことがわかってきた。

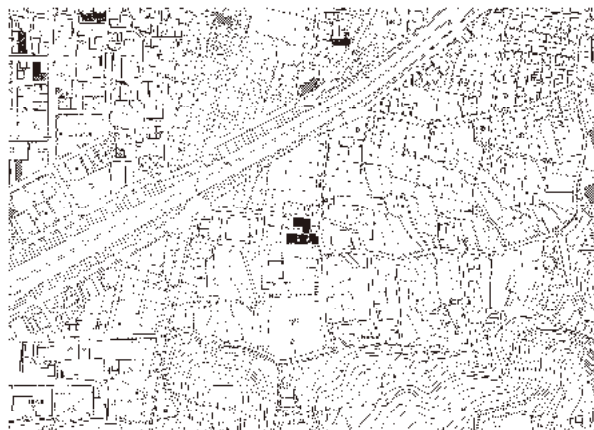


図 49 調査位置図

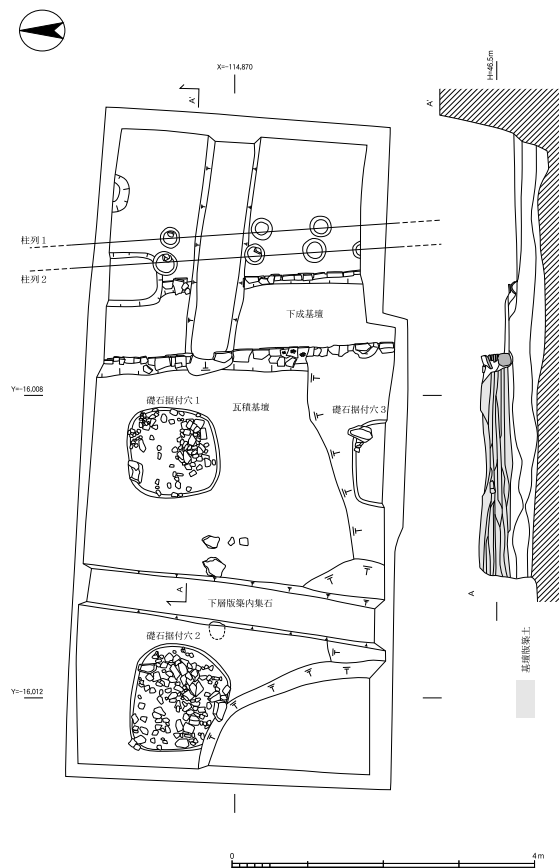


図 50 遺構実測図

21 醍醐寺子院跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-5『醍醐寺子院跡』2004.10.29

経過 醍醐集会所新築工事に伴う調査である。付近の調査では、市営醍醐東団地の建て替え工事に伴う1999年の調査で、平安時代後期から鎌倉時代前期の地業や築地跡・側溝など子院の一部と思われる遺構が確認され、平安時代後期の瓦が多数出土している。そのため何らかの遺構が存在すると予想した。

遺構 機械力により70～150cmの表土と埋土を排除後、遺構を精査してみると、西より東に下がる地形であることが判明した。西半部は攪乱を受けていなかったが、東半には旧建物の解体時に埋めたとされる廃材や自転車、ビニールなどが入る大きな土壌があり、遺構は残っていなかった。深い遺構の存在を確認するため、攪乱の下面を清掃したが、地山土があるだけであった。この過程で攪乱埋土中に平安時代や鎌倉時代の遺物が含まれていることが確認できたが、これらに伴う遺構は検出できなかった。

遺物 すべての遺物は攪乱埋土の中から発見され、遺構や包含層中からの出土はなかった。

小結 今回の調査地は、1999年調査地とは20mほどしか離れていないため、当然、関連遺構が存在するとして調査区を設定した。しかし、地表下2.3mまで攪乱層がほぼ全面にわたって広がっていた。そのため、旧地形は一部分にしか残っておらず、近・現代の遺構以外は検出できなかった。おそらく、大きく削平を受けたものとみられる。



図51 調査位置図

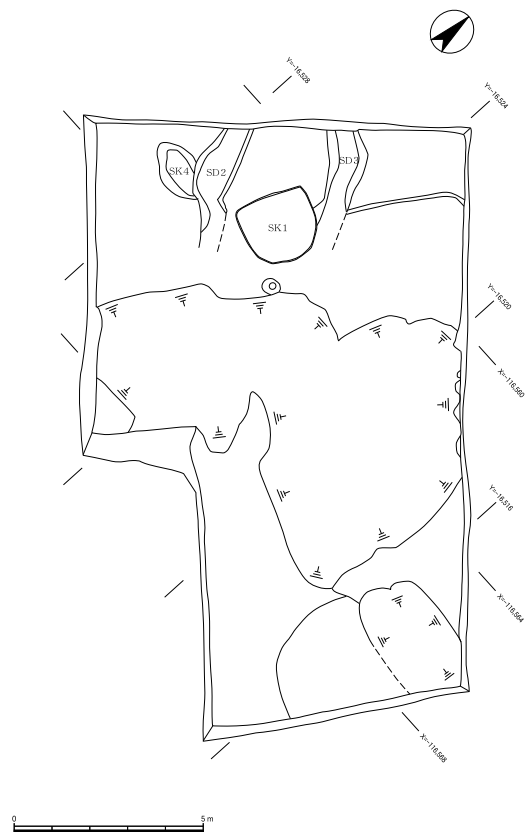


図52 遺構平面図

22 特別史跡・特別名勝 醍醐寺三宝院

経過 特別史跡・特別名勝醍醐寺三宝院庭園の庭園修復事業に伴う試掘・立会調査である。平成 14 年度から調査を開始し、今年は 3 年度目である。今回の調査では、来年度以降に修復工事が行われる南岸の中央に位置する藤戸石前（8 トレンチ）と東岸（9 トレンチ）に調査区を設定して、試掘調査を行うと同時に、護岸修復工事に伴う北岸、南岸、西中島（鶴島）、東中島の立会調査を行った。

遺構 北岸の護岸石下で中世のものと考えられる石組円形井戸や、現排水溝東側池底で木樋とそれに伴う排水施設を検出した。この旧排水施設は、対になる杭や木柱、モルタル塗の水槽、水槽底から検出した木樋、水槽へ水を導く階段状石敷からなる。この施設東側で溝状に青灰色粘土が貼られていたことから、下に溝が想定された。断割を入れたところ、東西方向の溝を確認し、その掘削中、インク瓶とアルミの環が出土した。

遺物 試掘・立会調査で出土した遺物は少量である上に、細片が多いため、時期を特定することが難しい。金剛輪院造立以前や金剛輪院期、三宝院期以降、近現代修復時と考えることが可能な遺物が出土しているが、ほとんどの遺物が後代の埋土に混入していた。

小結 北岸の護岸石には、井戸の埋土直上に据えられたものがあり、位置や標高など旧状を留めている可能性が高いこと、西中島（鶴島）南東護岸下部の層位が鶴島や北岸と異なること、東中島の土橋周辺はある時期に拡張された可能性があること、などがわかった。また、新たに旧排水施設の存在が確認され、東西方向に旧排水溝が延長する可能性が出てきた。これらの施設の製作年代は不明であるが、昭和 8 年発刊の本に掲載されている写真に杭や木柱が現在水位調整に使用している排水溝とともに写っていることから、昭和初期にはまだ機能しており、出土遺物から戦前から戦後に埋められたと考えられ

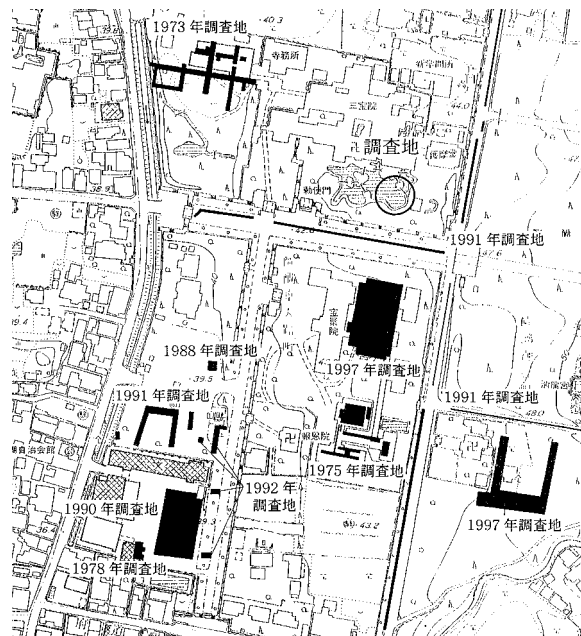


図 53 調査位置図

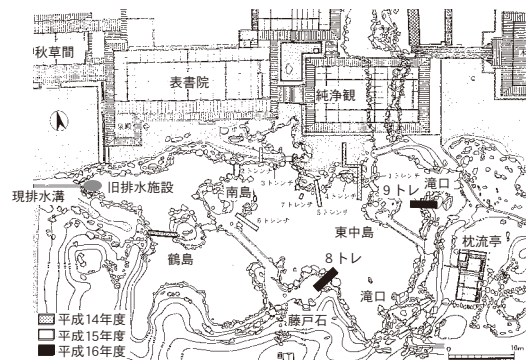


図 54 トレンチ配置図



図 55 旧排水施設（東から）

る。庭園の排水を解明する上で貴重な資料と成り得た。
(近藤 奈央)

23 史跡・名勝 嵐山1

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004- 7 『史跡・名勝 嵐山』 2004.11.30

経過 調査は、「小倉百人一首の殿堂（仮称）」建設工事に伴う発掘調査である。調査地は、北側が天龍寺の塔頭である宝厳院に隣接し、西が亀山の丘陵斜面、南が大堰川（桂川）に面している。鎌倉時代には院の御所である亀山殿が、室町時代より江戸時代にいたるまでは天龍寺が経営した旧地である。試掘調査後、発掘調査を実施した。

遺構 江戸時代の遺構には、建物・塀・井戸・石組土壇などがある。室町時代の遺構には、塀跡・土壇・瓦溜・堀・流路などがある。鎌倉時代では、1区の南東から2区にかけて下がる低地がある。この地形的な条件を利用した景石を配した庭園遺構を検出した。また、上段の縁辺部に掘立柱建物1棟を検出し、これも庭園遺構の一部を構成するものとみられる。

遺物 縄文時代から近代に至る土器陶磁器類・瓦類・金属製品・動物遺体などが出土した。奈良時代後半から平安時代中期にかけての土器類は、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器などを中心として平安時代後期以降の遺構埋土や整地層から多く出土している。室町時代の遺物には、土師器・施釉陶器・須恵器・瓦質土器・焼締陶

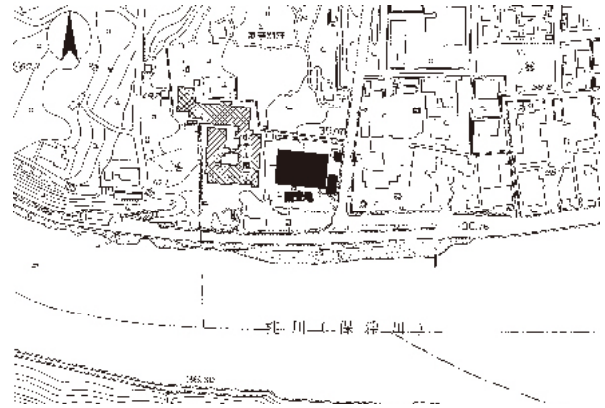


図56 調査位置図

器・瓦器などがある。

小結 第2面より下が保存されることになったため、平安時代以前の調査は部分的なものに留まった。しかし、溝・柱穴・土壇など平安時代以前の遺構の存在を確認した。土器類は奈良時代後半から平安時代前期のものが多量に出土した。瓦類は奈良時代から平安時代前期のものもあるが、とりわけ平安時代後期のものが多量に出土している。以上から、奈良時代の後半から平安時代後期にかけて調査地周辺で何らかの施設が経営されていたことは明らかである。

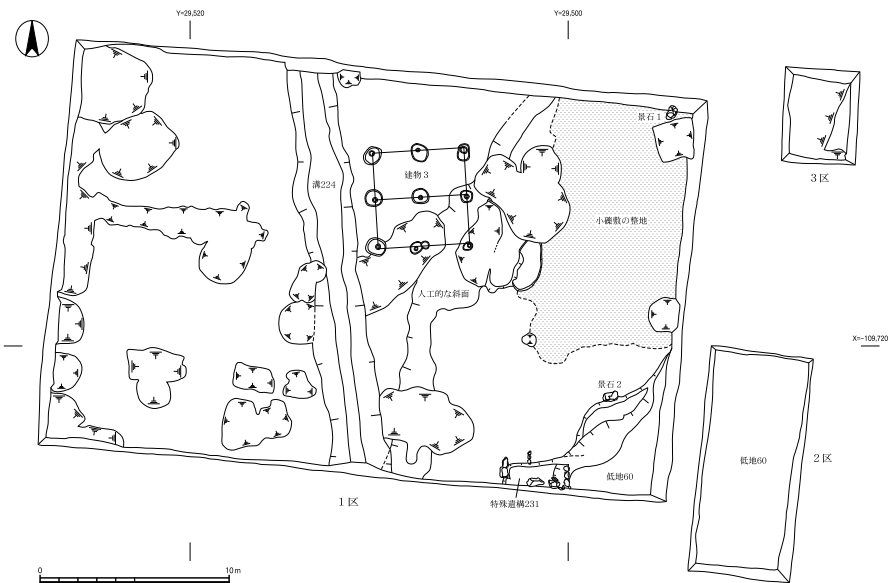


図57 遺構平面図

24 史跡・名勝 嵐山 2

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-11 『史跡・名勝 嵐山』 2005.1.31

経過 嵐山大堰川（桂川）の北岸に旅亭嵐月（仮称）新築工事が計画された。対象地は、史跡・名勝 嵐山に位置することから、試掘調査を経て発掘調査を実施する運びとなった。発掘調査区は、建物計画範囲を南と北に分けて設定し、南半を1区、北半を2区とした。大堰川に面する南半部分は、北半に比べ約1.5m低くなっていた。鎌倉時代には、後嵯峨上皇により亀山殿が建立された。また調査地の北には後醍醐天皇の菩提を弔うため、足利尊氏が夢窓国師を開山とし建立した天龍寺がある。

遺構 検出した主な遺構には、江戸時代・室町時代・鎌倉時代のものがある。江戸時代の遺構は、1区で礎石列・石列・竈・土壇などを検出した。室町時代の遺構は、前期のものが主で、大型柱穴とこれから延びる柵、さらに南北方向の溝・土壇・土壇・柱穴などを検出した。鎌倉時代の遺構は、後期のもので、掘込み地業・石列・溝・土壇などを検出した。

遺物 鎌倉時代から室町時代のものがほとんどで、少量、縄文時代・平安時代・江戸時代のものがある。鎌倉時代から室町時代のものには、土師器・瓦器・陶磁器類・



図 58 調査位置図

瓦類・金属製品・石製品・銭貨などがある。

小結 今回検出した鎌倉時代後期の遺構は、後嵯峨上皇によって造営された亀山殿の一部に想定されるものであり、大規模な地業跡は、そのうちの棧敷殿にあたるものとみられる。室町時代前期の遺構は、天龍寺造営時期にあたり、古図などとの比較から霊庇廟の正面に位置する鳥居とこれに連なる柵とみられる。

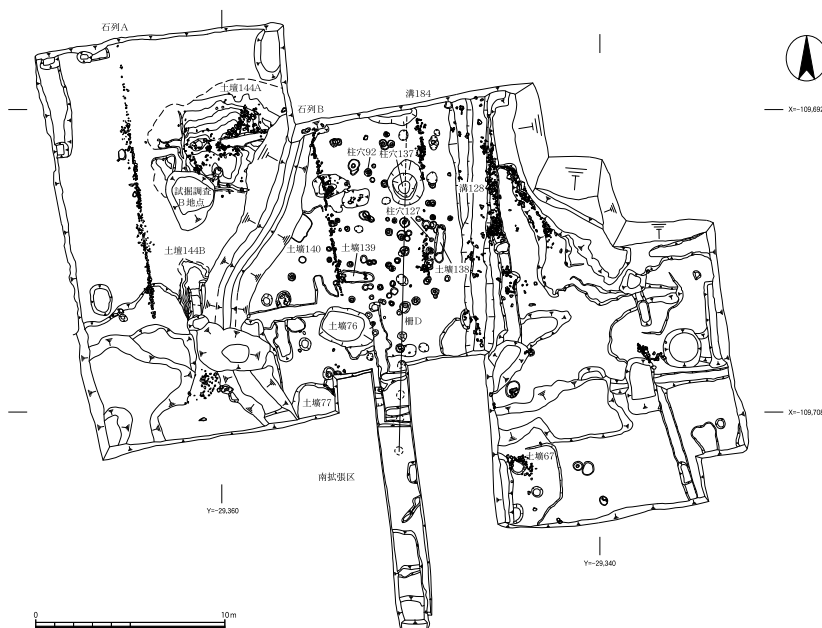


図 59 遺構平面図

25 史跡・名勝 嵐山3

報告書名：報告書名：『京都市内遺跡発掘調査概報 平成16年度』京都市文化市民局 2005. 3.31

経過 当地は天竜寺の南、大堰川(桂川)の北に位置し、亀山殿推定地の一部でもある。今回の調査地の南約30mでは、この亀山殿建物地業や天竜寺の霊庇廟に関連するとみられる遺構が検出されている。また西方約50mでは平安時代前期の遺物が多量に出土した苑池跡、さらに東方では臨川寺境内や美空ひばり館建設地などの発掘調査で古代から中・近世の遺構が数多く確認されている。調査は現地において制約があったため、5ヶ所の小トレンチを設定し実施した。

遺構 検出した遺構は、室町時代(15世紀代)の柱穴・土壇や溝が大部分であった。溝は、濠状のものがみられ、東西方向や南北方向のものがある。

遺物 室町時代のものがほとんどで、それ以外は非常に少ない。土器・陶磁器・瓦類があり、土器類はSD24からまとも出土した他は、散発的である。

小結 今回の調査では、室町時代の遺構が集中的に検出できたものの、平安時代や亀山殿に関係する遺構は全く検出できなかった。室町時代の濠は、防御的な施設であることが注目できる。また、SD24が3時期重複しており、それに近接した位置に2条の南北方向の濠が造ら

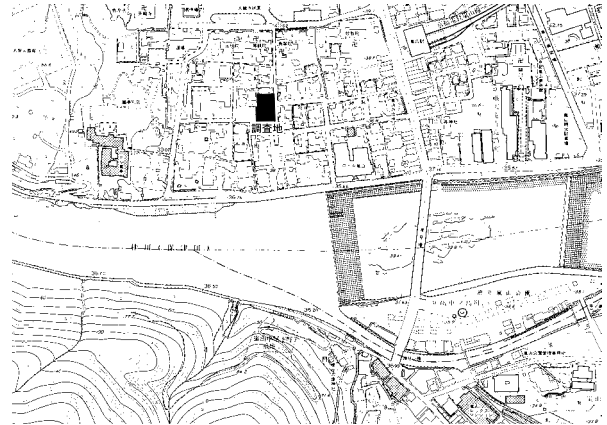


図60 調査位置図

れていることから、この場所に何らかの境界線が継続して存在していた可能性がある。この境は、霊庇廟の神主家の西限にあたる可能性がある。

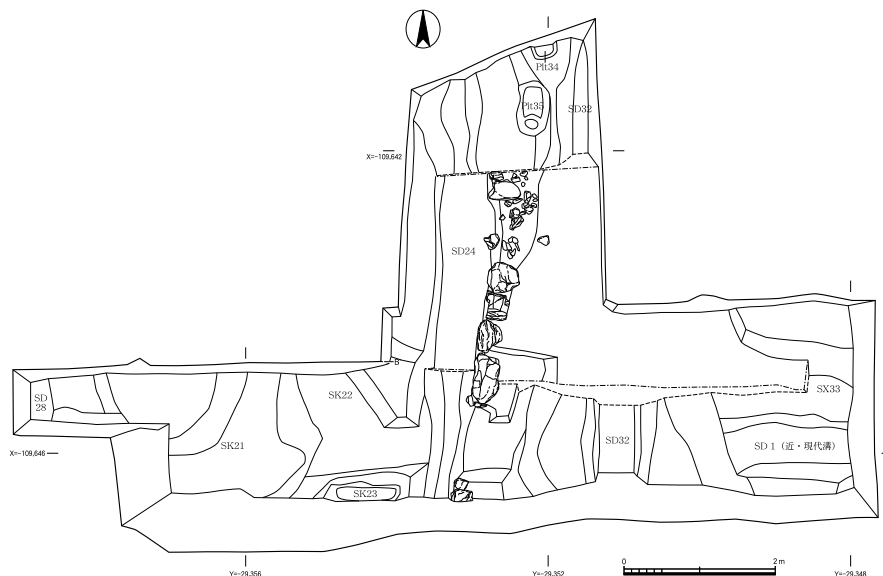


図61 遺構平面図

26 鳥羽離宮 150 次調査

報告書名：『京都市内遺跡発掘調査概報 平成 16 年度』京都市文化市民局 2005. 3.31

経過 この調査は事務所新築工事に伴い実施したもので、鳥羽離宮関連では 150 次の調査となる。調査対象地は北に鳥羽天皇陵、東に近衛天皇陵、西は北向山不動院に囲まれた一角で、東殿庭園の一部である。調査地の道路をはさんだ北隣で実施した 134 次調査や調査地の東で行われた 112・117 次調査では、東殿の園池と洲浜を検出しており、その広がりを確認することを目的として調査を行った。

遺構 検出したのは、周辺で検出している池跡の続きのみである。池埋土は暗褐色腐植土が 40cm ほど堆積し、建築部材と思われる木片が多く含まれる。その下層に褐灰色粘土が堆積し、池底部は小石と砂が 5～10cm ほどの厚みで広がる。調査区西北隅でわずかながら洲浜の立ち上がりが認められ、その傾斜に沿って瓦や土器が分布していた。調査区西壁の観察では腐植土層は薄く、その下に細かな白砂と腐植土との互層堆積が 10cm 程の厚さで認められる。北壁には白砂の堆積はごくわずかであり、洲浜の景観が変化する地点のようである。

遺物 全て池 SG1 からの出土で、その内容は土師器・瓦器・須恵器・焼締陶器・磁器・瓦・木製品等である。量的には瓦がもっとも多い。

小結 予想していた以上に池は西へ広がり、調査区のほぼ全域に広がる。洲浜は調査区西北隅で下部をわずかに検出したにとどまり汀線及び陸部は確認できなかった。

池最下層からは 11 世紀中頃の土師器が出土しており、この付近に泉殿の頃と考える園池の存在が考えられる。12 世紀後半まで園池として整備されていた様であるが、埋土に含まれる建築部材の有り様から東殿廃絶後は江戸時代前期の整地まで放置され、池ないしは湿地状を呈していたことがうかがえる。

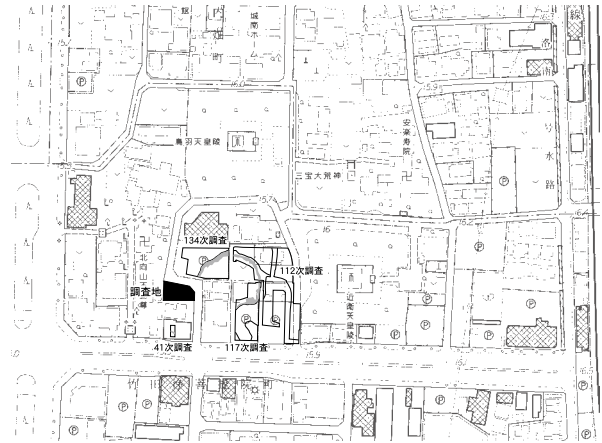


図 62 調査位置図

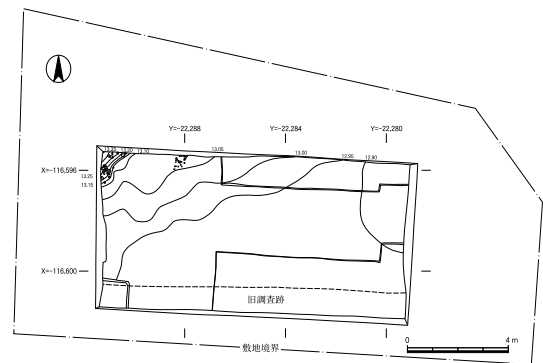


図 63 遺構平面図

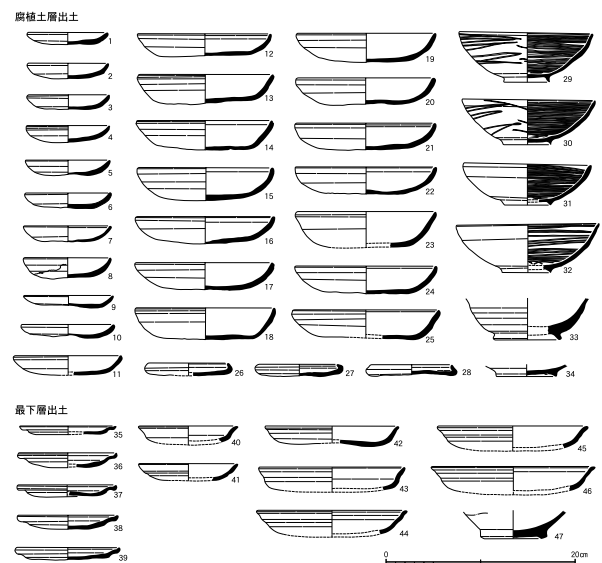


図 64 土器実測図

27 伏見城跡

報告書名：京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-18『伏見城跡』2005.3.31

経過 当地は、伏見城下町西端部付近に該当し、付近には竹中貞右衛門や佐々信濃守などの武家屋敷の推定地が点在する。また、敷地北側には、奈良時代前期の寺院、板橋廃寺の推定地が所在する。今回の調査に先立ち、京都市埋蔵文化財調査センターにより遺構確認のため7箇所の特レンチを設定し、試掘調査が実施された。その結果、敷地東寄りの5区および6区で遺構が確認されたため、この2つの試掘特レンチを中心に調査区を設定し、発掘調査を実施した。

遺構 伏見城跡以前としては、奈良時代の竪穴住居、奈良時代前期の土壙などを検出した。

桃山時代から江戸時代前期の主な遺構には、小規模なPit群のほか井戸・土壙・東西方向の溝・東西および南北方向の柱穴列などがある。特徴的なものには、埋土に多量の鉄滓・炭化物・鞆羽口を含む土壙群がある。これは、炉材構築用の土取りと廃棄炉材や鉄滓の処理を兼ねたものと思われる。

遺物 奈良時代の遺物には土師器・須恵器などがある。

桃山時代から江戸時代前期の遺物は、江戸時代前半期のものが多く、桃山時代のものは少ない。土器類以外では金箔瓦が4点出土した。江戸時代後期の遺物は土壙などから陶磁器類を中心に多量に出土した。また、中央部の土壙群からは鞆羽口・坩堝・鉄滓などが多量に出土している。鋳型などは全く含まれていないので製鉄に関わる遺物であろう。

小結 桃山時代の遺構は、一部検出したものの、江戸時代以降の遺構群によって破壊されており、特に調査区南半ではほとんど検出できなかった。また、江戸時代前期の遺構は2基の井戸・溝・柵などのほか大半が土取りと思われる不整形な土壙が主体で、武家屋敷や町屋などの存在は確認できなかった。

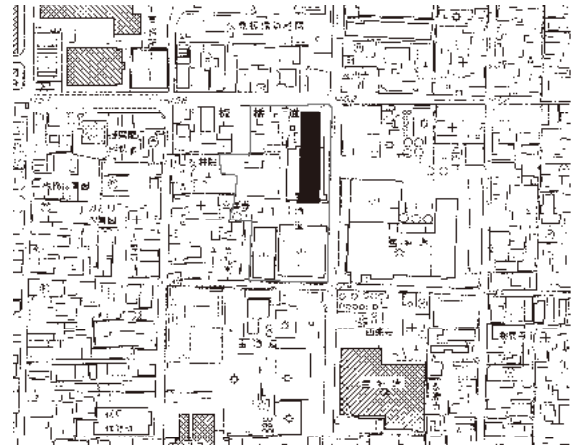


図65 調査位置図

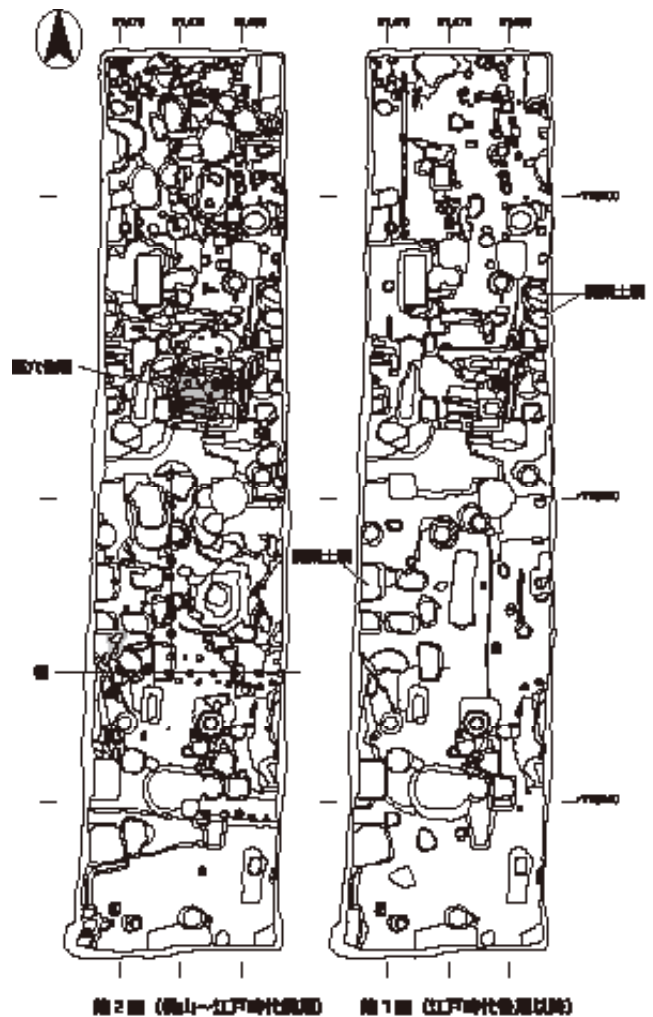


図2圖(桃山-江戸時代前期) 図1圖(江戸時代後期以降)

図66 遺構平面図

II 平成 16 年度の試掘・立会調査概要

平成 16 年度に実施した試掘・立会・確認調査は、表 1 に示した 11 件である。このうち、京都市内遺跡を対象とした立会調査の報告については、多数の件数におよび、概報が発刊されておりそちらを参照いただきたい。他の 10 件のうち 3 件は、発掘調査へ移行したので発掘調査の概要を参照されたい。残り 10 件の概要を本書で掲載した。

今年度の調査で特徴的なことは、右京区嵐山周辺で 3 件の調査が相次いで実施されたことである。いずれも、室町時代に創建された天龍寺関連の遺構を検出し、発掘調査で述べたとおり大きな成果をあげることができた。

閑院宮邸跡の試掘調査（II - 3）は、閑院宮の旧地に今も残る庭跡を整備するための調査で、池跡の変遷などについて明らかにすることができた。調査成果は、池の復元整備に生かされ、現在は一般公開されている。

1 平安京左京八条四坊跡

経過 調査地は鴨川の西側に位置しており、新高瀬川をはさみ塩小路通の南側、須原通の西側である。平安京条坊では、左京八条四坊十町・十五町にあたる。

近辺の過去の調査は、当研究所が1998年に八条四坊十・十一・十四町にあたる地域で試掘調査を実施し、標高約24.2mまで氾濫堆積であり遺構面は確認できなかった。2003年には八条四坊七町で発掘調査を実施し、標高26.4～27.4mの間に遺構面があり、平安時代後期から江戸時代の遺構を検出した。

遺構 調査区は西から1区～4区まで設定し、調査を実施した。1～3区を3月3日、4区を3月14日に機械掘削を行った。掘削深は、安全面を考慮し、砂礫層を確認した時点で止め、調査区の1部を深く断ち割り、標高26m前後まで機械掘削した。調査は1区から順に進め、全景写真撮影と図面作成を行った。その後、埋め戻し、付帯設備復旧工事を行い、26日に現場を撤収した。

調査の結果、遺構面は確認できなかった。盛土の下は黒褐色の旧耕土層であり、その下層は少量の遺物を包含する砂礫層である。

1区：地表面は標高28.8m前後である。標高約28.5mに厚さ30cmのコンクリート基礎があり、その下の標高28m前後に厚さ約25cmの旧耕土層が調査区全面にある。その下層は標高26m近くまで砂礫層である。鴨川の隣接地であることから洪水による堆積層と思われる。耕土層からは江戸時代の染付磁器・青磁・陶器と、平安時代の須恵器などが出土した。砂礫層からは中世の土師器・陶器が出土した。

2区：地表面は標高約29.0m、標高27.4m前後まで攪乱である。その下層は標高約26mまで洪水による堆積と考える砂礫層である。砂礫層から輸入青磁、中世の須恵器が出土した。

3区：地表面は標高28.7～28.8mである。盛土の下は、標高28m前後に厚さ20～30cmの黒褐色耕土層が調査区全面にある。その直下の層は床土の様相を呈する砂泥層の自然堆積層である。さらにその下層は標高約26mまで洪水に堆積と考える砂礫層である。第9層の砂礫層から中世の土師器小片が出土した。砂礫層上層からは輸入青磁・白磁などが出土した。

4区：地表面は標高約28.9mである。盛土の下は標高28m前後に厚さ約20cmの耕土層が広がり、貯水槽

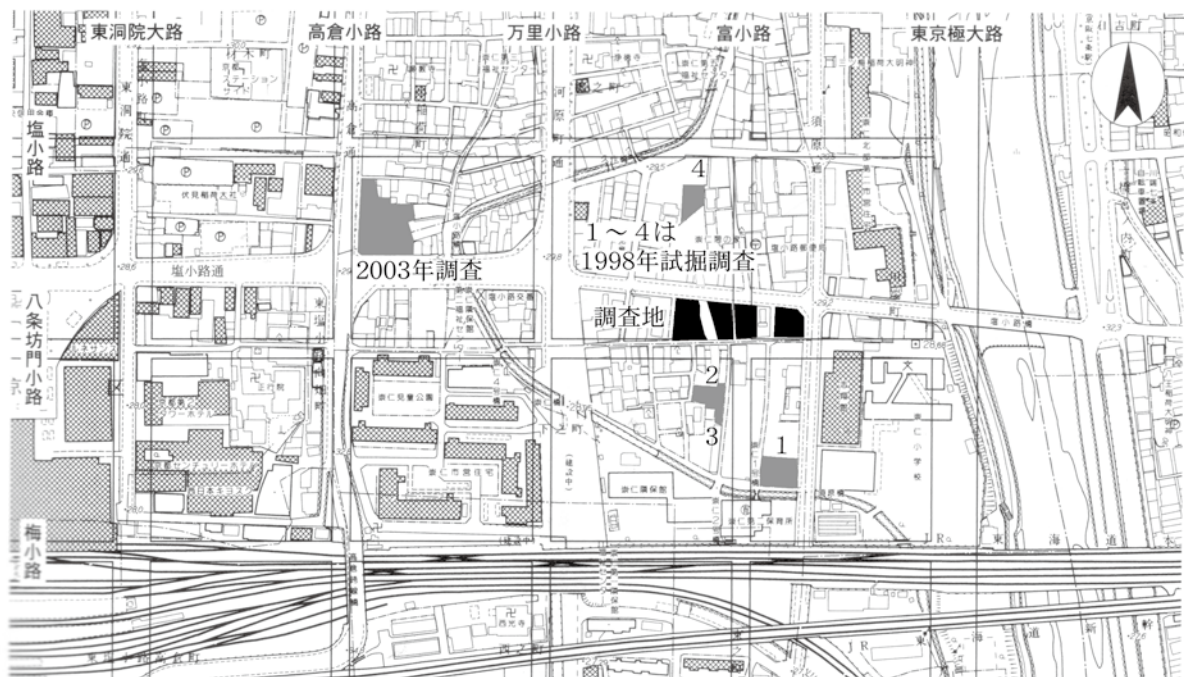


図67 調査位置図



図 68 トレンチ配置図

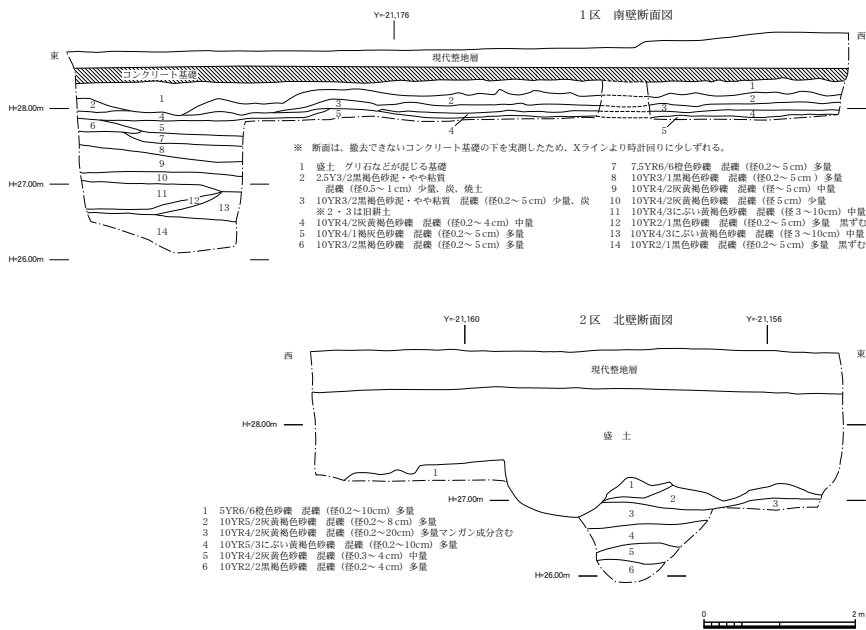


図 69 1・2区土層断面図

らしき攪乱が切り込む。その直下の層は床土の様相を呈する砂泥層の自然堆積層である。さらにその下層は標高約 26 m まで洪水による堆積と考える砂礫層である。砂礫層上層からは平安時代の須恵器、中世の須恵器・土師

器・陶器などが出土した。砂礫層下層からは中世の土師器が出土した。

遺物 黒褐色粘土層より江戸時代～近代の瓦・磁器・施釉陶器が、洪水による堆積と考える砂礫層から平安時

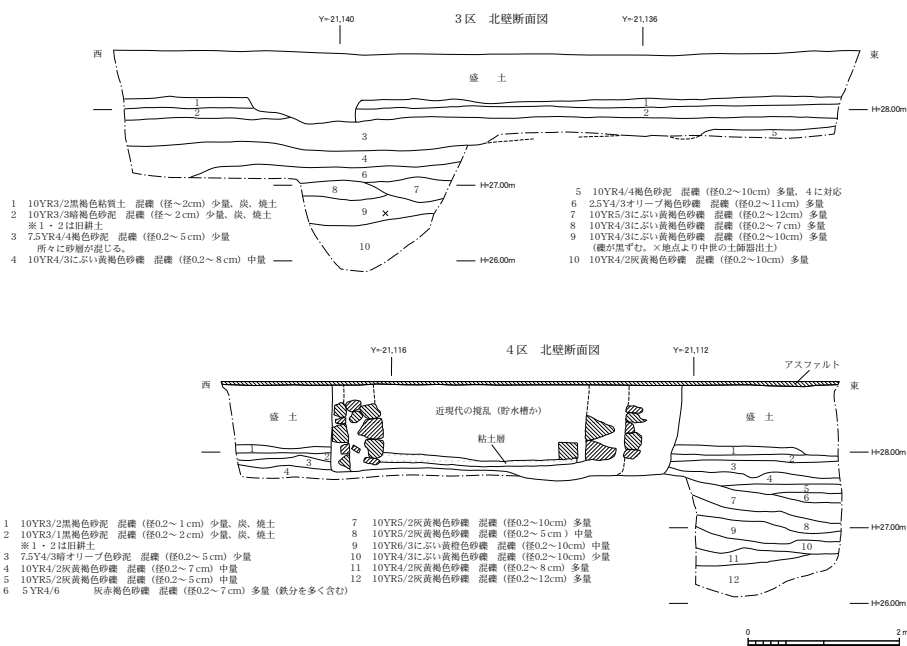


図70 3・4区土層断面図

代の須恵器、中世（鎌倉時代～桃山時代）の須恵器・土師器・陶器・輸入磁器などが少量出土した。それらの大半は小片で磨滅しており、中世のものが多く。

平安時代の遺物は、須恵器甕が1区耕土層から、須恵器壺小片が4区砂礫層上層から出土した。

中世（鎌倉時代から桃山時代）の遺物は、各区の砂礫層から土師器小片が少量出土した。須恵器は、甕が2区、鉢が4区砂礫層から出土した。1区の重機掘削中に山茶椀1点が、4区砂礫層から焼締陶器挿鉢が2点出土した。いずれも小片である。瀬戸系の施釉陶器鉢底部が1区砂礫層から1点出土した。輸入青磁が2区と3区の砂礫層から1点ずつ、輸入白磁が3区砂礫層上層から2点、輸入青白磁蓋が1区耕土層から2点出土した。

江戸時代の遺物は後期のものが大半である。各区の耕土層から染付磁器、施釉陶器、焙烙、土製の人形片などが出土した。瓦は軒丸瓦・丸瓦・棧瓦が数点出土した。

小結 調査地では遺構面を検出できなかった。基本層位は、地表面は標高約29.0m、標高28m前後に厚さ20～30cmで黒褐色の耕土層があり、その下層は洪水による堆積と思われる砂礫層を標高約26mまで確認した。

耕土層は出土遺物から江戸時代から近代のものであり、砂礫層は中世の遺物が多いことから、その時期に鴨川の氾濫によって堆積した可能性が高い。(布川 豊治)



図71 1区全景



図72 2区全景



図73 3区全景



図74 4区全景

2 平安京跡

経過 今回の立会箇所は、京都御苑の南側全域にあたる、丸太町通南側歩道および車道に、布設される電線共同溝工事を対象に実施した。この付近では、京都地方裁判所、御所南小学校において大規模な発掘調査が行われ、中世から江戸時代の濃密な遺構の存在が確認されている。また同一路線では、電気やガス、上下水道の埋設工事に伴う立会調査で成果をあげている所でもある。工事は、試掘から既存埋設管の位置を確認した後に麩屋町から烏丸通に向かって実施された。併行して歩道にも側線工事を行ったが、この部分は既存埋設管が多く土層の確認は出来なかった。しかし車道部の工事では、良好な状態で土層確認ができた。

遺構 各地点表示は車屋町通東歩道延石を基点として、E (東)・W (西) に 10 m ごとに割り付けて表示した。各地点の距離は、基点からの実長を現わしている。遺構

の概説は時代順に並べて述べることとする。

平安時代

E 120 地点 (土壌) 間之町通との交差部に位置し、G L (地表面) からの検出面は 105cm、土壌の大きさは 2.5 m 幅で、深さは 25cm であった。その灰色砂泥層の中には、平安時代後期の軒丸瓦と土師器皿が入っていた。

E 260 ~ E 255 地点 (土壌) 土壌と思われるもので、西側と東側は棧瓦の入る焼けた土壌 (近世?) によって切られている。検出面までの G L (地表面) の深さは 98cm で、幅は不明である。12 世紀中頃の土師器が多く出土した。他にも鉄片、須恵器も見られた。

鎌倉時代～室町時代

E 206 地点 (土壌) 2 つの土壌が連続しており西土壌は、G L (地表面) の深さ 40cm にあって幅は 1 m、東土壌は検出幅 70cm を確認した。東土壌には 13 世紀・14 世紀の遺物が入っていたが、西土壌には遺物は認め

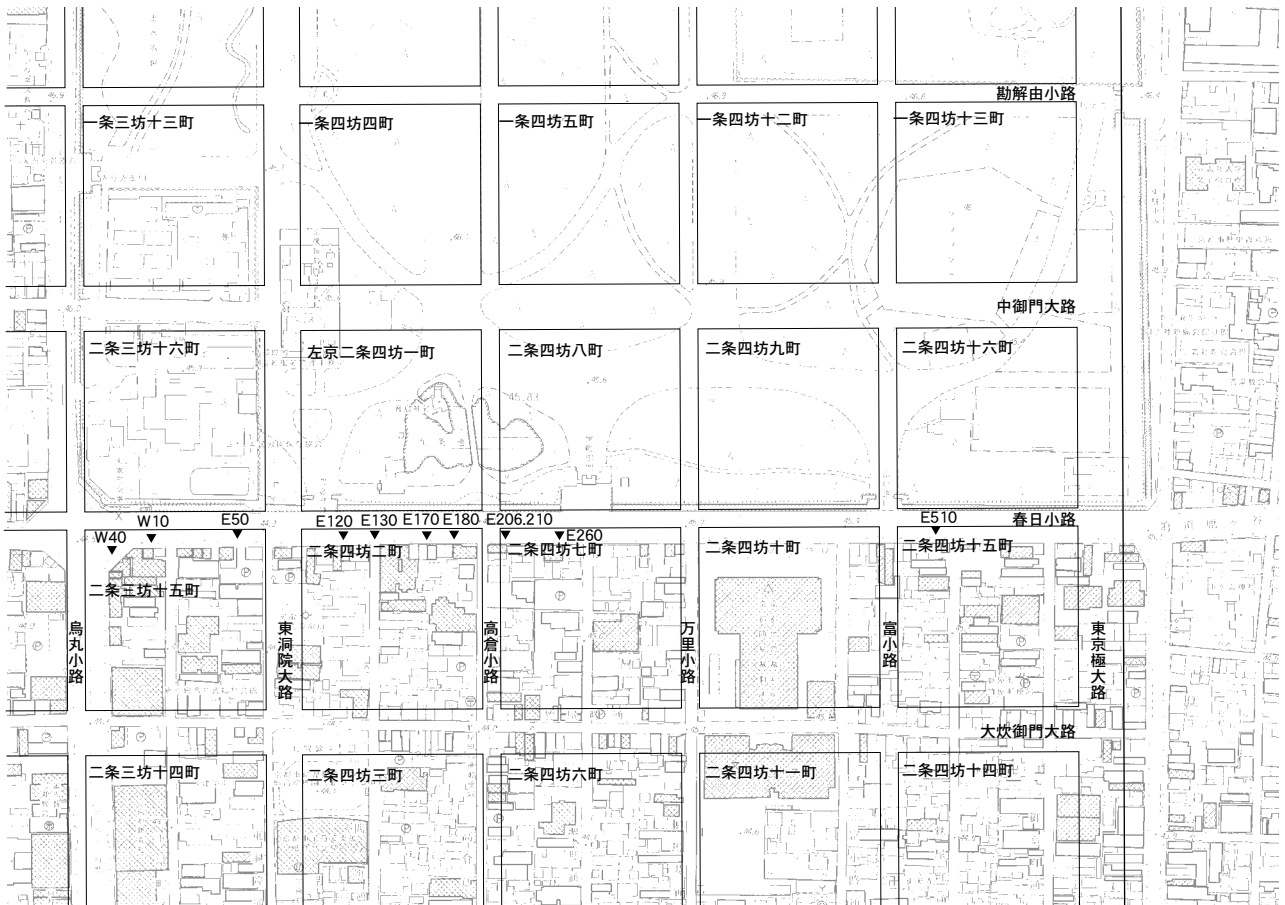


図 75 調査位置図

られなかった。

E 180 地点（土壌） 掘削トレンチの南壁にあってG L（地表面）からの検出面は、深さ 90cmにあって西壁の肩部のみ確認できた。埋土は暗灰色泥砂で、川原石と共に 13 世紀と 15 世紀の土師器が入っていた。

W 40 地点（包含層） 烏丸通の東側部分において、掘削溝の東壁で現代から江戸時代の良好な観察面を確認した。G L（地表面）下 115cmにおいて厚さ 55cmの遺物包含層中より 16 世紀の土師器を 1 袋分採集した。

江戸時代前期

W 10 地点（包含層） 包含層はG L（地表面）下 60 cmで検出し、厚さは 60cmあった。江戸時代前期の土師器皿が包含されており、近代焼け瓦土壌によって切られている。

江戸時代後期

E 50 地点（土壌） 幕末の火災を整理したと思われる大型の焼土を大量に含む土壌である。東洞院通の西 10 mの地点にあり土壌はG L（地表面）下 40cmで検出

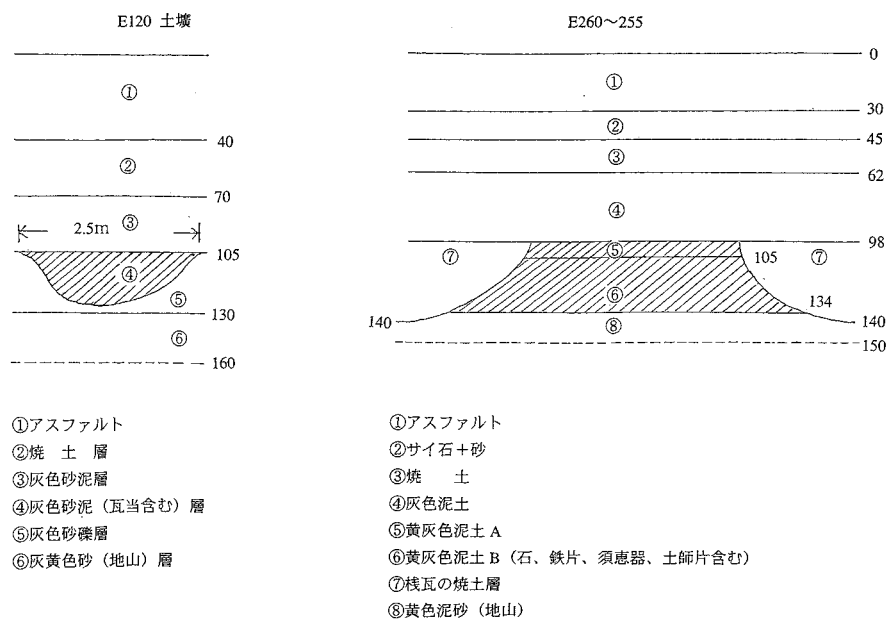


図 76 土層断面図 1

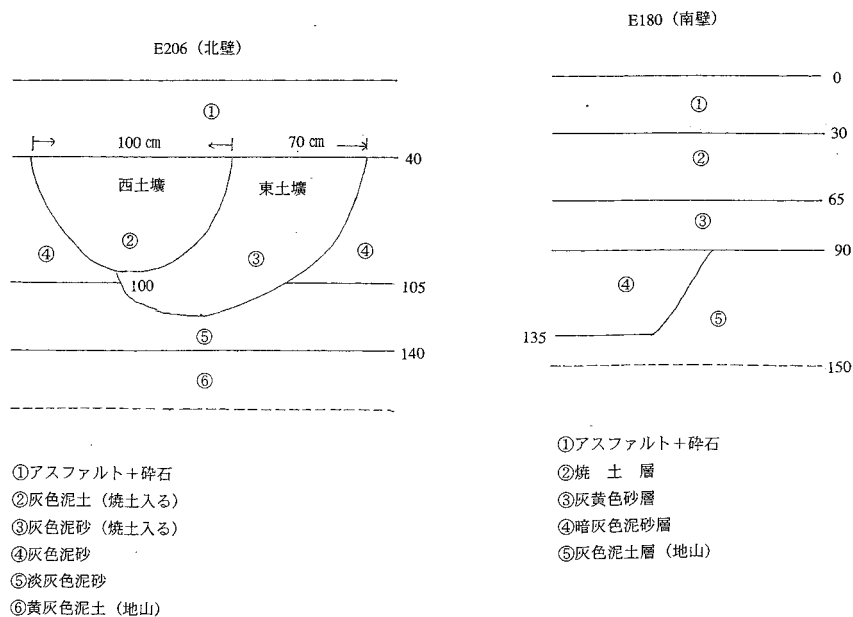


図 77 土層断面図 2

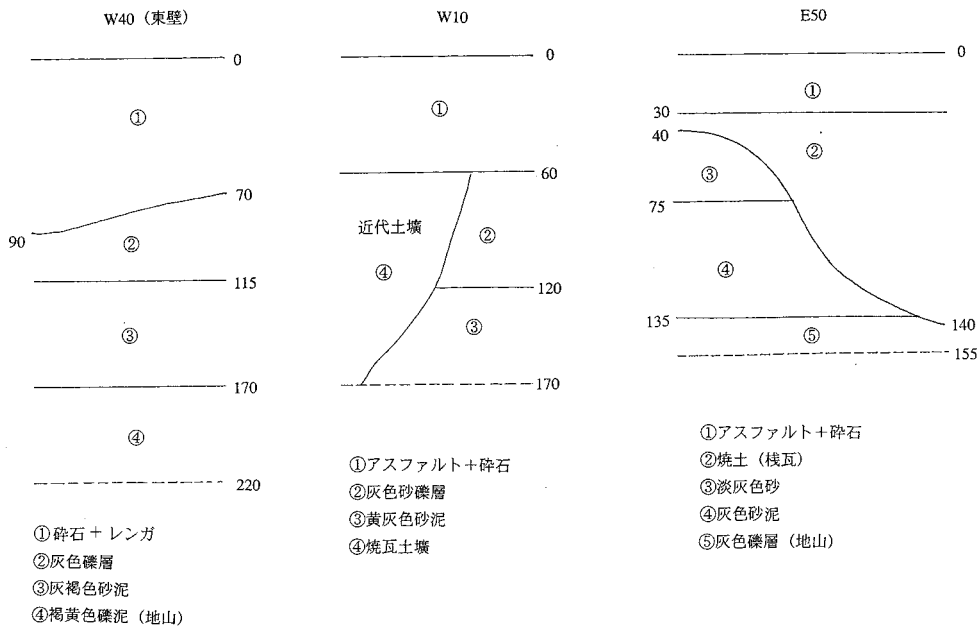


図 78 土層断面図 3

小片であるため性格はわからない。E 380 地点出土の一石五輪塔は緑色をした砂岩であり、桃山時代と考える。

小結 遺構を垂直分布としてみると、全てGL（地表面）下 1.4 m までの間に存在し、上面には江戸時代後期（幕末）の大火の痕跡が広く分布していることが明らかとなった。この下には、鎌倉・室町時代の遺構（土壇）や平安時代後期の土壇も多く存在していた。また时期的な分布から見ると、当初想定していた平安時代前期の条坊に関する遺構は確認できなかった。しかし、現在道路となっている所に近世の井戸、E 170 地点の炉跡も検出しているため、以前は町屋部分であったと思われる。（吉村 正親）

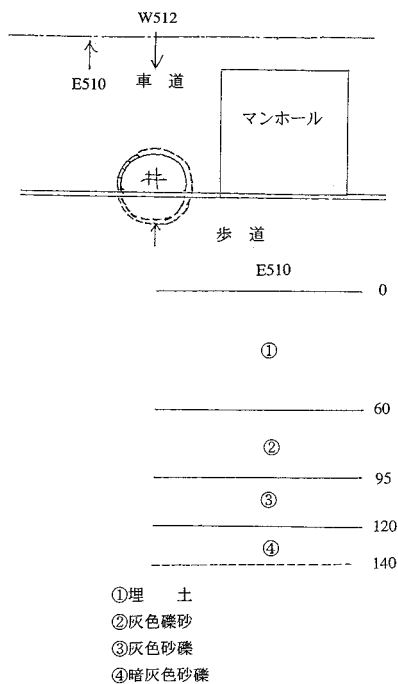


図 79 土層断面図 4

し、厚さは 1 m あった。

E 512 地点（井戸）江戸時代後期と思われる切石組の井戸跡である。立会調査であるため、最下層まで確認できなかった。

遺物 遺物は基本的に掘削溝の北側断面中から採集した。一部南壁から採集した部分もある。江戸時代から平安時代後期の各遺構の遺物は、保存状態が良好であった。なお、鉄片については刀状をしているが詳細については



図 80 土層状況

3 平安京跡・烏丸丸太町遺跡 (閑院宮邸跡)

経過 旧閑院宮邸跡庭園整備事業に伴う試掘調査である。調査地は、京都御苑の南西角に位置し、江戸時代から明治時代にかけて旧閑院宮邸が所在したところである。平安京の条坊では、左京二条三坊十六町に該当し、平安京以前としては、縄文時代から飛鳥時代にかけての集落遺跡である烏丸丸太町遺跡の範囲に含まれる。

京都御苑保存協会事務所の南に位置する庭園は、江戸時代の閑院宮邸の庭園遺構と考えられているが、その成立と変遷についての詳細は、絵図や地図などでわずかに確認できる程度である。今回、建造物と共に文化施設としての利用を目指して庭園の整備事業が行われることになったため、汀の旧状、築山の状態、景石の据え付け状況などを解明する目的で8箇所の調査区を設定した。それぞれの調査区の規模と目的は、以下の通りである。

1 トレンチ 規模：4.2 m × 0.9 m

目的：土層観察（焼土層の確認）と階段東側の間知石下層遺構の確認。

2 トレンチ 規模：7.3 m × 0.6 m、
0.4 m × 0.4 m（景石の根元）

目的：汀の旧状、築山と景石の時期、景石の据え付け状態の確認。

3 トレンチ 規模：5.4 m × 0.6 m（敷地内）、
3.6 m × 0.5 m（堀外）

目的：汀の旧状、整地層の状況、堀と堀外にある積み石（丸太町通に面する）との関係を確認。

4 トレンチ 規模：6.3 m × 1.0 m

目的：護岸の変遷確認。

5 トレンチ 規模：1.9 m × 0.6 m

目的：遣水の変遷、池との関係を確認。

6 トレンチ 規模：4.6 m × 0.8 m

目的：護岸の変遷確認。

7 トレンチ 規模：2.4 m × 0.5 m

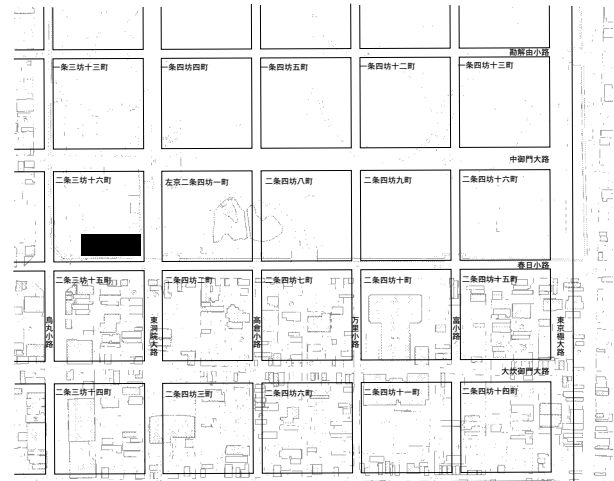


図 81 調査位置図



図 82 調査前全景（北東より）

目的：中島の成立と変遷の確認。

8 トレンチ 規模：3.5 m × 1.0 m

目的：築山の成立と変遷の確認。

これらの調査区以外に池底・中島の景石との層序関係を確認することと記録保存を目的として、池底で新たに確認された魚溜り状遺構と飛び石状遺構の測量、中島北部積み石・南東部積み石の写真測量及び一部掘削、中島北部対岸積み石の測量を行った。

なお、江戸時代の閑院宮邸庭園の成立と変遷を明らかにすることを主眼としているので、京都造形芸術大学日本庭園研究センターが平成12年度に実施した試掘調査で検出している江戸時代の焼土層を掘り下げの基準とした。

調査は平成16年11月1日に機材を運び込み、2日から調査区の掘削を開始し、12月1日に埋め戻し以外の現場作業を終了した。また、北岸（1トレンチ）から

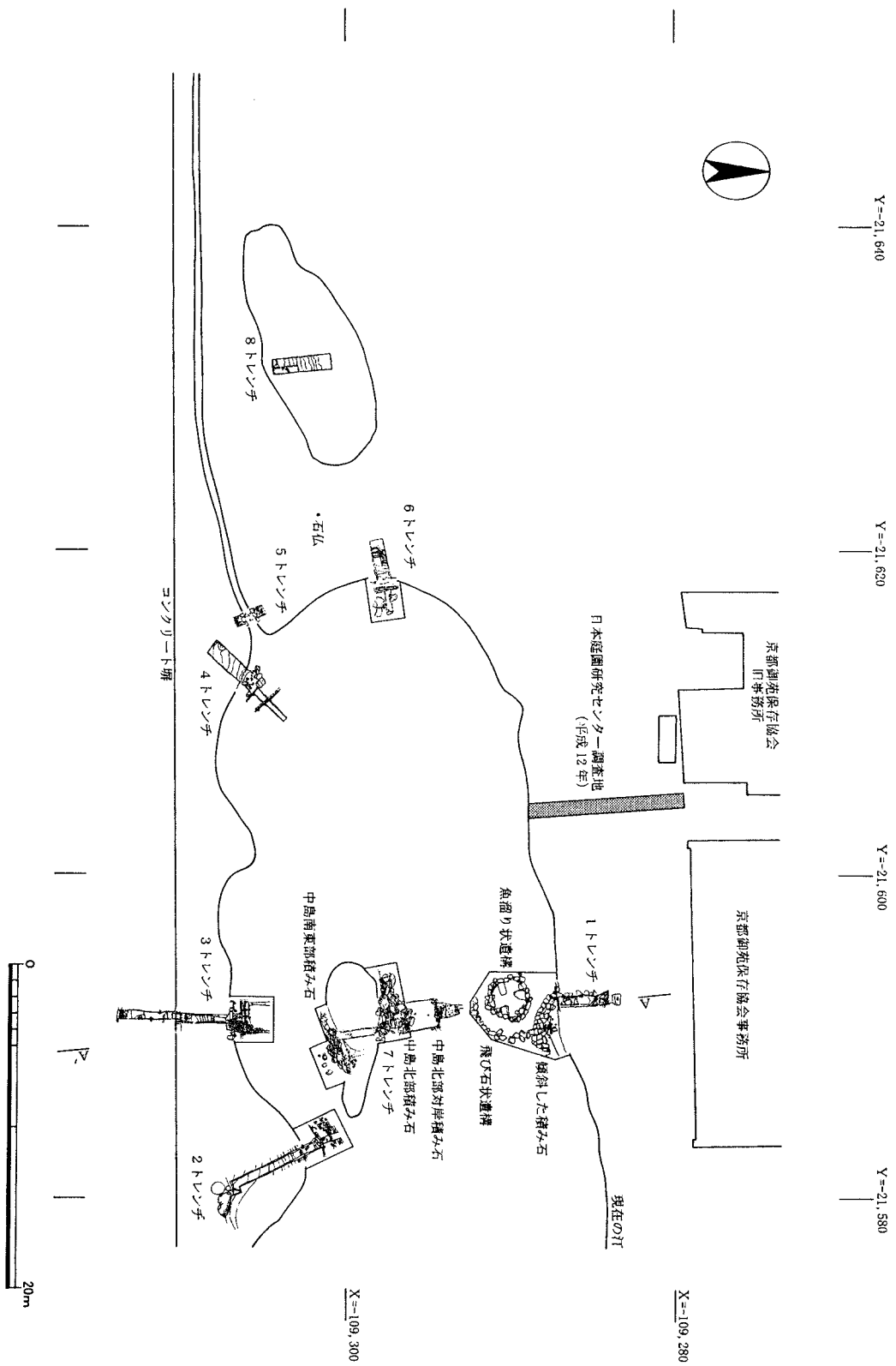


図 83 トレンチ・遺構配置図

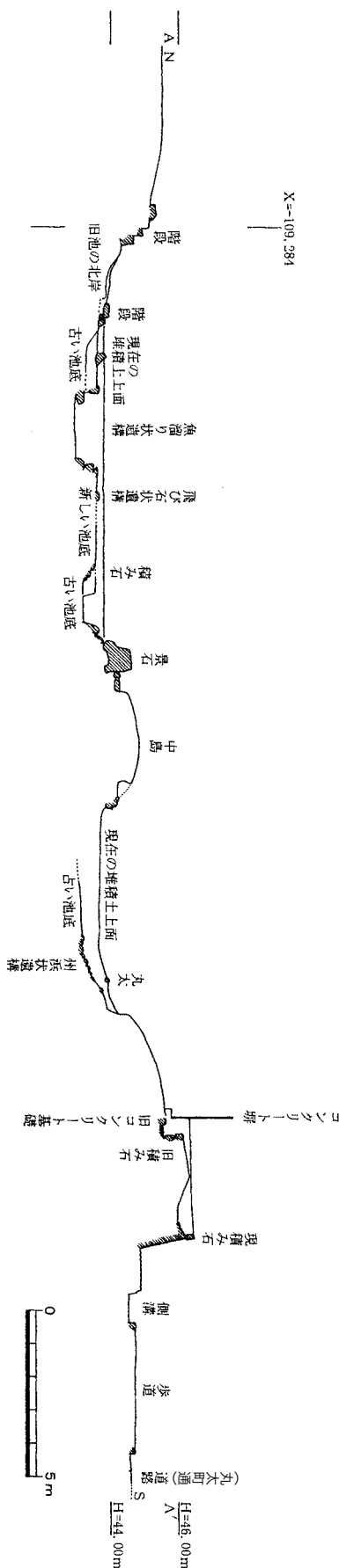


図 84 南北立面図

丸太町通間の通し断面図を作成するために、12月9日に追加調査を行った。掘削は総て人力で行い、調査中の残土については土嚢袋に詰めて各調査区のかたわらに仮置きしている。

遺構

1 トレンチ

調査前は、池に面する階段の東端に間知石が南北方向に2～3段、汀に沿って東方向に4段積まれており、北岸を形成していた。角に積まれていた間知石の裏には、コンクリートが充填されていた。階段の最上段と間知石の上面は、ほぼ同じ高さである。調査区の北側には、石碑の台石と考えられる中央に長方形の孔を穿ち、上面の一部を面取りした石が置かれている。

層序は、基本的に陸部から池側に落ち込む。約5～14cmの表土(腐植土)下には、3層にわたる整地層が調査地の中央付近から池側に落ち込むように堆積し、更にその下には近・現代の補修と考えられる黒褐色粘土が約30～50cm幅で堆積する。整地層と粘土層、粘土層下の大型礫を多量に含む粘土層を間知石とその裏込めが切り込む。間知石は丸太杭で固定されている横に渡した丸太と裏込めの大型礫の上に積み上げられていた。丸太の下からは腐食した杭の痕跡を確認した。階段③の南から灰色粘土が下の階段(階段③の下段)を覆うように堆積している。大型礫を多量に含む粘土層の北側では、暗褐色粘質土、黒褐色粘土が潜り込むように堆積し、更に北側にある階段②は小礫を多く含む黒褐色粘質土に覆われていた。15層は新しい池底であり、地山の灰色砂礫を突き固めたものである。階段③はこの新しい池底上に置かれているようであり、上段に関しては、灰オリーブ色粘土上に据えられている。この層は旧汀と考えられる礫敷き上層のオリーブ黒色粘質土を切り込んでいた。旧池底は礫敷きの約20cm下から南へほぼ水平に杭跡の下まで続き、杭跡の根元から緩やかに落ち込む。

明確な焼土層は確認できなかったが、間知石下層から、一段階古い階段(階段①・③)や州浜状の石敷き、更に

もう一段階古いと考えられる階段(階段②)を検出した。更に、階段③の北側からは、礫敷きとそこから一段下がって旧池底を確認した。詳細時期については不明であるが、最下層検出の階段③直上で戦前または戦後まもなくに相当するガラス瓶底や陶器製薬容器蓋などが出土しているため、下限はこの頃と考えられる。また、この階段③については、現在の階段下に続きが入り込んでいるため詳細は不明であるが、わずかに弧を描くことや使用されている石から勘案すると、飛び石状遺構の続きの可能性がある。

2 トレンチ

築山の汀は水位の上昇により抉れていた。水位が現在よりも50cm程度低かった時期に、横板と杭を使用した土留めと、丸太と杭による土留めが行われていた。築山頂上にはチャートの景石が2個、中腹には4箇所の矢跡を持つチャートの景石が1個据えられており、前者は立石と横に寝かせた石、後者は伏石である。調査区は、横に寝かせた石の掘形の有無を調べることが可能な場所に設定した。

陸部では、表土下に焼土塊を少量含む暗褐色砂質土層や褐色微砂層が堆積している。汀では、腐植土や砂層が大型礫を含む黄灰色粘土層、焼土塊・炭化物を多く含む黒褐色粘質土層上に堆積している。池底は、石列のある高い所もその北側の低い所も灰色砂礫層である。

築山は近・現代に土を盛ったものであり、景石の据え付けについても同時期に据え付けられたと考えられる。汀の土留め用横板は地山である灰色砂礫層に溝を掘り、両側に支えの石を並べていた。汀の石列についても灰色砂礫層上に直接並べられたものである。

3 トレンチ

コンクリート堀内の堀の根元には、現コンクリート堀基礎の西側に一段階古い旧コンクリート基礎の上面が地表に現れていた。コンクリート堀のある陸部の頂上から池底までの勾配はきつく、高低差が大きい。汀には、階段状にずらして間知石が2段に積み

ているが、調査区東側は崩れており、西側についても、間知石の裏にコンクリートを入れて固定している。水位は間知石の上段半ばまでであった。池底から横板と丸太と杭による3段の土留めが造られており、上段の丸太と間知石の間には、調査時に検出した州浜状遺構に使用されている石と、形や大きさが似た石が無造作に散らばっている。堀外の調査区は、丸太町通に面した現積み石の上面であり、植栽が多く植えられている。

間知石までの陸部は、表土、黒褐色粘質土、焼土塊を少量含むオリーブ黒色粘質土、焼土塊・炭化物を多く含む暗褐色粘質土などが堆積している。断割の際に検出した胴木の周辺は焼土塊・炭化物・礫を多く含む層であった。間知石の据え付けは最初の2層以外の層を切り込んで行われており、上の2層分は戦後以降でも特に新しい時期のものと考えられる。また、焼土塊・炭化物を多く含む暗褐色粘質土直上に張り付くように板ガラス片が出土している。池底は、腐食しつつある植物遺体を多く含む現在の堆積層、汀から流れ込むように堆積している灰色砂層、州浜状遺構直上の灰色粘土層である。この粘土層は陸部にまで入り込んでいる。

堀外のコンクリート堀側(堀外調査区北)では、コンクリート堀を造る際に攪乱されているが、中央付近では旧積み石の裏込めを検出した。版築が行われたようで、小礫を多く含む非常に硬い層である。丸太町通に面する現積み石の北側では、裏込めの石を充填した後の客土の層が見られる。

間知石、板と杭の護岸下から、州浜状の石敷きが出土した。更に陸部の断割部分からは、土留めと考えられる横方向の丸太(胴木)を検出し、陸部のレベル高が現在よりも約80cm下がることが明らかになった。また、堀は少なくとも3回は造り直されており、現在のコンクリート堀はその3回目に相当する。2回目のコンクリートの基礎と1回目に堀を造る際に掘り込まれたと考えられる径40cm程度の土壌を、堀の北側から検出している。コンクリート堀の外側(丸太町通側)で

は、2段に積まれた積み石とそれに伴う裏込め、現在の積み石（丸太町通に面する）の裏込めを検出した。尚、コンクリート塀と検出した旧積み石の間からは、ナイロン袋など現代の遺物が多く出土している。

4 トレンチ

汀は丸太と杭による護岸が2段あり、その上段には景石が5個並べられていた。景石は、瓦片を含む陸部からの流入土上に据えられており、触ると動く。なだらかに傾斜する陸部は、池側が段差を持って落ち込んでいる。

陸部は表土、灰黄褐色粘土、焼土塊を少量含む暗褐色粘質土の堆積であるが、汀は景石の下に2層の瓦敷きが行われている。その下層にオリブ黒色粘土、中島南東部積み石の下部石付近でも確認した暗オリブ灰色粘土が入り、更に下に灰色砂礫層が続く。池底は黄灰色粘土層のみである。

現状は丸太と杭により2段階の護岸がされているが、陸部側の護岸には棧瓦や軒丸瓦、平瓦などが敷き詰められている。この瓦敷きの状態を確認するために断割を入れたところ、2回にわたって瓦が敷き詰められていることを確認した。使用されている瓦に時期差は見られず、下層の瓦敷きは早い段階で埋められてしまったと考えられる。更に下層から、中島南東部石積みの根元付近で検出した暗オリブ灰色粘土を検出した。地山(灰色砂礫)直上に張られていると考えられるが、時期は不明である。

5 トレンチ

遣水は、間知石を1～2段に積んで造られている。

表土と焼土塊が少量含まれる黒褐色粘質土の2層から成る。

間知石の両側から、州浜状の石敷きを検出した。また、遣水底は小礫を疎らに敷き詰めていた。

6 トレンチ

調査前は、杭と丸太による土留めが造られ、陸部との間には土が厚く堆積していた。陸部は、喫水線付近が水によって抉られており、先端が細くなった杭が土中から現れていた。池底には、矢跡を持つ方形の景石と高さが

20cm程の景石が2個据えられている。後者の景石は、水面よりも高さが低いため、水面下に隠れて見えていなかった。

陸部では、表土と焼土塊を少量含む黒褐色砂質土の間に、黒褐色粘土が特に池側に分厚く堆積している。汀の陸部の下側は大きく侵食されている。池側の杭までには、粘土が2層にわたって堆積し、焼土塊や炭化物を含む粘質土層や粘土層が続く。池底は地山の灰色砂礫の上に2層の粘土層が堆積し、景石は上の粘土層上に据えられている。下の粘土層に対応するような別の石の並びを検出しているが、調査地外のため詳細は不明である。

南側は京都造形芸術大学日本庭園研究センターの調査による試掘坑があり、攪乱として掘削した。現在、陸部と汀の高さと距離の比率は、高さの方が大きい、旧状は距離の方が大きく、陸部から汀にかけてなだらかに落ち込む地形であったことを確認することが出来た。また、池底を掘削し、この庭園において地山と考えられる面を断ち割ったところ、古墳時代初頭の古式土師器（布留0式と考えられる）が出土した。中世の龍泉窯の青磁片も池中堆積土（12・13層）から出土している。

7 トレンチ

中島を護岸する南北の積み石との間の土が失われ、断面が露出していた。

表土の次に焼土塊を微量含むにぶい黄褐色粘質土、暗褐色粘質土、南側にのみ黒褐色粘質土、更に下に焼土塊・炭化物を多く含む黒褐色粘土がほぼ水平に堆積している。黒褐色粘質土には石や瓦が少量であるが含まれ、また、一部にしか見られないことから、護岸積み石の裏込めと考えられる。中島南部の露出していた焼土層は、深さから6層に相当すると考えられるが、面的な確認作業を行っていないため、断定はできない。

中島南部の侵食により表出している焼土層の深さまで掘削したが、上層に比べて焼土塊の量は増えたものの、明確な焼土層には至らなかった。堆積は水平であるが、南側の土層や遺物の出土状態から、一度、盛土がされて

いる可能性を指摘できる。焼土塊が増えた層（6層）直上の南側では、石を蒔いたような痕跡が認められた。

8 トレンチ

上面を平らに成形した土山で、草がたくさん生えていた。

約5cmの表土（腐植土）下に、粘土や粘質土が20～60cm程堆積している。オリーブ黒色粘質土（7層）下は、この付近の表土である黒褐色粘質土である。

掘削する直前に、池中の堆積物であることが判明した。確認のために掘削したところ、数回にわたり盛土がされていることが判った。

魚溜り状遺構とその周辺をめぐる飛び石状遺構

この二つの遺構はヘドロ除去中に、北岸にある階段の南側で確認された。

魚溜り上面は新しい池底に伴い、底は古い池底の更に10～15cm下に達している。側面の石は荒割りした石や河原石を2～3段に積んで用い、3方向から中心に向かって造られた張り出し部には、側溝のコンクリート蓋やコンクリート塊、成形された花崗岩を用いる。この張り出し部は、それぞれ大きく成形された石に支えられている。

1 トレンチの調査の際に魚溜り状遺構の北側まで断割を入れたところ、新しい池底下から掘り込まれた掘形を確認した。また、南側の魚溜り状遺構と飛び石状遺構の間に断割を入れたところ、新しい池底を掘り込んで造った掘形の痕跡を検出した。北側と結果が異なったが、地山の砂礫を使用して造られた新しい池底の厚みは非常に薄く、南側で確認出来なかった可能性があり、また、北側については新池底と掘形内の土の土質も似ており、調査範囲も狭いため、今回の調査ではどちらが先に造られていたのかということについての言及は避ける。なお、図面上においては、検出時の状態を尊重して、新旧の切り合い関係をそのまま表現している（1 トレンチ：15層と16層の関係、中島北部対岸積み石の北側：I層とII層の関係）。

飛び石状遺構は、西側にある魚溜りの形に添うように弧を描いて配置されている。南側まではその存在が確認できるものの、それより西側については池中堆積物のため、どのように配置されているのかを確認することは出来なかった。平らな石の上面をほぼ同じ高さに揃えて並べている。大きめの隅丸方形の石が数個使用されており、礎石の転用と考えられる。北側の傾斜した積み石の下に入り込んでおり、積み石より古いか、同時期に造られたと考えられる。

傾斜した積み石

1 トレンチの調査の際に確認した。表土（腐植土）の約10cm下から、1 トレンチで検出した南側の古い階段を埋めた礫混じりの層を裏込めとし、砂礫層（新しい池底）直上に造られている。

間知石の護岸の南側に斜めに積まれた構築物である。西側では2段、東側では3段に、ある程度整形された石が積まれている。断面形態は直線ではなく、放物線を描くように丸みを帯びている。石の裏側にコンクリートが入れているものがあるが、確認した限りでは1つの石だけであった。積み石上部の間知石との間は礫敷きであり、中心付近から東側に向かって横板が杭によって止められ、横板の端に立てかけるようにして景石が配置されている。この石は触ると動くので、最初からこの位置を占めていたとは考えにくい。横板と間知石の間は、一時期、庭園の東端にある水路からの導水路として使用されていたようである。石の隙間には腐食していない植物遺体が多く含まれ、僅かに土が混ざる程度であった。

中島北部積み石

積み石北部は掘り込まれて、古い池底が出ていたので詳細は不明であるが、1m北側には新しい池底が残っていた。古い池底に積もった深さ50cmほどの堆積物を利用し、礫や瓦をその上面に敷いて面的に固め、新しい池底として作り直していることを確認した。古い池底に対応する東側の2石の根元のヘドロを取り除くと、その間からは砂層が確認できたが、粘土を入れた痕跡は見当

たらない。積み石の西側に新しい池底を突き破って立てられていた棧瓦（長辺約30cm、半分は堆積土中に埋まる）の裏からは、19世紀前半と考えられる陶器が出土している。

2個の巨石を景石とし、それを支える根石や周辺の積み石で中島の北部を護岸する積み石の一群であり、中島から北側に出っ張っている部分である。後述するように、古い池底の段階から既にこの部分だけ北に拡張されていたようである。背丈の低い方形の景石は、多くの人頭大の根石を用いて嵩上げしており、根石は新しい池底上に組まれている。古い池底に対応する石を4個検出したが、上部に載っている石と異なる丸みを帯びた川原石が用いられ、また、この石の間からは地山と考えられる砂層を検出した。西端の石に関しては、根石が砂礫層との間に入れられており、その上に据えられている。新しい池底に伴う石を除けると、この4石が中島から張り出していることが良くわかる。背丈の高いほうの景石は、中島を背にして周辺を割り石で護岸していることから、これも新しい池底に伴う修理後のものと考えられ、出土した磁器も19世紀の古くても幕末に遡るものである。

中島北部対岸積み石

現在の池中堆積物の下にある新しい池底の下には、植物遺体を少量含むオリーブ黒色粘土があり、この層を切り込んで暗灰色粘土が入れられ、積み石上段を積む。下段の積み石も暗灰色粘土の上に並べられているが、時期は少し異なると考えられる。積み石の南側の層位は、新しい池底下に堆積層の灰色粘土、オリーブ黒色砂質土があり、積み石直上には2段目以上の積み石を積み上げるのに用いられた暗灰色粘土が、流れ込んでいた。

残っていた新しい池底を取り除いたところ、2～3段に積まれた石組を検出した。径15～20cm程の川原石を東西方向に直線に並べており、溝の護岸のような構造をしている。石と石の間に径2～3cm程の杭を一本ずつ打ち込んでいる。最下段と2段目以上の石の積み方から、前者と後者が別の時期に造られたと考えられるが、

層位からはほとんど差異が認められず、時期を置かずに積み足された可能性がある。

中島南東部積み石

池底の4石の根元には、暗オリーブ灰色粘土がしっかりと貼り付けられていた。その粘土を剥すと中島北部積み石においても検出した砂層が出土した。暗オリーブ灰色粘土は、古い池底に伴う漏水防止対策の痕跡と考えることが出来る。

侵食が著しく、上部の積み石が数個、落石している。池底の川原石を含む4個の石の上に、荒割した小さめの石を積み上げて護岸している。積み石上部にも大型の川原石が載っているが、転石の利用と考えられる。下部の4個の石は、古い池底に伴うもので、後のものは新しい池底に伴うものと考えられる。現在、池の堆積土中に埋もれているが、確認できる限りでは、中島東端のすぐ東から北へ積み石の方向が変化している。この辺りから、弧を描いて北部積み石東端へ到ると考えられる。

遺物 各トレンチで出土した遺物のほとんどが、土師器や陶磁器類であり、江戸時代～近・現代のものが大半であった。どの層にも近・現代の遺物が含まれており、何度も浚渫がされていた様子を窺い知ることができる。その他の遺物としては、古墳時代の古式土師器や鎌倉時代の青磁片などが出土している。これらは特に、庭の基底部をなす砂礫層から出土していることから、当地が烏丸丸太町遺跡として周知されていることと考え合わせて注目に値する。

古墳時代初頭：6トレンチの16層から大きく張る体部が頸部で窄まり、口縁で外反する短頸直口壺の口縁部片が出土している。外面を刷毛目調整した後、頸部についてはナデを施す。口唇部に沈線が入る。布留0式に収まると考えられる。

平安時代：土師器皿の口縁部片や瓦が出土したが、細片のため時期を特定できない。須恵器甕の胴部と見られる破片を採集している。土師器皿は、1・2・3・7トレンチで出土している。

鎌倉時代：6 トレンチの池中堆積土から中国浙江省にある龍泉窯の青磁の碗または皿の破片が出土しており、浚渫の際に紛れ込んだものと考えられる。

石仏は、全体に磨滅し、腹部より下の部分は欠損している。調査地の北西にあったとされる旧二条城の石垣に使用されていたものか、他の場所から運ばれて放置されたものと考えられるが、年号が入っていないため、詳しい時期は不明である。同様の石仏が池の堆積土中から発見されており、この石仏はもともと池中にあった可能性もある。

戦国時代～安土桃山時代：土師器皿の破片が1・2・3 トレンチで出土した。また、安土桃山時代の志野系陶器片も出土している。

江戸時代前期：土師器皿、肥前磁器の碗や皿、すり鉢などが、中島北部積み石と同対岸積み石などの新しい池底から古い池底間の堆積土中に含まれていた。池底を造る際の掘削による混入と考えられる。水際に抉られて露出している中島南部の焼土層から採集した遺物もこの時期に相当する。

江戸時代中期以降：土師器皿、肥前磁器の碗、京・信楽系陶器の碗、すり鉢などが各トレンチのほとんどの土層中から出土した。中島北部対岸積み石付近では、18世紀後半から19世紀前半の土師器皿、肥前磁器が出土している。

明治時代～現代：土師器皿、磁器などとともに、ガラス片が多く出土した。棧瓦も4トレンチ以外のトレンチで多く見つかった。現代の遺物は、現在の堆積土中に含まれ、編み棒、糸巻き、ガラス瓶などがある。8トレンチを設定した築山と考えられていたものは、池中の堆積土を盛り上げたものと判明したが、遺物もビー玉など現代の遺物がかかり入っていた。各トレンチで出土したガラス片は、明治・大正時代のもので確実に言えるものはなかったが、すずが付着したランプの火舎の破片が出土している。1トレンチの階段③直上からは、右から左方向に「東京中野 食品工業株式会社」と凸状に鋳出



図 89 1 トレンチ全景 (南から)



図 90 2 トレンチ全景 (北から)



図 91 3 トレンチ堀内側 州浜状遺構 (北から)



図 92 4 トレンチ全景 (北東から)



図 93 5 トレンチ全景 (東から)



図 94 6 トレンチ全景 (東から)



図 95 7 トレンチ全景 (南東から)



図 96 8 トレンチ全景 (南西から)

されたガラス瓶底と、「□UKUDAGEN」の青色文字とこの文字の上下に線描きの星印を描いた陶製の薬容器蓋と考えられる遺物が出土した。また、木製の柄に鎌の刃に似た形をした4cm程の刃が付いた道具も出土している。いずれも戦前または戦後すぐくらいの時期のものと考えられることから、その頃には階段③は埋められていたと想定できる。

小結 それぞれの岸や池底によって変遷の過程が異なるため、別けて記述する。

・池底

池底は新旧2時期が存在したと考えられる。中島北部では、2時期分を層位で確認でき、西岸(6トレンチ)でも同様である。しかし、池の南西側(4トレンチ)ではヘドロの堆積が非常に浅く、底上げした痕跡についても見当たらず、新旧の区別が付かなかった。池底の深さは西・南西部分が浅いことから、古い段階の池底はある地点から東側に急にまたは緩やかに深くなると考えられ、新段階の池底については西から東へ緩やかに深くなるものと考えられる。北部対岸積み石付近出土の遺物からは、旧池底は18世紀中頃、新池底は18世紀末から19世紀前半に造られたと判明した。

西岸の池中の景石には、現在の水面下に隠れて見えなくなるものが2つあり、実際に見えるのは1つだけであったようであること、また層位からは、新しい池底が造られたときに、これらの景石が据えられた可能性を指摘できる。

中島の南東側の旧池底(標高約43.00m)は、更に数十cmは深くなる部分が存在することから、水路のようなものが掘削されていた可能性がある。

・北岸の変遷

間知石による護岸以前に、数段階が想定できる。(1)現在の階段とその両側が盛土により護岸されていた段階、(2)1トレンチ北から検出した階段①や階段②が州浜状礫敷き(9層)と共に機能していた段階、(3)階段②と階段③が共に機能していた段階、(4)黄灰色

砂礫層の礫敷き(24層)の少なくとも4時期が想定でき、傾斜した積み石や魚溜り状遺構がどこかの段階で伴うものと考えられる。

階段③は、遺物のところでも述べたように、少なくとも戦前または戦後までは地表に現れていたと考えられ、また、飛び石状遺構の続きであった可能性もある。

・南岸の変遷

池の南東部にある築山や景石は、近・現代に盛土されたものであり、作庭当時に存在していたとしても、池の水位同様に、低いものであったと考えられる。また、旧汀については、地山の灰色砂礫を利用した石列(2トレンチ)や州浜状遺構(3トレンチ)が構築されており、緩やかな勾配の汀であったと考えられる。3トレンチの洞木は、州浜状遺構とは同時期に存在していた可能性は低い。調査範囲が狭かったため、詳細は不明である。

・西岸の変遷

西岸は、州浜状の石敷きを行った様子が見られず、作庭当時から盛土による護岸であった可能性がある。しかしながら、遣水の調査(5トレンチ)で石敷きのようなものを確認しており、(1)後世の浚渫で破壊された、(2)汀が更に西側にあった、(3)池が今よりも狭く現在の池中にあったという可能性も考えられる。南西岸についても、古い時期の汀を確認することが出来なかった。明治期以降の護岸としては、杭による護岸と瓦敷きによる2回の護岸を確認している。陸部から汀にかけての勾配は、なだらかであり、西岸も同様に低いものであったことは層位からも確認している。

・中島

北部積み石と南東部積み石の下部構造から、上部に積み重ねられた割り石による積み石や景石は新しい池底に伴うということがわかった。表土を含む3・4層は、石を積み直す際に盛土された可能性があり、中島の高さは低かったと考えられる。また、北部積み石の出っ張りは、後世に改造されたものではなく、作庭当初から北側に張り出して石を積んでおり、おそらく上部に据えられていた景



図 97 魚溜り状遺構・飛び石状遺構全景(南西から)



図 98 中島北部積み石完掘状況(北から)

石に視覚効果を与えるものとして設計されたと考えられる。

・中島北部積み石と同対岸積み石との層位関係

古い池底は、8層直上や魚溜り状遺構と飛び石状遺構間の掘削によって出土した土師器・肥前磁器・焼締陶器などから、18世紀の中頃には造られていたと考えられる。灰色砂礫層の地山(8層)を池底としていたが、北部対岸積み石の最下段(6層の暗灰色粘土を用いて浚渫)を、何らかの理由で地山を掘り込んで造った。石と石の間には、それぞれ杭を打つという手の込んだ土留めと考えられる作業を行っている。時が経つにつれて、腐植土や流入土により北部対岸積み石が埋まり始めた頃に、北側付近の7層を掘削して新たに暗灰色粘土(5層)を入れて、石を積み上げた。この時期は粘土層に張り付くように出土した土師器皿から18世紀後半～19世紀のどちらかという19世紀寄りである。5層と6層の粘土の質がほとんど変わらないことから、最下段が積まれて

数年から2、30年後に再整備がなされたものと考えられる。その後、北部対岸積み石が完全に埋まり、それを覆う形で地山の砂礫を用いて地固めを行って新しい池底（2層）を造り、更に池の堆積土（1層）が溜まった。3層上面からは、18世紀末～19世紀にかけての遺物が多く含まれていた。また、中島北部積み石の西側には、3層を掘り込む形で瓦が立てられていたが、瓦と南側の積み石との間から出土した土器は18世紀末～19世紀前半の時期に比定でき、新しい池底を造って暫く経過後に、最掘削されたことが判明した。中島北部積み石を形成する方形の景石やその直下の根石については、古くても幕末まで下がり、ほぼ明治時代以降に水位の上昇や積み石の崩壊に伴って修理されていることが明らかになった。

以上に述べてきたように、現在見ることの出来る庭園の様子は、近現代の浚渫後のものである。庭園の初期のものと考えられる遺構は、①1トレンチの礫敷き、②中島北部対岸積み石、③中島北部積み石下段の4石、④中島南東部積み石下段の3～4石、⑤2トレンチ最北側の石列、⑥3トレンチの州浜状遺構である。池底は新旧2時期あり、池底が造られた頃の水深は、現在（景石についている水面の痕跡）よりも浅いところで1m近く下がることがわかった。出土遺物から、18世紀中頃には作庭されており、18世紀後半から19世紀前半には荒廃が進み、幕末には初期の庭園の汀は既に堆積物に覆われて見えなくなっていたということが判明した。中島周辺以外の汀の変遷を遺物から確認することは難しいが、現在の陸部から汀にかけての急な落ち込み方は水位の上昇による後世の浚渫によるものであることがわかり、作庭当初は緩やかな汀を形成していた。汀の浚渫について、資料が残っていないために確かな時期などは判らないが、明治期から昭和48年の造園業者による北岸の護岸整備までに少なくとも4回は行われており、遺物の混入の仕方から南岸の築山（2トレンチ）もいずれかの時期に盛られ、景石も同じ頃に据え付けられた可能性を指

摘できる。また、敷地を区画している塀や積み石を造った際の盛土の可能性も考えられる。

池中や北岸・南岸の一部には、閑院宮の初期の庭園が良好な状態で保存されていると考えられ、江戸期の庭園の様相を知る上で貴重な遺構である。（近藤 奈央）

4 常盤仲之町遺跡

経過 この調査は、立体交差事業に伴う埋蔵文化財立会調査である。

この地域は、平安京外にあるが、古くからの遺跡が散在している。北側に展開する山麓では、先土器時代の石器などが採集され、縄文時代には西方向の上ノ段町遺跡で早期～前期の土器が出土している。弥生時代では、北側の村ノ内遺跡や東側の和泉式部町遺跡などで、竪穴住居や弥生土器などが検出されている。古墳時代前期・中期には引き続き和泉式部町遺跡で、竪穴住居跡や土器が検出されている。後期には常盤仲之町遺跡がある。飛鳥時代には、旧広隆寺旧境内から基壇跡や多くの瓦が出土している。

今回の調査地は、常盤仲之町遺跡に該当し、古墳時代後期の住居跡や土器などの検出が期待された。

遺構 調査は、山陰線北側の複線化予定地に沿って東西 70 m、深さは工事掘削深度に対応して 0.6 m の範囲内で行った。図面は、4 m 間隔で幅 1.0 m の断面図を作成した。断面図は、排水溝があり未掘削の 36 m 地点を

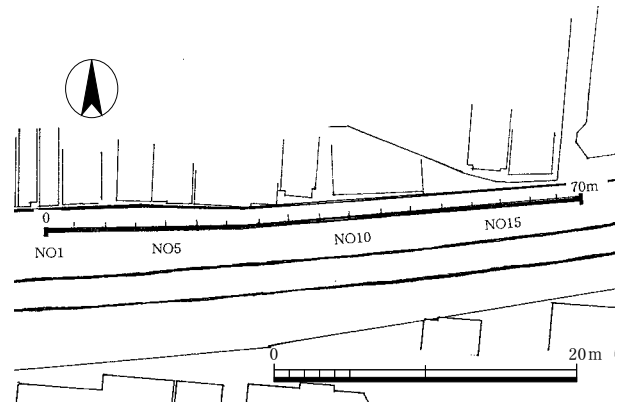


図 99 トレンチ配置図

除き 17 箇所を作成した。

層序は、0.5 m 付近まで近現代の盛土となっており、それ以下は、土層 4・10 などの地山となっている。

溝は、計測ポイント 12 において検出した土層 11 である。幅 0.55 m、深さ 0.20 m で、反対側の壁にも検出されているので溝の可能性が高い。出土した平瓦小片は平安時代と思われる、この溝も同時代の可能性がある。直下の土層 10 は褐色のいわゆる地山の可能性が高い。

遺物 少量の遺物が出土した。ほとんどが山陰線敷設時以降の整地に伴う陶磁器類である。平安時代では布目を持つ平瓦の小片 2 点がある。溝と思われる土層 11 よ



図 100 調査位置図

り出土した。

小結 調査地はJR山陰線の敷地であるが、現在の線路面より1.5m前後低くなっており、山陰線敷設時に盛り土のため掘削された可能性もあり、顕著な遺構は検出できなかった。

しかし、平安時代と思われる平瓦が出土した土層11の溝が検出されており、近辺では当該期の遺構がさらに存在する可能性がある。今回調査地の東200mで実施された仲之町遺跡の調査^註では古墳時代だけではなく、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物や土器・瓦が検出されており、これらとの関連の有無も今後の課題で

ある。(津々池 惣一)

註 鈴木廣司他『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-Ⅲ 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1978年

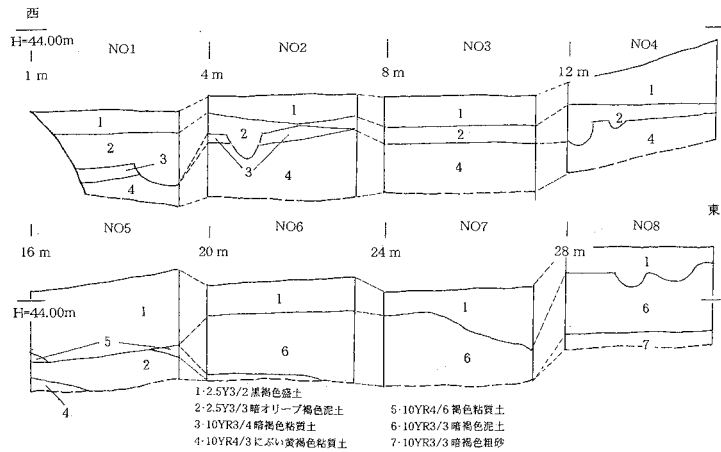


図101 土層断面図1

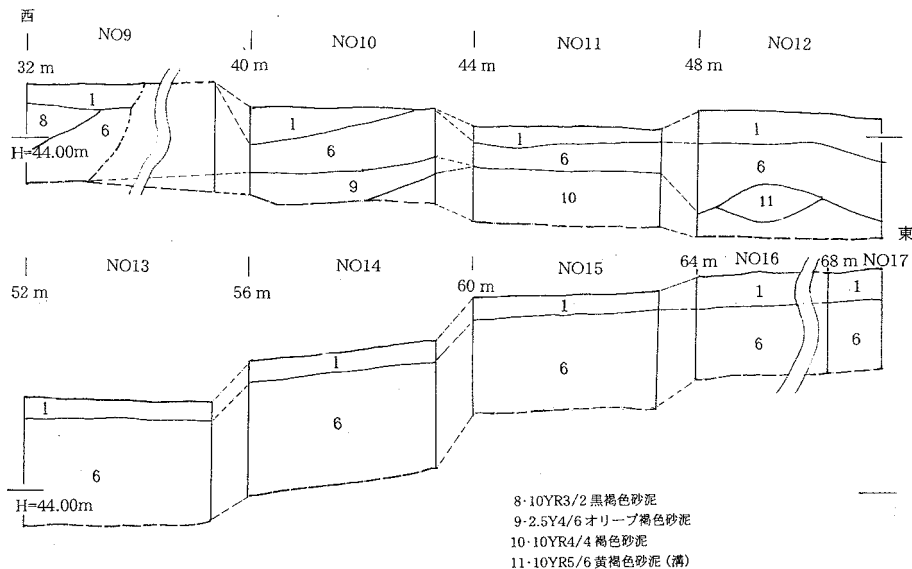


図102 土層断面図2

5 史跡・特別名勝 天龍寺庭園

経過 天龍寺の東門正面に樹木が茂る土壇がある。この一部を削って駐車場を拡張する計画が生じたため、1998年7月に京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を実施した。その後、削平範囲をさらに拡大する計画が生じたため、再度土壇の性格を解明する目的で、今回試掘調査を実施することとなった。

今調査は、2004年2月23日から開始した。当初は、土壇の北半・南半に東西方向の調査区を設ける予定であったが、最初に設定した北半の調査区（1区）の内容から、南半の調査区は南北方向に改めるべきとの指導があり、南半西寄りに南北調査区（2区）を設定した。1区・2区とも調査内容が判明した時点で、天龍寺ならびに京都府教育庁教育委員会文化財保護課と京都市文化市民局文化財保護課の確認を受けた。

遺構 この土壇については京都市埋蔵文化財調査センターが東西方向に2箇所調査区を設け、試掘調査されている。その時の調査区は、幅1.6～1.8mで土壇西端から東に4.2mまでの範囲であった。重機で掘削したのち、断面図を作成する調査であった。今回の調査では、出土遺物と層序の関係を把握することを目的としたため、1区では重機を併用したが手掘りを重視し、2区についても手掘りで実施した。

[1区]

規模：東西方向の調査区である。当初はセンター調査の1トレを含むかたちで、幅1.8m、長さ12.2mの調査区を計画した。しかし西端には電線のケーブルがあることがわかり、この部分は調査区からはずした。調査区の規模は、幅1.5m、長さ11.4mであるが、西半5.3m分はセンター調査区と重なるため、幅2.1mとなった。調査面積は約20㎡である。

層序：上から0.6m付近までは江戸時代の盛土である。この層には、土器・陶磁器や瓦が含まれる。それより下は室町時代の盛土で構成される。室町時代の盛土は、東



図 103 調査位置図

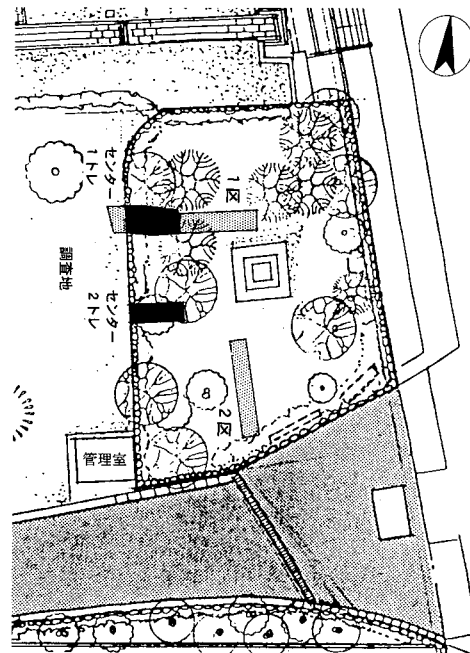


図 104 調査区配置図



図 105 土壇全景（西より）

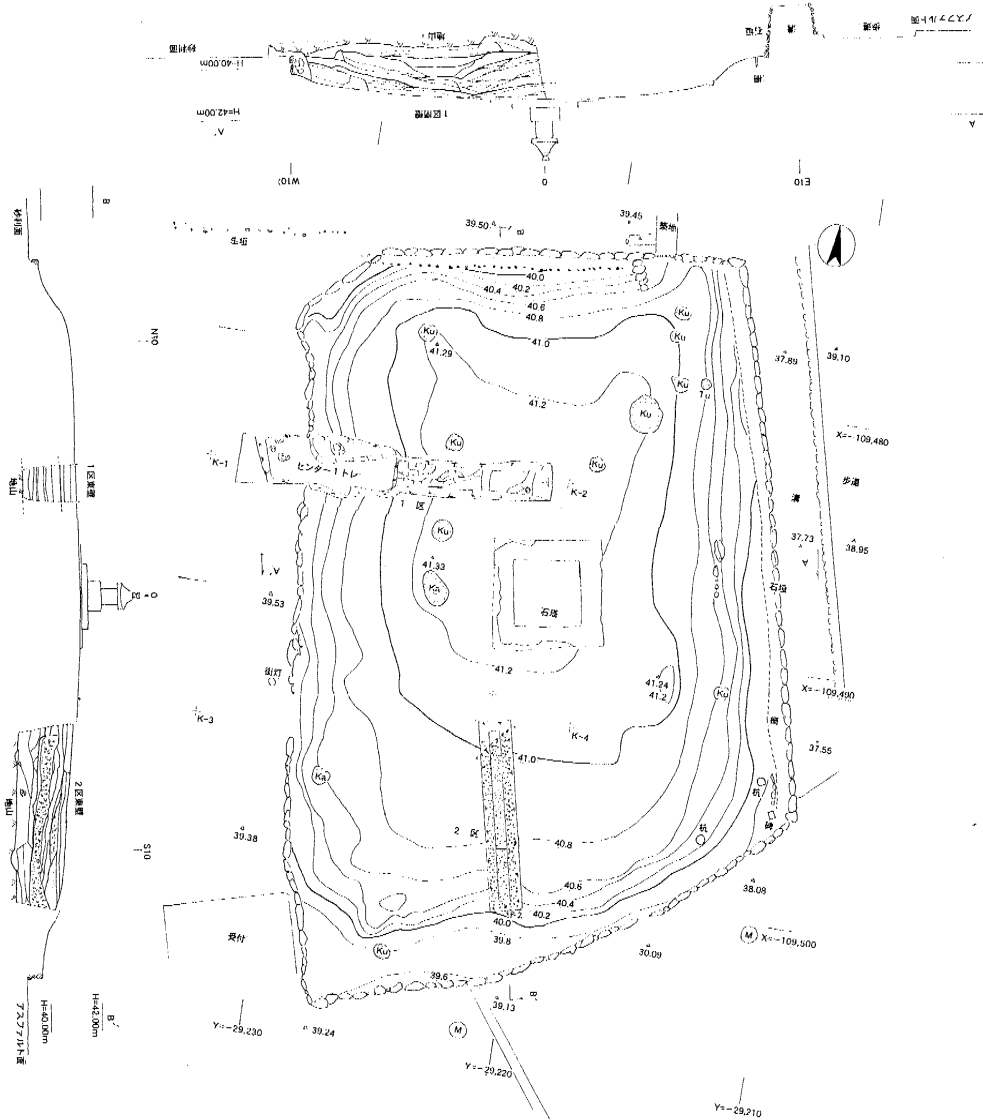


図106 土壇実測図

4 m～東6 m間に形成された小山（1区断面図の32・33・34）を核として、東西に落とし込むかたちで盛られている。

土壇盛土には、地山の黄褐色泥土層や黄褐色砂礫層は含まれない。このことは、東側に堀などが掘られたとしても、その際の土砂はこの土壇に運ばれなかったことを示している。盛土には14・15世紀の土器類・瓦類が含まれていた。これらは盛土の各層に含まれていたが、特に小山の東側に盛られた層の遺物は、破片が大きいこと、種類が多いこと、炭層を含むことなどを特徴としており、寺側から供給された土でこの土壇が盛られたことを想定

させる。

地山面を掘り込む土壇1～5の埋土は、土壇盛土とは土質や含まれる遺物の面で大きな差はみられない。ただし両者の境界面にはやや硬く締まった層（同断面図の35）があり、盛り上げに際してはいったん整地され、その上に土が盛られた様子がうかがわれた。土壇上面から地山面までの深さは、約2 mである。

遺構：地山面上で土壇1～5を検出した。いずれも形状は不定形であり、地山の泥土層を採集する目的で掘られた土取穴の跡とみられる。遺物は瓦類がほとんどで、土器類は少量であるが、室町時代に属するとみられる。

II 平成 16 年度の試掘・立会調査概要

土壇 1 は北壁にかか。東西 1.45 m 以上、南北 0.7 m 以上、深さ 0.2 m あり。土壇 2 は南壁にかか。東西 1.5 m ほど、南北 0.3 m 以上、深さ 0.2 m あり。土壇 3 は南壁にかか。東西 1.85 m、南北 0.7 m 以上、深さ 0.3 m あり。土壇 2・3 の境界は不明確である。土壇 4 は北壁と南壁にかか。東西 2.0 m、南北 0.9 m 以上、深さ 0.55 m と最も深く、底部は平坦である。壇内の南東隅には柱穴とみられる穴がある。土壇 5 は北壁にかか。東西 3.45 m、南北 0.25 m 以上、深さ約 0.7 m である。この他、西端で瓦の集中する箇所が 2 箇所あった。江戸時代に属する。



図 107 1区全景（西より）

[2区]

規模：土壇南半、中央のやや西寄りに設定した南北方向の調査区である。幅 1.3 m、長さ 7.4 m、調査面積は約 9 m² である。

層序：上から 0.3 m 付近まではガラス瓶を含む。0.6 m 付近では瓦が集中的に入れられた層があり、「層 11」（2区断面図の 17）とした。堆積時期は 19 世紀以後とみられる。これより下、1.2 m までには人頭大の礫が大



図 108 2区全景（北より）

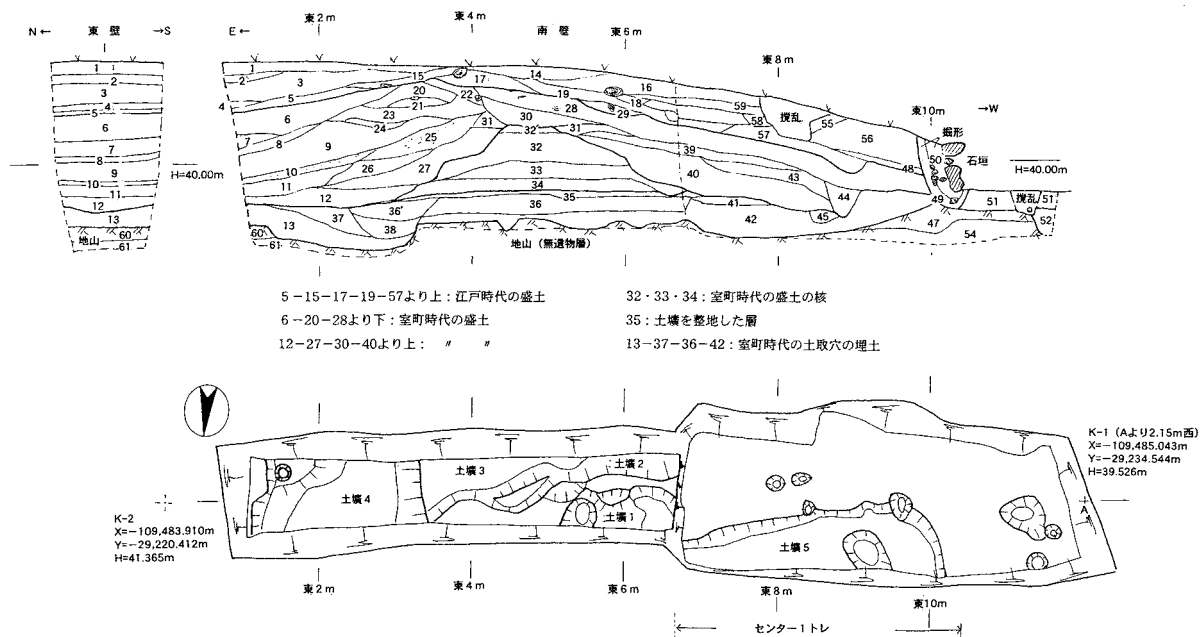


図 109 1区実測図

量に入れられた層があり、「層 12」(同図の 21) とした。瓦を多く含み、陶磁器も少量含まれる。陶磁器の年代は 18 世紀末から 19 世紀初めに属し、層 12 はこれ以後に堆積した層と推定できた。層 12 の礫は、土壇盛土が採取され、その跡を埋め戻すかたちで入れられた礫とみられる。土壇測量図をみると、層 12 を確認した 2 区付近は地形が低くなっており、南側から弧を描くかたちで土取りされ、その跡に礫が入れられたと推定できる。

層 12 より下層は、室町時代の盛土である。土質や含まれる土器・瓦類は 1 区と同じ状況であった。ただし、1 区南壁で見られた小山の存在や、そこから落とし込まれる層序は確認できなかった。2 区での土壇上面から地山面までの深さは、2.1 m である。

遺構：溝状の遺構を 2 基検出した。溝 14 は幅 0.5 m、深さ 0.1 m、溝 15 は幅 0.75 m、深さ 0.15 m あり、ともに東西方向を示す。両溝肩の間隔は 3.4 m ある。溝肩の立ち上がりは、溝 14 では北肩、溝 15 では南肩が急である。また溝を覆う室町時代盛土は、溝間が盛り上がる層序がみられた。これは溝間に何らかの構造物があったことを想定させる。さらに、溝 15 の北側地山上面には小礫が貼り付く路面状の箇所がみられた。狭小であるため問題を残すが、溝 15 は道路の南側溝、溝 15・溝 14 間は築地、溝 14 は築地の内溝であったと考えることもできる。

遺物 1 区・2 区とも平安時代、室町時代、江戸時代の遺物が出土した。

平安時代の遺物は室町時代の盛土に混入して出土した。瓦は丸瓦、平瓦のみで軒瓦は出土していない。凸面は縄目タタキ、凹面には布目が付着し、厚手で焼成が良くない製品が大半である。量の多さからみて付近に寺院跡が存在したことを示す遺物である。

室町時代の遺物は、盛土下半部ならびに地山面に掘り込まれた各遺構から出土した。土師器皿が大半であるが、瓦器、須恵器、焼締陶器なども含まれる。輸入陶磁器は少量、銭貨は 1 点、貝殻も 1 点出土した。土器類は日常の雑器類であり、土壇盛土の供給元を考える上で重要である。この時代の瓦類は抽出しにくいのが、江戸時代の瓦が混じらない層位で平安時代の瓦と異なる特徴をもつ瓦をこの時代の瓦と考えた。丸瓦・平瓦がある。ともに凸面は縄目タタキ、凹面には布目が付着し、表面に離れ砂を含ませた薄手で焼成の良い瓦が抽出できる。

江戸時代の遺物は 1・2 区とも盛土上半部から出土した。1 区では表土より 0.5 m 付近までであり、幕末期(19 世紀中頃)の陶磁器類が多く出土した。2 区では主に層 11、層 12 から出土した。土師器、肥前染付・肥前白磁、青磁染付、青磁、陶器、京焼、信楽、丹波などと、大量の瓦がある。銭貨は寛永通寶が 1 点ある。

層 12 は大量の礫が入れられた層であるが、肥前染付、青磁、京焼、信楽、丹波などから、18 世紀末～19 世紀初め頃の堆積と推定できた。層 11 は、層 12 の上に堆積した瓦廃棄層であるが、土器類は土師器、肥前染付、肥前白磁、青磁染付、中国青花、京焼、信楽など 17 世紀から 18 世紀のものであり、層 12 より新しい土器は含まれない。また以上の層 12・層 11 には、室町時代の須恵器、瓦器、戦国期から桃山時代、江戸時代初め頃までの土師器、

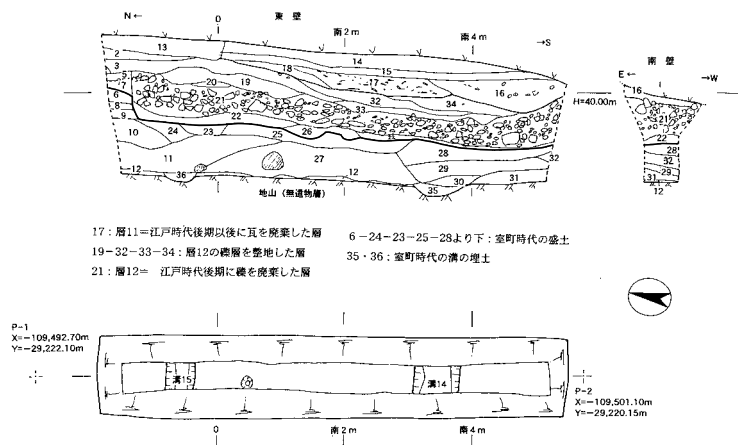


図 110 2 区実測図

肥前染付、伊賀、瀬戸天目、焼締陶器、輸入陶磁器も含まれる。

層 11・層 12 には大量の瓦が含まれていた。軒丸瓦は大半が巴文であり、右巻き込み、左巻き込みの両方がある。軒平瓦は唐草文が数種ある。刻印は、平瓦の端面に 3 例と凸面に 1 例、丸瓦の玉縁段に 2 例ある。文字瓦は丸瓦凸面に「花野九兵衛」とあり、瓦の製作者名とみられる。同様のスタンプは勅使門の北築地壁に埋め込まれた瓦に「神谷製」があり、江戸時代の天龍寺に瓦を納めた業者名がわかる資料として重要である。白磁タイル裏面の刻印は、「小口放光堂」と読める。

小結 この土壇は江戸時代後期の築造とされてきたが、今回、堆積層と出土遺物の関係を丹念に調べた結果、室町時代に形成されたことが判明した。その盛り方についても、1 区で盛土の核となる小山の存在が明らかとなった。こうした構築方法は、城郭土塁の盛り方に共通するものである。城郭土塁の場合、堀を掘削した土砂で盛るのが一般的である。しかし本土壇の場合、土器片を含む暗褐色の泥土層を中心に盛られており、寺域側から土砂の供給があったことが想定できた。

天龍寺には『応永鈞命図』とよばれる絵図が現存する。絵図の製作は応永 33 年（1426）とされるが、この 15 世紀前半という年代は盛土中に含まれる土器類の下限年代とよく合致する。また同絵図には、天龍寺とそれ以外の数カ寺で小山と山門が一体的に描かれている。このうち、天龍寺前の小山が最も大きく威厳ある姿に描かれており、本山に相応しい格式を強調する意図があったように思われる。この小山の表現は、修行の場である寺域を「山と門」で区画することで、より視覚性に訴える意図があったものと思われる。この絵図より製作時期が古い『臨川寺領大井郷界畔絵図』（貞和 3 年＝1347）には小山の表現は一切見られない。2 枚の絵図における小山の有無を肯定的に評価するなら、小山の構築は 2 つの絵図の間にあったこととなる。その場合、土壇から出土した遺物の年代観とは矛盾しない。また、『応永鈞命図』は

小山の存在や配置を明示することが製作目的の一つであったように思われる。現在、ここに描かれた小山は天龍寺以外現存しないようである。この点においても、本土壇の存在は重要である。

盛土中に含まれる土器は、土師器（皿）、瓦器（鍋・釜）、須恵器（鉢）、焼締陶器（甕）などの日常雑器であった。破片の細かさなどからすると、他の場所で廃棄されたものが土砂とともにここに運ばれたと考えるのがよい。したがって、まず 14 世紀前・中葉頃に天龍寺が建立されると、その周囲に厨房施設を含む生活空間が形成され、15 世紀前葉にこの土壇が形成される際には寺側から土砂が運ばれたことが推定できる。

この他、1 区・2 区とも平安時代の瓦が大量に出土している。該当するものとして嵯峨天皇の皇后橘嘉智子が建立した「壇林寺」があり、関連性が注目される。また土壇下で検出した遺構も、天龍寺創建以前の様相を知る重要な遺構である。『亀山殿近辺屋敷地指図』（南北朝時代の製作）を見ると、本土壇付近には東に「作道」があり、それとは筋違いとなって現在の天龍寺境内に至る東西道路が描かれている。また、本土壇の約 150 m 南で平成 4 年（1992）に実施された調査（美空ひばり記念館建設）では、東西方向の溝、建物柱穴、土蔵基礎などが検出されており、天龍寺周辺の街区を示す遺構となっている。2 区で検出した東西溝もこのような街区に関連した遺構の可能性がある。（丸川 義広）

6 伏見城跡1

経過 本調査は、伏見桃山城キャッスルランド跡地の公園造成に伴う試掘調査である。当地は、桃山時代の伏見城跡にあたる。調査では、遺構の残存状況、並びに堆積層序の把握を目的としたため、全域を対象として幅3mの調査区を設定し、調査することにした。

最初に西端に1トレンチ（南北方向、111.6m）、南半部に2トレンチ（東西方向、175.5m）を設定した。両方とも遺構はほとんど残存せず、現代層下は自然堆積層（地山）が露出する状況がみられた。続いて中央部で3トレンチ（南北方向、130.9m）、管理棟が建設される箇所に4トレンチ（南北方向に33m、東西方向に14m）、東半部に5トレンチ（南北方向、71m）、6ト

レンチ（東西方向、67m）を設定した。これらの調査区も、大部分で自然堆積層が露出する状況であったが、2・4トレンチの交差点部で伏見城期の遺構が残存することが判明した。また2・3・4・5・6トレンチでは出丸の西面・北面を囲むかたちで掘られた堀を検出した。しかし、堀の規模が巨大なため、堀上半部のみを調査した。1～6トレンチの合計は、1,970㎡である。

なお、地層の観察に関しては、元山口大学教授石田志朗氏から丁寧なご教示をいただいた。

調査区ごとに、配置・規模、層序、遺構、の所見を記載する。

[1トレンチ]

配置・規模：調査地の西端に設定した南北方向の調査区である。排水路によって北半と南半に2分される。



図 111 調査位置図

全長は 111.6 m ある。北半は長さ 88.8 m、南半は長さ 22 m ある。調査面積は 323㎡である。

層序：現代盛土層直下では、自然堆積層（地山）が露出する状態がみられた。地山は、大阪層群を形成する礫・砂・粘土で、それらの整合堆積である。地層の傾斜は北西側に低く堆積する。X=-117,965 付近では砂層の上に礫層がのる。その境界ラインは南西から北東方向であり、他の調査区もこの方向で境界ラインが揃うため、ここでの走向とみる事ができる。X=-117,972 から X=-118,000 付近は粗砂層が堆積するが、ここでは小規模な「断層」がみられる。断層は南側が下る正断層である。南側に堀があるため、基盤が落ち込み、そのため地層の食い違いが生じたとみられる。

地山が露出する北限は X=-117,929 までであり、それより北では整地層が堆積する。褐色の砂泥であり、伏見城造成時に盛られた層である。整地層の北限は X=-117,910 であり、それより北側は土壌状の遺構（落込 32）が掘られている。

南端では、X=-118,004 付近から南へ地山が下り、X=-118,008.5 以南は南へ落ちる肩となる。南には伏見城の内堀が存在するため、それへの落込みが始まっているとみられる。

遺構：北端で大規模な落込 32 を検出した。これは南肩が整地層を掘り込んで成立している。南肩は急角度で落ち込み、炭を含む層が肩部に堆積する。この層には土師器皿が廃棄されており、桃山城期に埋没したことが推定できる。G.L.-2.4 m まで調査したが、底は未確認である。層の傾斜からすると、さらに深い遺構であったことは確実といえる。この遺構の北側には伏見城の外堀（北堀）が存在する。遺構は堀の延長部であった可能性もあり、後に埋められて現在の平坦面が形成されたことも考えられる。

X=-117,940 ～ 945 付近では小規模な柱穴や土壌を 10 基ほど検出した。建物に伴う柱穴とみられるが、まとめることはできなかった。柱穴からは瓦が出土してお



図 112 調査地全景（北東から）



図 113 1 トレンチ全景（北から）



図 114 2 トレンチ全景（東から）



図 115 2 トレンチ堀（南東から）

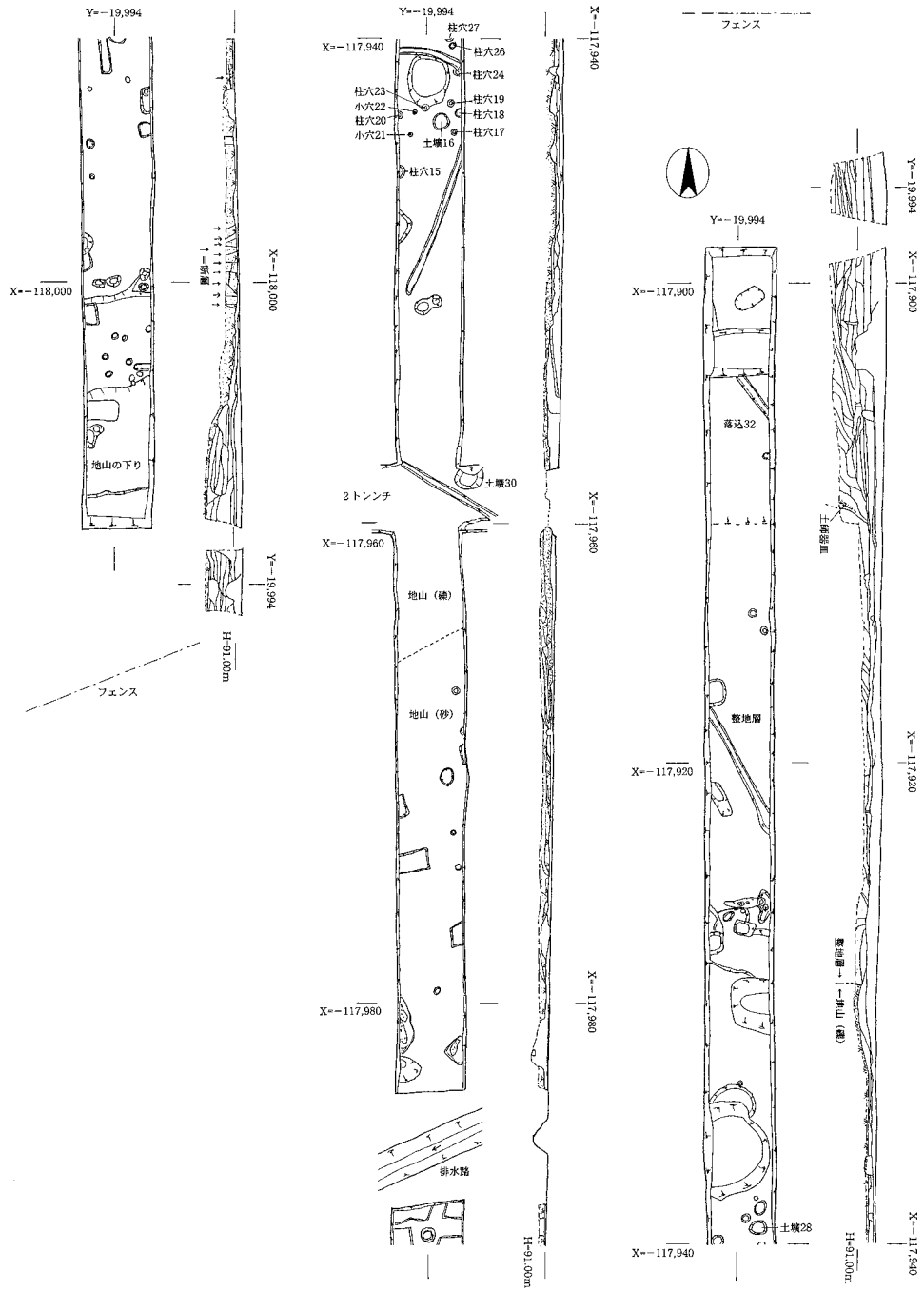


図 116 1トレンチ実測図

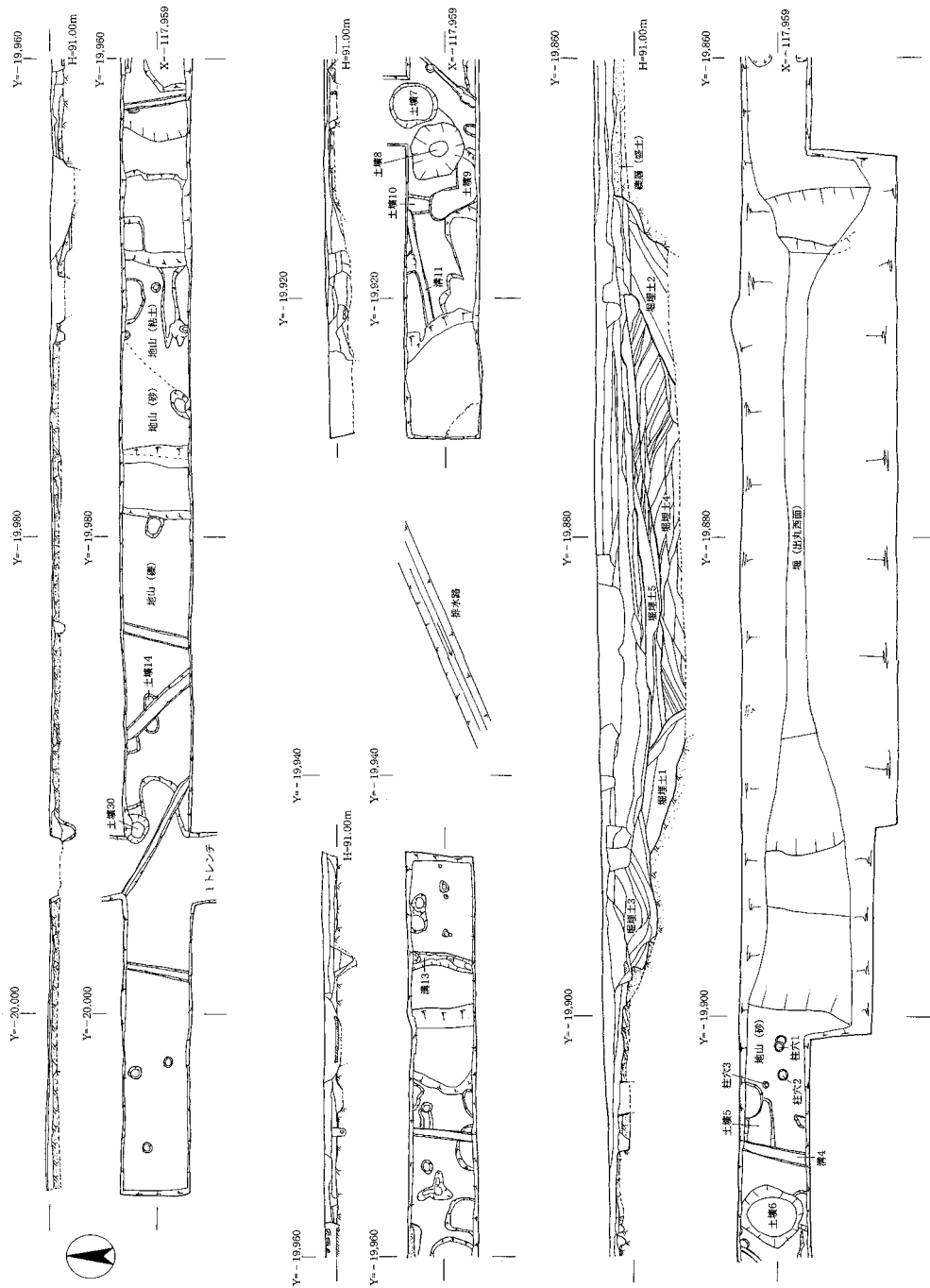


図 117 2 トレンチ実測図

り、伏見城期の遺構とみられる。

1 トレンチではこれら以外に顕著な遺構はない。自然堆積層が露出することは、遺構面は大半が削平されたものと思われる。

[2 トレンチ]

配置・規模：調査地の南半を東西に貫くかたちで設定した調査区である。排水路によって西半と東半に2分される。全長は175.5 mある。西半は長さ64 m、東半は長さ93.5 mある。東半では堀の部分のみ幅6.5 mとし、南側を掘削法面とした。調査面積は573㎡である。

層序：西半では自然堆積層（地山）が露出する。地山は西端からY=-20,979までが礫層、それより東が砂層、粘土層となる。礫層と砂層の境界は1 トレンチで確認した南西から北東方向であり、Y=-20,979での境界は、1 トレンチでの礫層・砂層境界の北東延長にあたる。Y=-20,920付近は盛土であり、上面で遺構を検出した。Y=-20,915からY=-20,900にかけては地山の粘土層が露出し、上面で土壌を数基検出した。土壌からは土器・陶磁器類が出土しており、桃山城期の遺構である。

Y=-20,900からY=-20,866の間には南北方向の巨大な堀がある。堀が掘られた範囲の地山は、白色の砂層であり、堀の西肩・東肩断面ではG.L-3.5 mまで堆積することを確認した。Y=-20,866より東は「出丸」が想定される。ここでは礫層が水平に盛られており、出丸を構築する際の造成層とみられる。Y=-20,848付近より東は、地山の白色砂層が遺構面をなす。この白色砂層と先述の出丸盛土の境界は、Y=-20,854.5で砂層が落ち込むことを確認している。2 トレンチ東端では地山はほぼ水平に堆積しており、東延長にある堀に向かって地山が下るような状況はみられなかった。しかし現代盛土層が厚さ1 mにわたり堆積し、盛土が厚い点が特色として指摘できる。

遺構：Y=-20,866からY=-20,900の間に堀が存在することが明らかとなった。この堀は出丸の西面をめぐる堀とされるものである。堀幅約34 m、深さは4.4 mま

で確認したが、底は未確認である。両肩は白色砂層を掘り込む。西肩は緩やかであるが、東肩は急傾斜である。東肩は出丸側に該当するため、防衛上の処理とみられる。堀斜面は素掘りであり、石垣の形跡などは一切みられない。石垣に使用された可能性のある石も出土していない。

堀埋土は、埋土1から埋土5まで大別できる。埋土1・2は堀肩に沿って斜めに堆積した層である。埋土4・5との境界は暗灰色を呈しており、自然の法面として長く時間が経過したため、表面が有機質の影響を受けたのではないかと想像される。埋土4は褐色を呈する砂泥層で、人為的に埋め立てられた層である。注目されるのは、堀の中央部が高く周囲に下る層序である。これは、中央部から埋め戻したことを示しており、人力で堀を埋めた場合には生じない層序と思われる。この堀の埋没は、昭和30年代以後のキャスルランド造成時とみられるので、ダンプカーなどの重機が堀内に入り、中央から埋め立てたとすると、このような中央部が高い層序も可能だったと思われる。埋土5は埋土4を上を覆うもので、焼土や灰が含まれ。周囲で廃材が焼却された後、ここに堆積した層とみられる。埋土3は、堀の西肩が埋没して以後に掘り込まれた新たな遺構で、溝状を呈する。

2 トレンチの遺構は、大半が基礎攪乱である。遺構内にはコンクリート片が残存しており、キャスルランドの造成時、あるいは解体時に掘り込まれたものとみてよい。わずかにY=-20,904～916付近で地山上面に掘り込まれた遺構が残存していた点が特記できる。

[3 トレンチ]

配置・規模：調査地の中央部に設定した南北方向の調査区である。排水路によって北半と南半に2分される。全長は130.9 mある。北半は長さ74.5 m、南半は長さ48 mある。北半・南半とも堀の部分のみ幅6 mとした。調査面積は471㎡である。

層序：北半は0.1～0.2 mと極めて浅い位置で地山の礫層が露出する。礫層はX=-117,885付近に砂層との境界があり、砂層が礫層の下にもぐる。両者の関係は1・

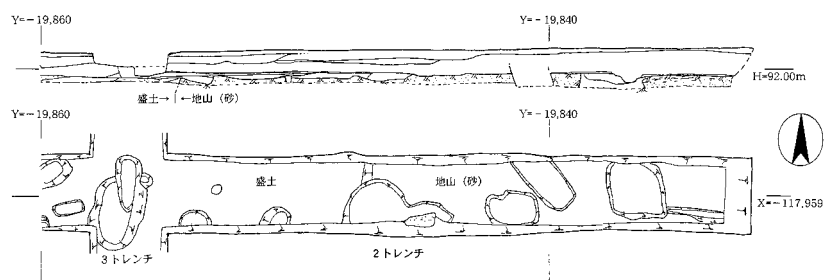


図 118 2トレンチ東端実測図

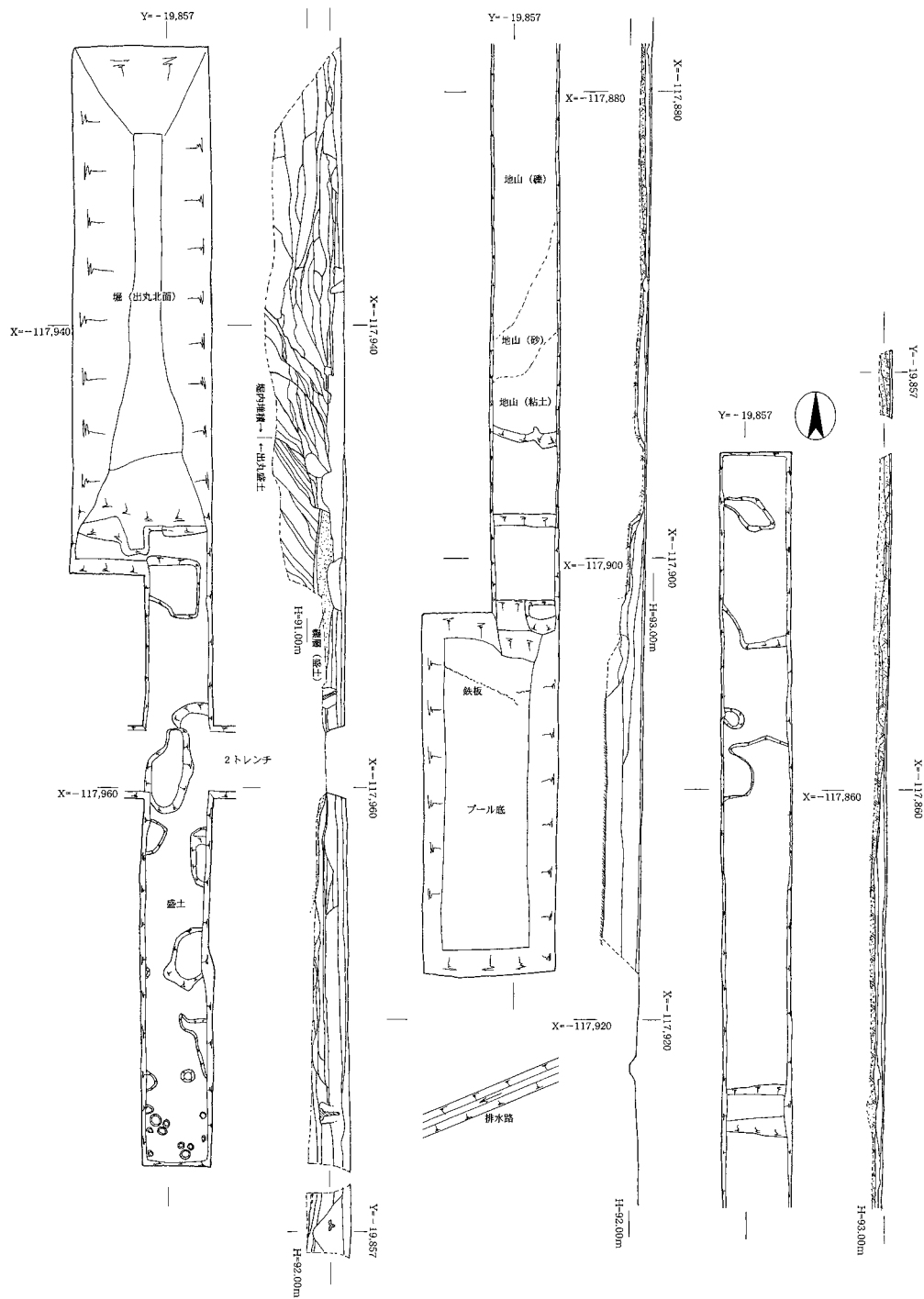


図 119 3トレンチ実測図

2 トレンチで確認した状況と同じであり、3 トレンチの境界はそれらの北東延長ともいえる。

X=117,904 以南は攪乱であり、キャッスルランドで営業していたプールのコンクリート底面が残存していた。したがって、この部分での堀、地山の状況は確認できていない。X=117,945 付近に堀の南肩がある。ただし、ここでの南肩は地山でなく、砂層と礫層が互層状で北下がりな堆積がみられた。この一様に北下がりな範囲が、堀の埋土か、あるいは出丸を構築した際の盛土かは明確でないが、堀の南肩想定位置よりさらに南であることから、ここでは南肩と考えた。ただし、2 トレンチの堀の東肩でも一様に傾斜する層序（埋土2とした）がみ

られ、その東側で地山の砂層を検出しているため、慎重な判断が必要といえる。

出丸を構成する褐色の礫層は、2 トレンチとの交差点を越えて南側まで確認でき、X=117,965 付近で現代盛土層の下にもぐる。それより南の堆積層はすべて現在盛土層であった。現代盛土層は、南壁では2 m近くまで堆積しており、ここでは地山は確認できていない。1 トレンチ南端と同じく南に内堀が存在するため、南端ほど地形が低かったことを示すものであろう。

遺構：出丸の北面をめぐる東西方向の堀を検出した。ただし北肩については、キャッスルランドのプールで壊されていた。南肩については、X=117,945 付近にあることが推定でき、さらに南側では出丸を構築した際の北下りの層序を確認した。

なお3 トレンチでは、それら以外に顕著な遺構はない。

[4 トレンチ]

配置・規模：管理棟が建設される地点に設定した調査区である。南北長 33 m の調査区を基本として、東西長 11 m の調査区を北端に接続させた。東西区は、堀の西肩を検出する目的で設定したものである。調査面積は 108m² である。

層序：排水路より南では、G.L-0.3 m 付近で地山の粘土層が堆積し、この面が遺構面となる。しかし排水路の北側では粘土層はみられず、盛土が堆積する。地山が深かったため、盛土化されたものとみられる。盛土は東西区の方角にも連続する。Y=-20,904 付近は東に下がっており、堀の西肩に該当するとみられるが、堀本来の埋土は確認できていない。

遺構：排水溝の南側で土壌 5 基を検出した。いずれも楕円形を呈し、浅い皿状の底部をもつ。瓦とともに土師器、陶磁器が出土し、桃山城期とみられる。排水溝の北側、X=117,940 付近で検出した土壌 38 は炭を、土壌 39 は炭と焼土を含む。火災の痕跡を示す希少な遺構である。

[5 トレンチ]

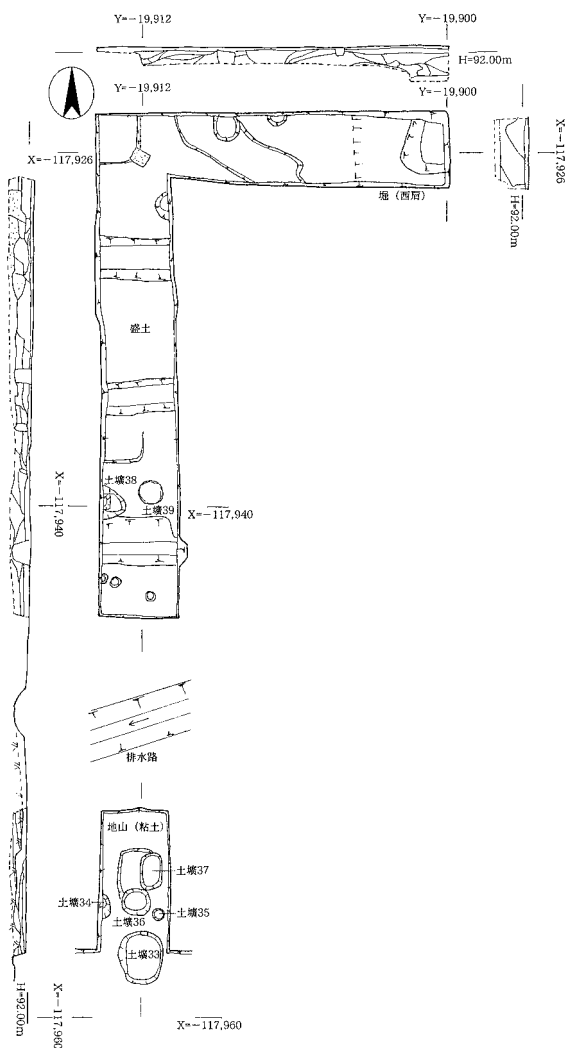


図 120 4 トレンチ実測図

II 平成 16 年度の試掘・立会調査概要

配置・規模：東半部に設定した南北方向の調査区である。長さ 71 m ある。堀の該当部のみ幅 6 m とした。調査面積は 237m²である。

層序：地山の砂層が非常に浅い位置で検出され、後述する 6 トレンチと共通する単純な層位であった。

調査区北端の地山は砂層である。次いで、X=-117,838 ~ X=-117,843 では砂層の上に褐色の泥砂層が堆積する。両者の境界は南西から北東方向であり、それより南では再び砂層が堆積する。

X=-117,893 から南は堀となる。堀の肩部は黒色を呈する砂泥層が覆う。この層中には木材や草本の炭化物が含まれる。一帯で野焼きのような行為があり、そのためこの場所に堆積したものと思われる。炭化物を含む層の下は、通常の地山砂層である。

遺構：南端において堀の北肩を検出した。堀本体はそのまま内堀側に下がっていくものとみられる。G.L- 3 m まで掘り下げたが、南に下がる傾斜面の途中である。埋土は上半 1.2 m まで現代盛土、それ以下は砂層を主体にこの間に炭化物を含む層が混在する状態がみられた。埋没年代などの資料は得られていないが、炭化物を含む状態は 2 トレンチの堀の埋没する状況と類似する。近代以後の地層と推定できる。

[6 トレンチ]

配置・規模：東半部に設定した東西方向の調査区である。長さ 67 m ある。東端は堀が該当するため、幅 6 m で南北 10.5 m とした。調査面積は 258m²である。

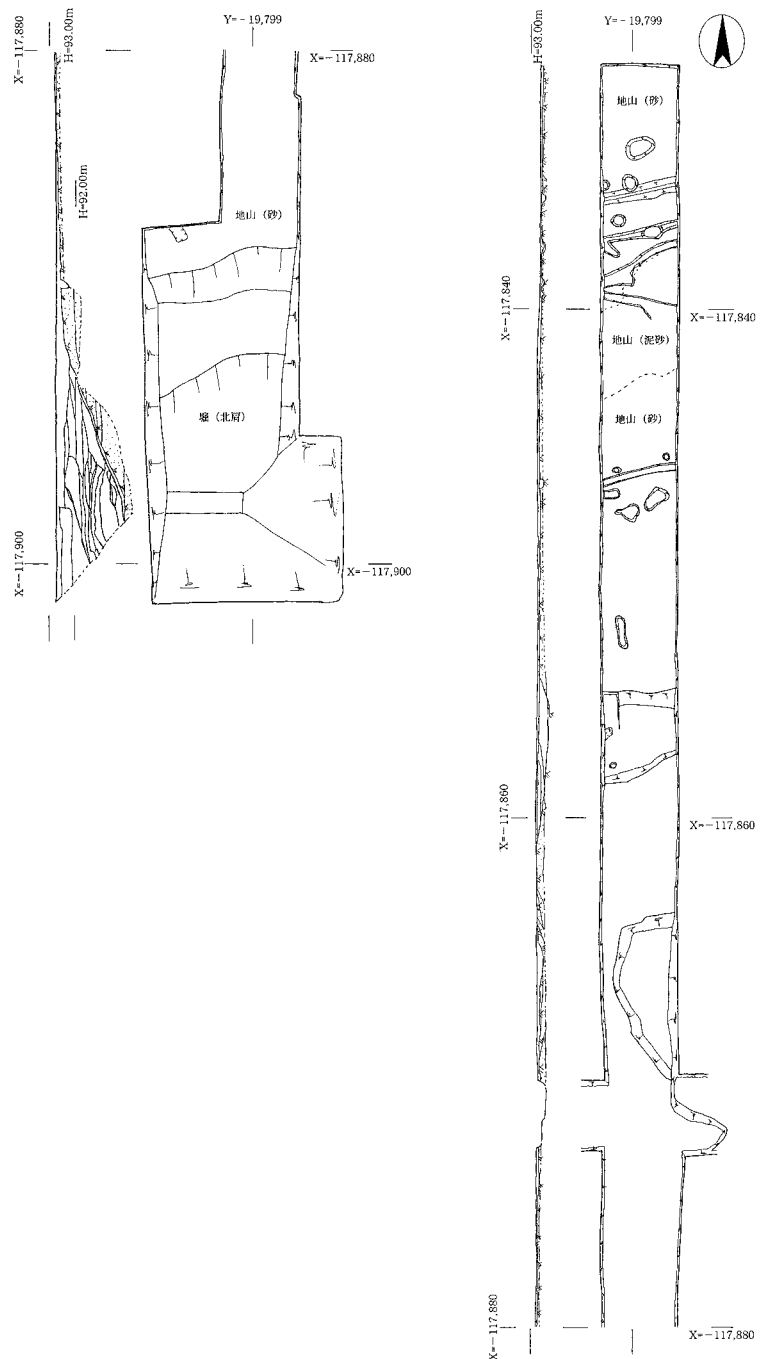


図 121 5 トレンチ実測図

層序：5トレンチと同様、地山の砂層が全域に堆積する。検出位置が0.1mと非常に浅い箇所がある。砂層は、東端では深さ1m以上まで堆積する。Y=-20,790付近では灰色と暗灰色の箇所が接する状況がみられた。両者に地質上の違いはないため、地表からの染み込みによって色調の違いが生じたとみられる。

遺構：X=-117,880付近の東壁で堀の北肩を確認した。この場所にはゴミ処理用の穴が掘られており、堀の北肩は東壁で部分的に残存するものであった。肩を構成する層は炭化物を包含しており、5トレンチの北肩同様に野焼きのような行為があったことが想定できた。堀埋土は調査区の南東隅にあり、砂層を主体とする層が深さ1.5

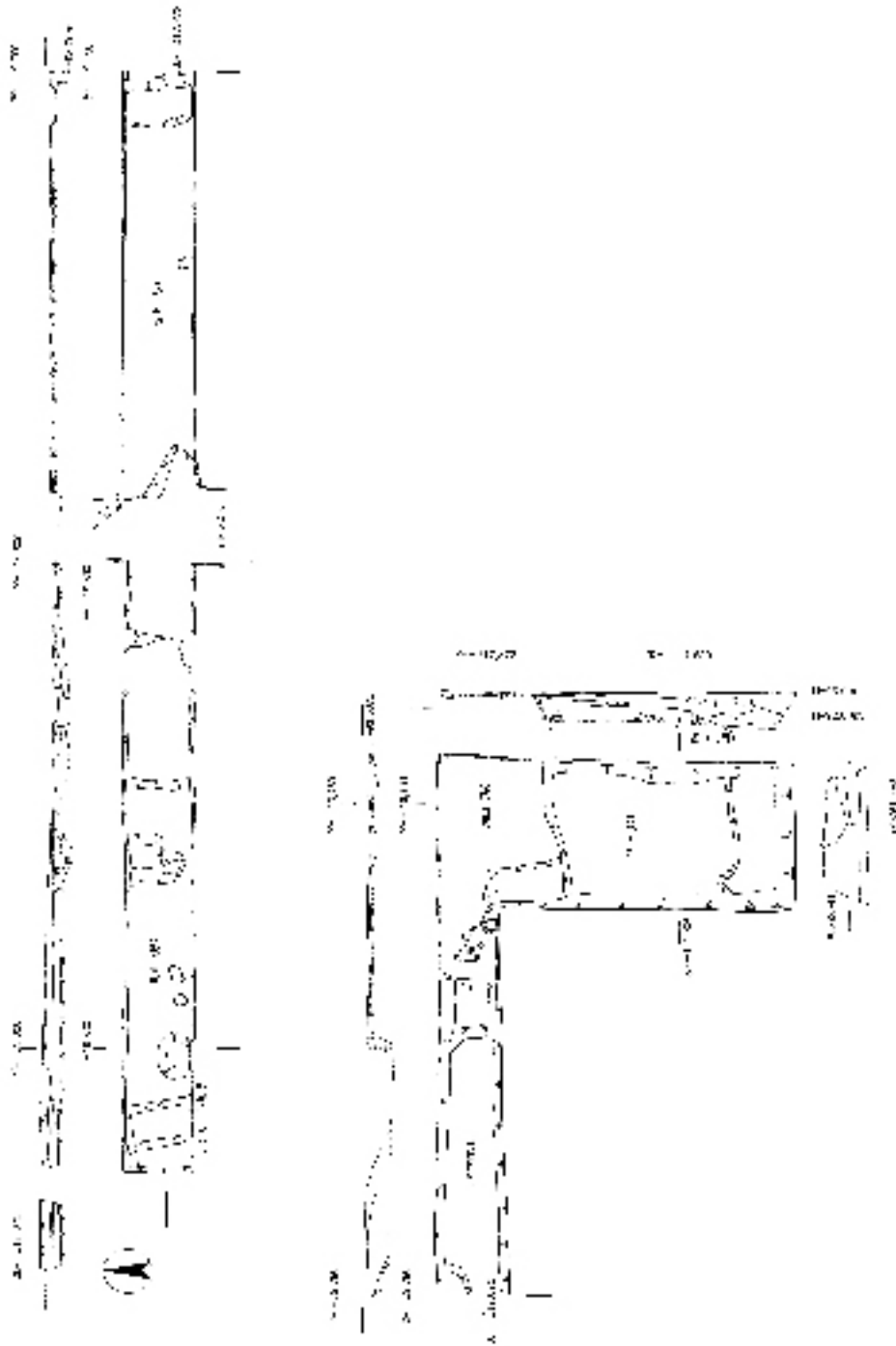


図122 6トレンチ実測図

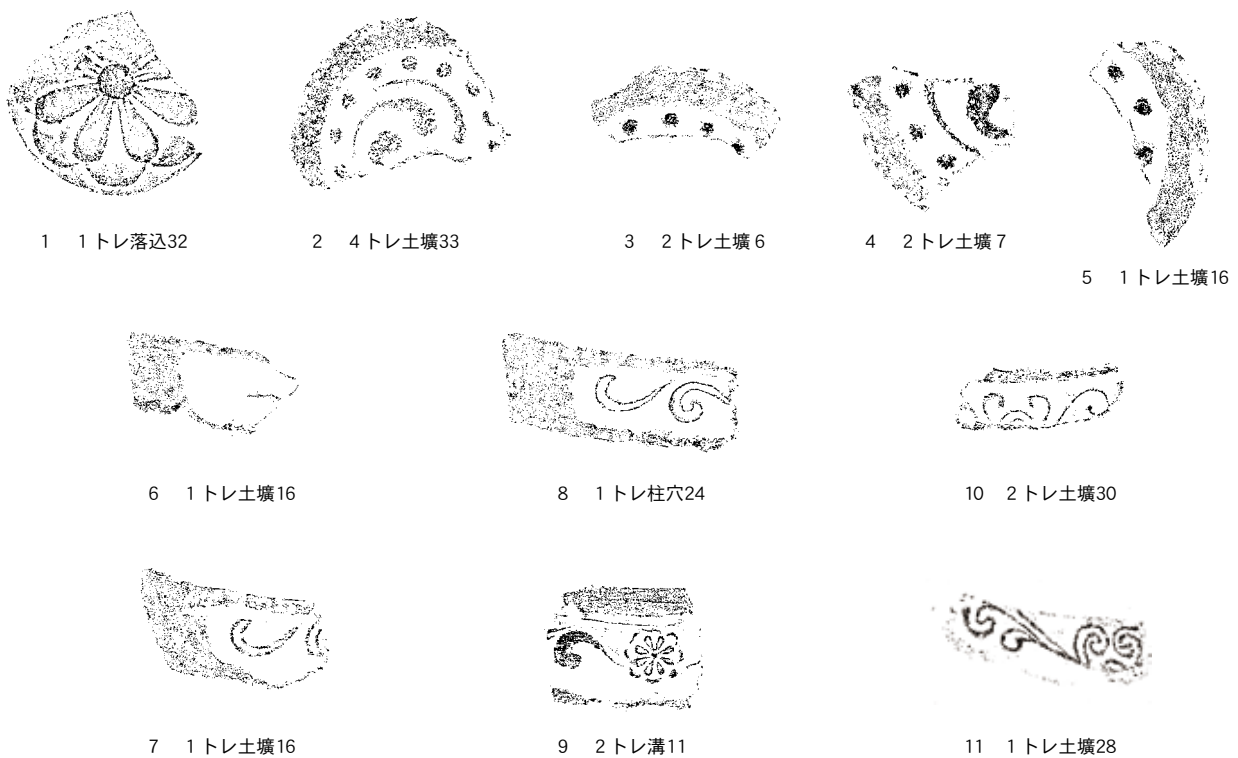


図 123 出土軒瓦拓影

mまで残存していた

遺物 内容は瓦類を中心に土師器と国産陶磁器で構成される。土師器、焼締陶器が少ない。出土量も非常に少なく、町家などの生活遺構とは比較にならない程である。

所属時期は桃山時代を中心に 17 世紀初め頃までが下限である。当城が廃城となるのは 17 世紀前半であるが、それ以前の遺物群が中心である。

出土遺構は、1 トレンチ中央部の小規模な土壇、柱穴群、2 トレンチ・4 トレンチの交差部付近に限定できる。出土遺構が偏在していることは、遺構検出面の大半が自然堆積層であったためである。

遺物が出土した遺構をトレンチごとに示す。

・土器類出土：

- 1 トレンチ (土壇 16、落込 32)
- 2 トレンチ (土壇 6、土壇 7、溝 11)
- 4 トレンチ (土壇 34)

・軒瓦類出土：

- 1 トレンチ (土壇 16、柱穴 24、土壇 28、落込 32)

2 トレンチ (土壇 6、土壇 7、溝 11、土壇 30)

・丸瓦・平瓦出土：

- 1 トレンチ (柱穴 15、柱穴 23、柱穴 26、柱穴 27、土壇 29、層 31)
- 2 トレンチ (土壇 5、土壇 8、土壇 9、土壇 12、土壇 14、溝 25)
- 4 トレンチ (土壇 35、土壇 36、土壇 37、土壇 38、土壇 39)

軒瓦は、軒丸瓦 5 点、軒平瓦 6 点がある。軒丸瓦は(2)～(5)までで、右に巻き込む巴文が 4 点、菊花文が 1 点ある。(1)の菊花文は瓦当面に漆が残存し、金箔瓦とみられる。軒平瓦は(6)～(11)までで、すべて均整唐草文である。唐草が凸線のものと、周囲が盛り上がり複線化したものがある(7・8・11)。鬼瓦は鼻から口にかけての部位である。

小結

自然堆積層に関する所見

調査地全域では非常に浅い位置で自然堆積層がみられた。これらは礫・砂・泥・粘土などからなり、大阪層群

を形成する地層である。大阪層群は、桃山丘陵の西半分を形づくるものであり、断層を境に丘陵側が隆起した際、引きずられて地表に露出することになった。

走向は北東から南西である。これは礫層と砂層の境界から判断できた。両者の境界は、1・2・3・5トレンチを通してほぼ一直線に連続しており、N60°Eという値が得られた。この値は、桃山から小栗栖に向かう丘陵の尾根筋とも一致している。また調査地の地層は、北西側へ約15°傾いているが、このことも、調査地の大阪層群が丘陵側の隆起に伴って地表に露出したことを示すものである。

大阪層群の中での位置づけについては、鍵層となる海成粘土 (Ma) や火山灰が見つからず、正確な判定はできなかった。しかし、礫層が優勢なことからすると、大阪層群の中でも新しい段階に属すると推定される。礫層を構成する礫は、垂角礫から亜円礫であり、丘を形成していたものが河川などで運ばれてここに堆積したものである。礫間に泥が含まれることから、土石流的な堆積であったことがわかる。礫種は、古生層に属するチャート、砂岩、泥岩 (頁岩) と、花崗岩が風化してできたクサレ礫を含む。変成岩については、供給地が特定できるとして注視したが、明確にはできなかった。礫の供給元については、花崗岩の風化した砂が多く含まれることから、南山城側からもたらされた可能性もある。地層の年代については、周辺の状態なども含めて考えると、Ma4/5、あるいはMa5/6あたりに属するのではないかと思われる。地層の観察に関しては、石田志朗先生からご教示をいただいた。

1トレンチの南半、X=-117,972 から X=-118,000 付近の粗砂層が堆積する範囲では、断面において断層が観察できた。これらは、地層が引き離される際に生じた「正断層」である。当初、地震などで形成されたと考えたが、1トレンチ南端という狭い範囲でしか確認できなかったこと、南側に内堀があり、地山はそれに向かって下がっていくことなどから、地盤全体が内堀に向かって落ち込

んだ結果、地層に「ずれ」が生じたと考えた。ただし、X=-117,975 付近においては水平方向に約0.2mほどずれた箇所も確認できた。「横ずれ断層」とすべきものであり、地表に横方向の圧力が加わったことを示す遺構があったことを付記する。

遺構の分布状態について

地山面の北端が確認できたことは調査成果の1つである。1トレンチ北半では、地山はX=-117,929までであり、その北側には整地層が盛られていることが判明した。整地層自身の深さに関する知見は乏しいが、X=-117,929以北には谷地形が広がっていたこと、現在の平坦面はそれを埋めて確保されたことなどが新たに判明した。谷地形の北東への延長については、3・5トレンチ北端がすべて地山であったことから、1トレンチのX=-117,929地点からは急激に北東方向に折れ、北堀に達していたものとみられる。現代の北堀は、1トレンチの北延長部を西端に、それより東へ約270m、約570mの2箇所、幅50～70mの巨大な屈曲部が存在する。1トレンチ北半で谷地形の形跡を確認したことは、堀を南に屈曲させる要因であった可能性もあり、伏見城の縄張りを考える上でも重要な知見と思われる。

1トレンチ北端、X=-117,910付近で検出した大規模な遺構「落込32」の存在も、上記の点と関連して重要である。落込32は整地層を掘り込んで成立しており、南肩は急角度で落ち込む。かつては屈曲部の南肩がこのX=-117,910付近にまで及んでおり、それを狭める目的で南肩から埋め戻したとみるのが妥当であろう。

1トレンチの北延長にあたる北堀南斜面は、かつての調査で石垣が検出されている (『伏見城跡発掘調査報告 伏見北堀公園整備工事に伴う事前発掘調査』伏見城研究会1989年)。ところが、石垣は南斜面のみで検出され、他の斜面には見られなかった。検出された石垣は伏見城期の石垣と解釈されてきたが、屈曲部を短くする目的で落込32が埋められたとすると、その裾部を護岸する目的で石垣が積まれた可能性も想定すべきであろう。

出丸を囲む堀について

伏見城本丸の北側に出丸が存在したことは多くの考定図に見える。またそれが伏見桃山城キャッスルランド跡地の東南隅にあたることも想定できた。出丸は、本丸・松の丸・北曲輪の経路に設けられており、戦闘時には中樞部と北曲輪を接続・遮断するための施設である。

大正から昭和初めに製作された 3,000 分の 1 基本図にも、この出丸が高まりとして描かれている。同図からは、東西約 50 m、南北約 40 m の長方形で、高さは周囲から 6 m 前後と計測できる。またこの基本図では、出丸を巡る堀が北東から南西方向に達する川状の地形として描かれている。しかし出丸が方形である以上、堀も東西・南北方向に掘られていることが想定でき、2 トレンチで西面堀、3 トレンチで北面堀を検出し、また 4・5・6 トレでもそれぞれ堀の西肩、北肩を検出したことから考定図通りに堀がめぐっていたことが、今回改めて確認できた。

なお基本図によると、北東の平坦面は標高 95 m である。これに対し北面堀底は標高 83 m で、比高差は 12 m に達する。同様に西側の平坦面は標高 89 m で、堀底 83 m との比高差は 6 m となる。調査で検出した堀の最下部は、2 トレンチが 88.8 m、3 トレンチが 89.2 m であり、基本図にある堀の上面は、それらよりさらに 5 m 程下であることが、数字の上で明らかとなった。当然、堀底はそれより深い訳であるから、今回の調査は堀のごく上端を掘削したにすぎずない。ちなみに、現在の北堀の底部は標高 75 m 台である。

出丸を巡る堀は一様に埋められ平坦化されているが、この時の土砂の供給元としては北東側の平坦地が想定できる。基本図によれば、ここには標高 95 m 台の面が広範囲に描かれている。現在の標高は 92～93 m 台であり、かつての地形が 3 m 前後削平されたことは、敷地の北端が法面となっていることからわかる。法面の上面が基本図に描かれた面であり、それが広範囲に広がっていたとすると、堀を埋めるに十分な土砂が存在したはずであ

る。2 トレンチでは、堀埋土を埋土 1 から埋土 5 に区別したが、うち埋土 4 としたものは褐色の砂泥層であり、丘陵を形成する地層がもたらされたこと、埋める際には中央部から先に埋められたことを記述した。ここに入れた土砂というのが、北東部から運ばれてきた土砂であったと推定できるのである。(丸川 義広)

7 伏見城跡 2

経過 この試掘調査は、京都市立桃山中学校プール改築工事に伴うもので、調査地は京都市伏見区桃山水野左近東町19内に所在する。当調査地は伏見城跡に該当し、出羽山形藩主最上家親の屋敷があったと比定される場所である。

今回の調査地点に近接する主な調査例について述べる。国道24号線より西側では、1992年に行われたマンション建設に伴う試掘調査¹⁾で、桃山時代の土壌2基を検出したが、それ以外に邸宅跡を示す遺構や遺物などは発見していない。また、1977年の郵政宿舍建設に伴う調査²⁾で、伏見廃城時と考えられる土壌や整地層を検出し、金箔瓦が多数出土した。桃山中学校校内では、1991年の屋内運動場増改築工事に伴う試掘調査³⁾で、時期不明の小規模な柱穴を2基検出した。他には山土状の積み土が厚さ1.2mあったとしている。1978年の校舎建設に伴う試掘調査では遺構・遺物ともに検出できなかった。1981年の校舎建設に伴う試掘調査⁴⁾では、桃山時代の遺

構面と瓦を検出した。また、東側の高地を削り西側に積んで旧校舎の建設やランド整備をしたことがわかった。その他にも周辺ではたびたび立会調査が行われており、桃山時代の土壌や整地層を検出している。

上述の通り、本調査地は伏見城跡の関連の遺構を検出することが予測され、試掘調査を実施することとなった。調査予定地域は北側と西側が民家と接しているため、安全を考慮し、東側と南側に2m×5mの調査区を3箇所設けて実施した。しかしながら、プール改築工事掘削面までは積土であることがわかった。このため、2箇所について2m×2mの範囲で現地表下2.4mと2.6mまで断割りを行った。

調査は2004年11月1日から調査に伴う準備と機材を搬入し、2004年11月5日に全機材を撤去して現場作業を終了した。

遺構 調査地の層序は既存プール造成時の盛土が約0.8m、旧耕作土層(1)が約0.4m、褐色砂泥層(2)が約0.2mの厚さで堆積していた。それより下層は、各調査区とも、整地層が幾層にも重なっている状況であっ



図124 調査位置図

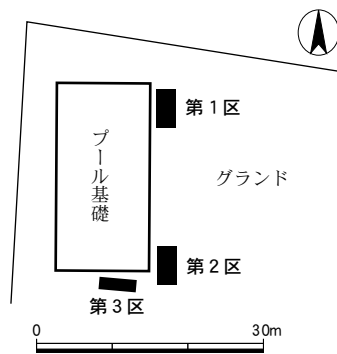


図 125 トレンチ配置図

た。第3区では現地表下 2.4 m で地山と思われる黄褐色砂泥層 (6) を確認した。

【第1区】

旧耕作土層 (1) の下層は時期不明の褐色砂泥層 (2) であった。調査区の南側を 2 m × 2 m の大きさで断ち割ったところ、下層には約 0.6 m の厚さで 3 層に分けられる整地層 (6・7・8) があり、炭や近世の瓦が含まれていた。その下層には径 1～2 cm の小礫が密に詰まった灰黄褐色砂泥層 (10) が 2～3 cm の厚さであった。詳細な時期は特定できないが一時期の生活面であったと思われる。その下には暗褐色砂泥の整地層 (11) が 0.5 m 以上あり、桃山時代と思われる軒平瓦と丸瓦が含まれていた。現地表より 2.4 m まで断ち割ったが地山は検出できなかった。

【第2区】

旧耕作土層 (1) と、その下の褐色砂泥層 (2) から 18 世紀中頃の肥前染付の小片を検出した。その下層で少なくとも 4 層 (3・6・7・8) の堅く締まった整地されたと考えられる層を検出した。また小礫を含む明褐色砂泥が詰め込まれたような層 (9) もあり、これも整地の一環と考えられる。これらの層からは遺物を検出することができず、時期を確定することはできなかった。

【第3区】

現代盛土以下、旧耕作土層 (1) 約 0.3 m であった。調査区の西側を 2 m × 2 m の大きさ、深さ 2.6 m まで断ち割ったところ、褐色砂泥層 (2) が約 0.2 m、以下、



図 126 調査状況 (北より)

暗褐色砂泥の整地層 (4) が約 0.2 m、炭の混じった暗褐色砂泥の整地層 (5) が 0.5～0.8 m あった。この層には黒褐色砂泥や黄褐色砂泥がブロック状に入っていた。その下層で地山と思われる礫を多く含む黄褐色砂泥層 (6) を検出した。遺構は確認できなかったが、土を厚く盛って整地されていることがわかった。

遺物 出土遺物は、ほとんどが近世の瓦である。土器では土師器の小片が 1 片と、陶磁器類があった。

瓦：近世の平瓦が大半で、ほとんどが第1区整地層 7 (褐色砂泥層) から出土した。他には第1区整地層 11 (暗褐色砂泥層) から軒平瓦と丸瓦が出土した。これらは桃山時代と思われる。

土器：第3区の整地層 5 (暗褐色砂泥層) から土師器小片 1 片を検出した。磨滅が激しく、時期確定には至らない。第2区の旧耕作土層とその下層の褐色砂泥層から肥前染付磁器 (椀)・肥前青磁 (椀) の小片が出土した。18 世紀中頃のものである。

小結 伏見城は、文禄元年 (1592) 豊臣秀吉の隠居所として始まるが、その歴史は大きく 4 つの時期に分かれる。この内、第1期とする隠居屋敷と秀頼誕生後の文禄三年 (1594) から造られた本格的城郭となる第2期の城は指月の丘 (現在の観月橋団地一帯) にあったが、文禄 5 年 (1597) の大地震で倒壊する。第3期の伏見城は、場所を木幡に改められる (現在の伏見御陵一帯)。この伏見城は慶長 5 年 (1600) の関ヶ原の合戦の前哨戦で焼失する。第4期は、徳川家康によって再建された

もので、場所は基本的には第3期を踏襲する⁵⁾。当調査地は江戸時代の絵図や地名などから武家屋敷が集中する区域の中にあり、山田邦和氏作図の第3・4期伏見城（豊臣期～徳川期木幡山城）城下町推定復元図⁶⁾では最上家親の屋敷地にあたる。

さて、当調査地は桃山丘陵の西斜面に位置し、学校敷地の東南は高台となっており、また、北西に隣接する家屋は一段低い位置にあり、その西側の国道24号線はさらに低い位置にある。前述したように調査地周辺では整地層が確認されている地点が多く、特に校内ではグラウンド整備のために東側の高地を削り西側に積むというような切り盛りによる整地も行われてきた。土層の状況から伏見城築城以来、桃山中学校グラウンド造成まで、幾度も同様な整地がなされてきたものと考えられる。その中で今回の調査では、第1区で現地表下1.5～1.9mで少なくとも桃山時代以降の整地層(11)及び生活面(10)が、18世紀中頃以降の耕作土層(1)より下にあることがわかった。ただ、調査面積が限られていたこと、出土遺物が極端に少なかったことなどから、今回検出した整地層及び生活面が最上屋敷にかかわるかどうかは確定しがたい。但し、瓦の出土は屋敷地を窺わせるものがある。

(モンペティ恭代)

註

- 1) 長谷川行孝「伏見城跡 No.56」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
- 2) 吉村正親『伏見城跡発掘調査概報（伏見区水野左近東町）・大名屋敷推定地・』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1977年
- 3) 「表10 試掘・立会調査一覧表」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1995年
- 4) 「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1982年
- 5) 森島康雄「考古学からみた伏見城・城下町」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城中右記』日本史研究会編 2001年
- 6) 山田邦和「伏見城とその城下町の復元」『豊臣秀吉と京都 聚楽第・御土居と伏見城中右記』日本史研究会編 2001年

第2章 資料整理

I 保存処理

1 出土木製品の受入れ状況

本年度の木製品の受入れ状況は、合計8現場であった。内訳は平安京左京八条二坊十一町(03BB-HL311)、平安京左京八条三坊六・七・十・十一町(96HK-EC002)、平安京左京三条四坊十町(03HK-RC002)、平安京右京六条三坊八町(04HK-OM001)、平安京右京三条一坊二町(04HK-UY002)、平安京右京四条四坊十五・十六町(02HK-IR010)、鳥羽離宮跡(04TB-TB150)、淀城跡・長岡京跡(04NG-YE003)である。

2 木製品保存処理

3m含浸槽では前年度処理を開始したものを、取上げ・乾燥・収納し、本年度より保存処理を開始し、現在処理を継続中のものがある。

3 金属製品の受入れと保存処理

本年度の金属製品の受入れ状況・処理は10現場であった平安宮豊樂殿(87HK-LW)は飾金具・釘3点、平安京左京一条二坊十二町(03HK-GC001)は金銅製飾金具1点、平安京左京三条四坊十町(03HK-RC002)は金属製品2点、平安京左京八条二坊十五町(03HK-BT001)は鉄製品14点、平安京跡左京・烏丸丸太町遺跡(04HK-GX001)鉄製品1点、上京遺跡(04RH-

KO001)は金銅製簪・飾金具・銭貨6点、史跡・名勝嵐山(04UZ-RG002)は金属製品53点、史跡・名勝嵐山(04UZ-OK001)は銅製品3点、大宅廃寺(04RT-QT001)は金属製品36点を受入れ処理をした。

4 ガラスの比重測定

平安京左京六条三坊五・六町(02HK-HX001)から出土したビーズなどのガラス製品38点、相国寺旧境内(04RH-SH004)ガラス玉1点をアルカリガラスと鉛ガラスに大別するため比重測定した。

5 骨の受入れと保存処理

平安京右京三条一坊二町(04HK-UY002)のヒトの頭骸骨1点、平安京左京六条三坊五・六町(04HK-WD002)のシカの骨を受入れ処理をした。

5 遺構・遺物の取上げ

本年度は遺構・遺物の取上げを3現場で行った。内訳は遺構の取上げは、大宅廃寺(04RT-QT001)で平安時代の建物の基壇の取上げと断面の剥ぎ取り、平安京右京三条一坊二町(04HK-UY002)でヒトの頭骸骨の取上げた。遺物の取上げは、平安京左京六条三坊五・六町(04HK-WD002)で漆器1点を取上げた。

6 修羅の保存処理

本年度修羅大・小は、温湿度の管理をして経過観察している。

表3 保存処理済木製品一覧表

遺跡名	調査記号	遺跡名	調査記号
平安京左京五条一坊十町	88HK-VE	平安宮内酒殿・釜所・侍従所	95HK-ZN
平安京右京三条二坊十一・十四町	89HK-CF008	平安京左京八条三坊十四町	95HK-EI001
平安京左京	90HK-FR004	平安京右京三条一坊三町	96HK-UP002
平安京左京三条二坊二・七町	91HK-FR005	山科本願寺跡	96RT-HG001
平安京左京三条三坊十三町	91HK-ED	平安京左京九条二坊十六町	97HK-BH010
平安京右京六条一坊十三・十四町	92HK-XF007	平安京右京七条一坊十四町	97HK-NJ002
平安京右京六条一坊十四町	94HK-XF010	下三栖遺跡	98FD-SS004
平安京左京八条三坊三町	94HK-EG	平安京右京一条二坊十三町	99HK-JE001
平安京左京八条三坊十四町	94HK-EF004	長岡京右京二条四坊一・八・九町	02NG-EW002

7 受託事業

本年度は、東京都港区の木製品6点、東京大学の下駄8点、岡山県落合町の銅鏡1点の保存処理を受託し完了した。長崎県和蘭商館跡（出島）の木製品22点は保存処理を受託し、現在処理を継続中である。



図 127 大宅廃寺遺構取上げ作業

II 復元彩色

本年度の復原彩色は総数525点で、内訳は下表の通りである。発掘調査概報の為の復元を主とする。主なものは、『平安京右京六条一坊跡』で122点である。史跡・旧二条離宮の遺物を展示用貸出の為に28点復原彩色した。その他、受託業務として宮津市教育委員会からの依頼で21点の復原彩色をした。（出水 みゆき）

表4 大宅廃寺遺構取上げ作業

内容	調査記号ほか	点数
調査概報	HK-XF10,17・9,19	122
調査概報	03HK-QO01	13
調査概報	03HK-BT	2
調査概報	03RH-MH3	31
調査概報	03HK-BQ004	20
調査概報	03NG-KT001	12
調査概報	04HK-UI019	2
調査概報	04HK-GS7	11
調査概報	03HK-IR11	6
調査概報	04HK-OM1	7
調査概報	03HK-BT	62
調査概報	04TB-TB150	17
調査概報	04HK-UY2	17
調査概報	02HK-HX	58
調査概報・展示	04HK-JH	25
国庫補助概報・展示	03HK-GC	42
国庫補助概報・展示	02HK-HX	18
国庫補助	04RH-KO	1
国庫補助	04UZ-OK	10
展示	01HK-JJ10	28
受託	宮津市教育委員会	21
合計		525点

第3章 普及啓発事業等報告

I 普及啓発事業報告

1 宝くじイベント共催事業「つちの中の京都」事業

(1) 発掘調査成果写真展の開催

第1回「2004年 発掘調査成果写真展」

日 時 平成16年6月18日～29日

場 所 ペアール京都 ロビー

参 加 者 一般観覧者

第2回「桃山時代の京都～つちの中から～」

日 時 平成16年10月18日～29日

場 所 京都市役所玄関ロビー

参 加 者 一般観覧者

(2) 文化財講座（5回開催）

別 掲（京都市考古資料館事業報告）

(3) 特別展示「桃山文化の陶器～つちの中から～」

別 掲（京都市考古資料館事業報告）

(4) 特別講演会

日 時 平成17年3月12日（土）

午後2時～3時30分

場 所 京都産業会館 シルクホール

講 師 樂家十五代当主 樂 吉左衛門

演 題 『樂茶碗とその周辺』

参 加 者 約450名

(5) 「つちの中の京都」—桃山陶器とお茶席—

日 時 平成17年3月19日（土）

・20日（日）

場 所 京都市勧業館

みやこメッセ第一展示場

参 加 者 約3,000名

2 現地説明会の開催，他

(1) 平成16年7月24日

「平安京右京一条四坊十三町」

参加者：200名

(2) 平成16年10月24日 「相国寺旧境内」

参加者：200名

(3) 平成16年11月 7日 「史跡・名勝嵐山」

参加者：600名

(4) 平成16年11月28日 「相国寺旧境内」

（第2回目）

参加者：350名

(5) 平成16年12月12日 「平安京左京六条三坊

五町」（地元向説明会）

参加者：60名

(6) 平成17年1月29日 「長岡京右京一条四坊

十三町」（地元向説明会）

参加者：35名

(7) 平成17年2月20日 「山科本願寺跡」

参加者：250名

（広報発表のみ）

(1) 平成16年6月10日 「平安京六条三坊六町」

（9社）

(2) 平成16年8月13日 「平安京右京一条四坊

十三町」（8社）

(3) 平成16年9月14日 「上京遺跡」（8社）

3 報告書の刊行

(1) 平成16年度 京都市内遺跡発掘調査概報

(2) 平成16年度 京都市内遺跡立会調査概報

(3) 平成13年度 京都市埋蔵文化財調査概要

(4) 平成14年度 京都市埋蔵文化財調査概要

(5) 発掘調査概報 上ノ段町遺跡

(6) 発掘調査概報 平安京右京三条二坊十五町跡

(7) 発掘調査概報 鳥羽離宮跡

(8) 発掘調査概報 伏見城跡

(9) 発掘調査概報 特別史跡・特別名勝鹿苑寺（金閣寺）庭園

(10) 発掘調査概報 鳥羽離宮跡

- (11) 発掘調査概報 平安京左京八条四坊七町跡
- (12) 発掘調査概報 長岡京跡・淀城跡
- (13) 発掘調査概報 平安京左京北辺四坊八町跡
- (14) 発掘調査概報 平安京右京六条三坊二町跡
- (15) 発掘調査概報 平安京右京三条一坊三町跡
- (16) 発掘調査概報 平安京右京三条一坊七町跡
- (17) 発掘調査概報 平安京右京三条四坊十三町跡
- (18) 発掘調査概報 平安京右京三条四坊十三町跡
- 4 「リーフレット京都」(No. 183～No. 194)の発行
- ・No. 183 生産・技術8 「公家町のガラス」
 - ・No. 184 考古アラカルト28「昭和饗宴殿」
 - ・No. 185 発掘ニュース63 「松ヶ崎廃寺」
 - ・No. 186 考古アラカルト29「平安京発掘と杉山信三博士」
 - ・No. 187 発掘ニュース64 「小野瓦窯－延喜式に記載された瓦屋－」
 - ・No. 188 考古アラカルト30「考古資料館に行ってみよう 金箔瓦の謎」
 - ・No. 189 仏教・寺院6 「松ヶ崎妙泉寺の江戸時代」
 - ・No. 190 遺跡を訪ねて7 「太秦の古墳を歩く」
 - ・No. 191 発掘ニュース65 「栢ノ杜遺跡」
 - ・No. 192 考古アラカルト31「桃山文化の陶磁器～つちの中から～1」
 - ・No. 193 考古アラカルト32「桃山文化の陶磁器～つちの中から～2」
 - ・No. 194 発掘ニュース66 「発掘成果をふりかえって2004」
- 5 研究会等への派遣
- (1) 平成16年4月～17年3月(毎月開催)
- 於：向日市(京都府埋文調査研究センター)
- 「長岡京連絡協議会」
- 調査業務 内田 好昭他
- (2) 平成16年7月21日他
- 京都市(法蔵寺)
- 「乾山窯発掘調査団会議」
- 館長 永田 信一
- (3) 平成16年8月20日
- 於：太宰府市(九州国立博物館準備室)
- 「博物館情報システムに関する研究会」
- 資料業務 宮原 健吾
- (4) 平成17年3月3日
- 於：奈良市(奈良文化財研究所)
- 「遺跡情報管理検討会」
- 資料業務 宮原 健吾
- 6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会への参加
- (1) 平成16年6月10・11日
- 於：福島県(ホテルサンルート白河)
- 「第25回全国埋蔵文化財法人連絡協議会」
- 次長 小西 一郎
- (2) 平成16年7月1・2日
- 於：金沢市(六華苑)
- 「コンピュータ等研究委員会」
- 資料業務 宮原 健吾
- (3) 平成16年6月18日
- 於：京都市(当財団本部)
- 「平成16年度第1回近畿地区OA委員会」
- 資料課長 長宗 繁一
- 資料業務 宮原 健吾
- (4) 平成16年7月9日
- 於：大阪市(以和貴荘)
- 「第1回近畿ブロック主担当会会議」
- 調査課長 鈴木 久男
- 資料課長 長宗 繁一
- (5) 平成16年10月8日
- 於：八尾市(八尾文化会館)
- 「第10回近畿ブロック埋文研修会」

I 普及啓発事業報告

資料課長 長宗 繁一

担当係長 吉崎 伸

調査業務 内田 好昭

小檜山一良

能芝 勉

(6) 平成 16 年 8 月 27 日

於：大阪市（大阪市文化財協会）

「第 1 回指定管理者制度検討部会」

館長 永田 信一

総務課長 平方 幸雄

(7) 平成 16 年度 11 月 5 日

於：京都市（当財団本部）

「平成 16 年度第 1 回近畿地区 O A 委員会」

資料業務 宮原 健吾

(8) 平成 17 年 1 月 14 日

於：大阪市（大阪市文化財協会）

「近畿版出土遺物データベースの作業部会」

資料業務 宮原 健吾

(9) 平成 17 年 2 月 10 日

於：大津市（琵琶湖文化館）

「第 2 回近畿ブロック主担当部会」

調査課長 鈴木 久男

(10) 平成 17 年 2 月 17 日

於：大阪市（大阪市文化財協会）

「近畿版出土遺物データベース第 2 回検討部会」

資料業務 宮原 健吾

(11) 平成 17 年 2 月 24 日

於：京都市（京都文化博物館）

「近畿ブロック会議」

次長 小西 一郎

館長 永田 信一

事業・業務推進係長 金島 恵一

(12) 平成 17 年 2 月 25 日

於：大阪市（大阪歴史博物館）

「近畿ブロック事務担当者会議」

総務課長 平方 幸雄

事業・業務推進係長 金島 恵一

7 講師等の派遣

大学等への派遣を実施した。（表 5 参照）

8 ホームページアクセス件数

今年度のホームページへのアクセス件数は、20,578 件であった。

II 京都市考古資料館状況

1 速報展の実施

「平安京右京六条三坊六町出土の人形」

（平成 16 年 6 月 11 日～ 27 日）

平成 16 年 4 月から 6 月にかけて発掘調査を行った平安京右京六条三坊六町の井戸跡から出土した男女と見られる立体的な木製人形 2 体を速報展として展示した。

2 特別展示の実施

「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」

（平成 16 年 9 月 25 日～平成 17 年 3 月 31 日）

京都市内の発掘調査では、様々な遺物が出土するが、桃山時代を代表する遺物として陶磁器があげられる。これらは、洛中や伏見城下の遺跡から数多く発見されており、志野、織部、信楽、備前、唐津など全国各地のものだけでなく、遠くは中国や朝鮮半島、タイなど、東南アジアからもたらされたものもある。

今回、こうした陶磁器類を一同に介して展示することにより、京都の桃山文化とその歴史を垣間見ることができると考え、特別展示「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」を開催した。展示では、伏見城下町跡、茶屋四郎次郎邸跡、金森出雲京屋敷跡、古田織部正京屋敷跡、後藤庄三郎邸跡、下白山町遺跡、仲之町遺跡、

表5 講師等の派遣一覧表

No.	件名	機関名	氏名	日時	備考
1	非常勤講師の委嘱（考古学実習A・B）	帝塚山大学	上村 和直	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（木曜日）
2	非常勤講師の委嘱（考古学史L）	立命館大学	内田 好昭	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（月曜日）
3	非常勤講師の委嘱（考古学調査実習L）	立命館大学	高橋 潔	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（水曜日）
4	非常勤講師の委嘱（考古学LA・LB）	立命館大学	山本 雅和	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（水曜日）
5	非常勤講師の委嘱（考古学史）	近畿大学	網 伸也	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（土曜日）
6	非常勤講師の委嘱（考古学実習I・II）	花園大学	南 孝雄	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（土曜日）
7	非常勤講師の委嘱（京都の歴史と考古Z）	仏教大学	南出 俊彦	16.4.1.～ 17.3.31	1週2時間担当（土曜日）
8	非常勤講師の委嘱（日本史特殊講義I・II）	立命館大学	永田 信一	16.4.1.～ 17.3.31	金曜日 19:40～21:10
9	非常勤講師の委嘱（日本史特論）	府立朱雀高等学校	辻 裕司	16.4.1.～ 17.3.31	金曜日 19:35～21:10
10	非常勤講師の委嘱（考古学実習II・IV）	奈良大学	辻 純一	16.10.1.～ 17.3.31	1週4時間担当（火曜日）
11	非常勤講師の委嘱（古代文化論）	京都造形芸術大学	丸川 義広	16.4.1.～ 17.3.31	通信教育のため出講せず
12	出前授業（総合学習）	市立勸修小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	16.5.19.21・28	
13	出前授業（総合学習）	市立小野小学校	辻 純一, 吉崎 伸, 他	16.6.15.18・23	
14	講師（総合学習）	市立二条城北小学校	丸川 義広	16.5.21	
15	講師	上高野の自然と文化を学ぶ同史会（小野瓦窯跡の発掘調査）	吉崎 伸	16.6.27	
16	京都国立博物館夏期講座の講師	京都国立博物館	鈴木 久男	16.7.29	
17	京都の文化財探訪（1）の講師	（財）大阪府文化財センター	吉村 正親	16.9.12	
18	TRY1600 シボジウム「宗教・文化・産業の基底に流れるDNA」のプレゼンター	京都府立「物語実行委員会」	丸川 義広	16.9.10	
19	平成16年度歴史文化講習会の講師	京都市中央老人福祉センター	永田 信一	16.11.8・15	
20	世界遺産10周年記念事業の森文化講座の講師	賀茂御祖神社	鈴木 久男	16.12.5	
21	平成16年度「陶磁器調査課程（古代）」の講師	奈良文化財研究所	平尾 政幸	17.2.18	
22	長岡京発掘50周年記念事業、三都物語「恭仁・長岡・平安京」の講師	京都府教育委員会他	網 伸也	17.2.20	
23	『安京講座』『発掘から考える平安京』	（財）京都市生涯学習振興財団, 他	永田 信一	17.3.4	
24	「市民大学講座」の講師	帝塚山大学	上村 和直	17.3.12	

弁慶石町遺跡の各遺跡から出土した陶磁器類を出土地ごとに展示するとともに、洛中洛外図や絵図、発掘調査状況の写真パネルなども併せて紹介した。

特に写真パネルについては洛中洛外図屏風や絵図を中心に展示し、当時の洛中の町並みや人々の生活ぶりを表すと伴に、展示している陶磁器が、洛中洛外図屏風などに描かれた状況と符合し、桃山時代の京都の歴史や文化の様子を示していることを紹介した。

また、洛中洛外図の展示にあたっては、富山・勝興寺

並びに高津古文化会館の協力を得た。

なお、当特別展示は平成16年度宝くじ共催イベント事業「つちの中の京都」の一環として実施し、3月19日・20日の両日、みやこめっせで開催した関連イベント「つちの中の京都～桃山陶器とお茶席～」へ移動展示を行ったため、3月17日～21日の間、特別展示を休止した。（展示遺物 334点）

（展示品解説）

特別展示「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」の開

催に合わせ、展示解説を取り上げた「リーフレット京都」を192号・193号の二号にわたり発行した。

3 第25回小・中学生夏期教室の開催

期 間 平成16年8月3日～6日

第25回夏期教室は小学生の部が8月3・4日に、中学生の部が8月5・6日のそれぞれ2日間にわたり開催した。

参加者は、小学生の部1日目が14名、2日目が親子20組、中学生の部が1日目が12名、2日目が19名であった。

学習内容については、昨年と同様の内容で実施した。2日目の小学生親子の古墳見学についても昨年と同様に、御堂ヶ池1号墳、仲野親王墓から蛇塚古墳を見学し

た。

なお、見学にあたっては京都市埋蔵文化財調査センターの堀 大輔氏の協力を得た。

また、中学生の発掘調査現場での体験は、承天閣美術館調査現場で発掘調査の体験と出土遺物の水洗い作業を実施した。

4 文化財講座の開催

平成16年度には財団法人京都市埋蔵文化財研究所が財団法人自治総合センターの助成金による事業を京都市から受託し、宝くじイベント共催事業「つちの中の京都」を実施したことにより、当資料館においてもこの事業の一環として、特別展示「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」を実施したが、文化財講座においても連続講座「

表6 文化財講座開催一覧表

回数	開催年月日	演 題	講 師 名
第162回	平成16年4月24日	長岡京調査の経緯と成果－調査50周年にあたって－	長岡京市埋蔵文化財センター 小田 桐 淳
第163回	平成16年5月22日	京都の文化財シリーズ第4回「京都の式内社について」	市埋蔵文化財調査センター 北 田 栄 造
第164回	平成16年6月26日	2004年 発掘調査成果写真展をめぐって	鈴 木 久 男
第165回	平成16年7月24日	松ヶ崎廃寺跡の発掘調査	布 川 豊 治
		淀城跡の発掘調査	内 田 好 昭
第166回	平成16年9月25日	連続講座「桃山文化とその歴史～つちの中から～」第1回 特別展示「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」をめぐって	原 山 充 志
第167回	平成16年10月23日	連続講座「桃山文化とその歴史～つちの中から～」第2回 講演と博物館めぐり 講演「桃山時代の茶陶の世界」	茶道資料館 赤 沼 多 佳
第168回	平成16年11月27日	連続講座「桃山文化とその歴史～つちの中から～」第3回「洛中と伏見の茶陶発掘」	永 田 信 一
第169回	平成17年1月22日	連続講座「桃山文化とその歴史～つちの中から～」第4回「大阪の茶陶発掘」	大阪歴史博物館 森 毅
第170回	平成17年2月26日	連続講座「桃山文化とその歴史～つちの中から～」第5回「堺の茶陶発掘」	東洋陶磁学会 森 村 健 一

桃山文化とその歴史～つちの中から～」と題し、洛中や伏見で出土した桃山時代の陶磁器をとりあげた講座などを5回にわたり開催した。

この内、第167回の第2回講座では、毎年の現地講座（遺跡めぐり）を「講演と博物館めぐり」として開催し、茶道資料館の赤沼多佳氏による講演「桃山時代の茶陶の世界」の後、茶陶関連の展示を行っている茶道資料館及び楽美術館のご協力を得て、当資料館を含めた3館の見学や学芸員による解説を行うと伴に、周辺の上京関連の史跡や文化財をめぐる講座を実施した。

また、京都だけでなく大坂や堺での茶陶の発掘調査についてもとりあげ、報告を願った。

5 考古資料の貸出（表7参照）

ア 継続貸出分 37件 889点（前年度以前からの継続貸出分）

イ 新規貸出分 18件 412点

6 博物館学芸員課程実習生の受入れ

各大学の要請により実施した。

4日間の日程で埋蔵文化財の発掘調査が整理作業を経て考古資料館の展示にどのように結びついているかをテーマの中心としてとらえ、京都市の埋蔵文化財の状況や写真撮影、出土遺物の保存処理、考古資料館業務などについて以下の内容で実習を行った。

平成16年8月24日～27日

京都造形芸術大学	1名
立命館大学	3名
京都教育大学	1名
ノートルダム女子大学	1名
京都橘女子大学	2名
京都精華大学	1名
新潟大学	1名（計10名）

平成16年8月31日～9月3日

京都女子大学	2名
--------	----

京都造形芸術大学	1名
立命館大学	3名
京都教育大学	1名
ノートルダム女子大学	1名
京都橘女子大学	1名
京都精華大学	1名（計10名）

平成16年9月7日～10日

京都女子大学	2名
京都造形芸術大学	1名
立命館大学	2名
京都教育大学	1名
ノートルダム女子大学	1名
京都橘女子大学	1名
愛媛大学	1名（計9名）

また、各大学が実施している博物館実習の施設見学として、展示解説等を実施した。

佛教大学	26名
花園大学	6名
専修大学	23名
京都府立大学	8名（計63名）

7 生き方探求・チャレンジ体験（表8参照）

市内中学校を対象に以下の内容で実施した。

- ・「発掘の意義と方法」についての説明
発掘方法・発掘の実際・記録の重要性などを模型等を用いて解りやすく解説。
- ・現場での発掘調査の体験
元御池中学校・元尚徳中学校の各発掘調査現場を中心に実施。
- ・整理作業の体験
遺物の水洗いや瓦などの拓本作業を実習。
- ・資料館業務の実習
各校区での発掘調査の様子や周辺の遺跡についての学習、資料館展示内容の解説、見学者用ワークシートの作成など。

表7 貸出一覧表

No	件名	貸出先	貸出期間	点数
1	施設内展示（発掘施設での展示）	株式会社稲栄	16.4.1～17.3.31	46
2	”	久保田 肇	”	7
3	”	株式会社法蔵館	”	44
4	”	京都南病院（医療法人健康会）	”	23
5	”	京都市生涯学習総合センター	”	43
6	”	宗教法人六波羅蜜寺	”	15
7	”	株式会社富永製作所	”	13
8	”	学校法人京都橘女子学園	”	35
9	”	京都市立大原野小学校	”	43
10	”	光映工芸株式会社	”	1
11	”	京都ブライトンホテル株式会社	”	9
12	”	京都市立久世小学校	”	23
13	京セラ研修センター京都ロビーで展示	京セラ株式会社	”	28
14	施設内展示（発掘施設での展示）	京都市立下鳥羽小学校	”	18
15	常設展示（山口市歴史民俗資料館）	山口市教育委員会文化課	”	6
16	施設内展示（発掘施設での展示）	京都リサーチパーク株式会社	”	47
17	”	株式会社オリコエステート	”	19
18	”	京都市立嵯峨野小学校	”	29
19	常設展示	広島県立歴史博物館	”	3
20	京都市呉竹文化センター	財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	”	47
21	施設内展示（発掘施設での展示）	京都市立洛西中学校	”	12
22	”	財団法人京都市駐車場公社	”	21
23	京都コンサートホール内展示	財団法人京都市音楽芸術文化振興財団	”	7
24	常設展示	国立歴史民俗博物館	”	2
25	地下鉄二条前駅構内展示	京都市交通局	”	21
26	施設内展示（発掘施設での展示）	京都市立北野中学校	”	37
27	”	京都市立七条中学校	”	22
28	常設展示	東京国立博物館	”	80
29	施設内展示（発掘施設での展示）	京都市中京もえぎ幼稚園	”	20
30	TOWA 株式会社本社ビルロビーで展示	TOWA 株式会社	”	17
31	施設内展示（発掘施設での展示）	高齢者福祉総合施設ももやま	”	17
32	山科区役所ロビーで展示	山科区役所	”	13
33	開館ロビーで展示	京都市右京ふれあい文化会館	”	27
34	郷土学習室で展示	京都市立山階小学校	”	17
35	「世界水フォーラム」にちなんだ歴史展示	賀茂御祖神社（下鴨神社）	”	14
36	施設内展示（発掘施設での展示）	久世ふれあいセンター	”	44
37	”	こども相談センターパトナ	”	19
		継続貸出分小計		889
1	特別展「天下人のすまゝー城大工の技」	大阪市立住まゝのミュージアム	16.4.8～16.6.10	11
2	6年生の社会科歴史学習の資料	京都市立太秦小学校	16.4.26～16.4.30	9
3	特別展「東北発掘ものがたり2」	東北歴史博物館	16.5.20～16.9.21	7
4	企画展「樂茶碗ー手のひらの小宇宙」	茨城県陶芸美術館	16.9.14～16.12.5	4
5	「第21回小さな展覧会ー平成15年度京都府内遺跡発掘調査成果速報ー」	財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター	16.8.4～16.9.2	11
6	「こども考古学教室」	京都市立朱雀第八小学校	16.7.26～16.8.6	93
7	企画展「京都発掘だより2004」	山城郷土資料館	16.9.1～16.10.8	11
8	「親と子の考古学教室」	財団法人大阪府文化財センター	16.9.14～16.9.28	1
9	「平泉の文化遺産巡回展」	和泉町長 千葉和男	16.8.5～17.3.31	8
10	「1108ー浅間火山大噴火、中世への胎動」	かみつけの里博物館	16.10.1～16.12.24	11
11	16年度秋季特別展「考古学の語る中世墓地物語」	大谷女子大学博物館	16.10.7～16.12.20	26
12	「鍋島と伊万里の世界ーその美と意匠の裏に隠された歴史を追うー」	港区立港郷土資料館	16.10.26～16.12.10	46
13	平常展示館 漆工室における漆絵をテーマとした展示	京都国立博物館	16.11.10～17.1.12	23
14	平成16年度龍谷大学博物館実習12月展	龍谷大学文学部	16.11.24～16.12.7	53
15	開館30周年記念特別展「戦国大名常陸佐竹氏」	茨城県立歴史館	17.1.18～17.3.31	3
16	春季先行展「春の夜の夢のごとし」	兵庫県埋蔵文化財調査事務所	17.2.16～17.3.23	18
17	社会科・総合的な学習の時間の資料	京都市立小野小学校	17.2.25～17.8.31	12
18	平成17年度特別展示「金箔瓦」	帝塚山大学附属博物館	17.3.30～17.6.2	65
		新規貸出分小計		412

・受入人数

27校・86名（男子77名・女子9名）

なお、受入人数については、単独事業所としては最多であったとのことである。

8 修学旅行生の発掘調査体験学習の受入れ

1) 平成16年4月24日

長野市立犀陵中学校（長野県）6名

拓本実習体験

2) 平成16年5月7日

松江第三中学校（東京都）10名 16.5.7

平安京跡発掘調査の体験

3) 平成16年7月2日

天沼中学校（東京都）10名

平安京跡発掘調査の体験

表8 チャレンジ体験実施校一覧表

No	学校名	人数	日時
1	小栗栖中学校	2	16.5.25～27
2	京都御池中学校	7	16.5.26～28
3	桃陽総合養護学校	1	16.6.1～3
4	西賀茂中学校	5	16.6.2～4
5	修学院中学校	3	16.6.8～10
6	西ノ京中学校	2	16.6.15～17
7	向島東中学校	4	
8	藤森中学校	2	16.7.6～8
9	太秦中学校	4	16.10.19～21
10	神川中学校	6	
11	加茂川中学校	1	16.10.26～28
12	松尾中学校	2	
13	郁文中学校	4	
14	大原中学校	1	16.10.27～29
15	向島中学校	2	16.11.9～11
16	蜂ヶ岡中学校	2	
17	洛水中学校	3	
18	烏丸中学校	1	
19	大淀中学校	3	16.11.10～12
20	上京中学校	2	16.11.16～18
21	朱雀中学校	2	
22	松原中学校	2	16.11.18～20
23	大枝中学校	2	
24	洛北中学校	4	17.1.26～28
25	安祥寺中学校	6	17.2.2～4
26	山科中学校	8	
27	近衛中学校	5	17.2.8～10
	計	86	

9 教育機関の学外授業等の受入れ（表9参照）

小学校や大学等の課外授業の受入れを行った。

10 共催事業の実施

1) 宝くじ共催イベント「つちの中の京都」の実施

財団法人自治総合センターが宝くじの普及広報を目的として、京都市から財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託があったため、宝くじ共催イベント「つちの中の京都」として実施した。

市内から出土した大量の桃山茶陶をテーマとして、広く市民の方々に桃山文化を楽しんでいただく事業を企画

表9 学外授業等受入れ一覧表

No	学校	人数	日時	内容
1	二条城北小学校（6年生）	90	16.5.18	校内の発掘調査や周辺遺跡についての説明、遺物見学
2	京都女子大学	92	16.5.29	展示解説
3	西陣中央小学校（6年生）	94	16.6.9	展示及び遺物解説（3クラス）
4	西陣中央小学校（2年生）	28	16.6.9	展示解説
5	正親小学校	13	16.6.16	校内の発掘調査や周辺遺跡についての説明、展示見学
6	佛教大学	4	16.6.18	質問対応（学芸員課程）
7	西陣中央小学校（2年生）	7	16.6.23	質問対応（生活学習町探検）
8	京都橘女子大学	1	16.6.24	インターンシップ生の受入
9	加茂川中学校（3年生）	39	16.6.29	周辺遺跡についての説明、展示解説
10	立命館大学	31	16.7.2	展示概要及び方法等の解説
11	堀川高校	4	16.7.6	校内の発掘調査や周辺遺跡についての説明
12	二条城北小学校（6年生）	9	16.7.9	質問対応
13	祥栄小学校	28	16.8.17	展示解説
14	加茂川中学校（3年生）	40	16.9.29	周辺遺跡についての説明、展示解説
15	加茂川中学校（3年生）	39	16.10.27	周辺遺跡についての説明、展示解説
16	天津裏千家短期大学	25	17.1.18	展示解説
17	天津裏千家短期大学	10	17.3.9	展示解説
18	京都市青葉寮	10	17.3.30	展示解説
	計	564		

II 京都市考古資料館状況

した。各実施内容は次のとおりである。

1- 発掘調査成果写真展の開催

第1回「2004年 発掘調査成果写真展」

日 時 平成16年6月18日～29日

場 所 ペアール京都 ロビー

第2回「桃山時代の京都～つちの中から～」

日 時 平成16年10月18日～29日

場 所 京都市役所玄関ロビー

2- 考古資料館文化財講座の開催（表6参照）

3- 考古資料館特別展示「桃山文化の陶磁器～つちの中から～」の開催（別掲）

4- 特別講演会の開催

日 時 平成17年3月12日（土）

午後2時～3時30分

会 場 京都産業会館 シルクホール

講 演 「楽茶碗とその周辺」

講 師 楽家十五代当主 楽 吉左衛門

参加者 約450名

5- 「つちの中の京都～桃山陶器とお茶席～」の開催

日 時 平成17年3月19日（土）・20日（日）

会 場 京都市勧業館 みやこめっせ

参加者 約3,000名

2) ペアール京都共催事業の実施

社会保険京都健康づくりセンター・ペアール京都との共催事業を実施した。

「ペアール京都健康ウォーク・平安宮跡の遺跡めぐり～」

・第1回～内裏周辺を中心に～

日 時 平成17年2月19日（土）

午前10時～午後4時

講 演 考古資料館 永田館長

ウォーキング指導 ペアール京都トレーナー

ペアール京都・出発～一条戻り橋～聚楽第の堀跡（ハローワーク西陣）～内酒殿跡（智恵光院通下立売上ル・福祉施設前）～中務省跡（丸太町通智恵光

院西入・マンション玄関）～朝堂院（大極殿）跡（千本丸太町交差点周辺）～大極殿址石碑（千本丸太町上ル）～内裏内郭回廊跡（史跡保存）・蔵人町屋跡～（下立売通千本東入）～内裏承明門跡（下立売通浄福寺西入・かつらぎガス）～聚楽第堀跡（松林寺）～聚楽第の碑（正親小学校東端）～京都市考古資料館（約4.5km）

参加者 50名

・第2回～豊楽殿と神泉苑周辺を中心に～

日 時 平成17年3月5日（土）

午前10時～午後4時

講 演 考古資料館 永田館長

ウォーキング指導 ペアール京都トレーナー

ペアール京都・出発～府庁周辺の発掘調査地点の紹介～高陽院跡（堀川丸太町北東周辺）～冷然院・堀河院跡（全日空ホテル）～神泉苑跡展示（地下鉄「二条城前駅」構内）～神泉苑跡（押小路通周辺）・史跡 神泉苑～朱雀大路・右京職跡・JR二条駅案内板（JR二条駅）～朱雀門跡（千本通二条上ル）～史跡 平安宮豊楽殿跡（七本松通丸太町下ル東入ル）～史跡（市）平安宮造酒司跡（京都アスニー・平安京歴史ゾーン）（約4.5km）

参加者 56名

11 入館状況（表10参照）

表10 入館者数一覧表

月	開館 日数	一 般			団 体			合 計	一日平均
		12才以上	12才未満	小 計	12才以上	12才未満	小 計		
	日	人	人	人	人	人	人	人	
4	26	1,428	45	1,473	149	0	149	1,622	62.4
5	26	1,326	32	1,358	242	85	327	1,685	64.8
6	26	1,343	111	1,454	254	117	371	1,825	70.2
7	27	1,169	124	1,293	151	0	151	1,444	53.5
8	26	1,306	181	1,487	54	37	91	1,578	60.7
9	26	1,477	73	1,550	298	0	298	1,848	71.1
10	27	1,620	77	1,697	164	0	164	1,861	68.9
11	25	1,672	48	1,720	80	0	80	1,800	72.0
12	23	1,352	39	1,391	0	0	0	1,391	60.5
1	24	1,518	31	1,549	116	19	135	1,684	70.2
2	24	1,912	30	1,942	175	0	175	2,117	88.2
3	25	1,874	33	1,907	118	16	134	2,041	81.6
計	305	17,997	824	18,821	1,801	274	2,075	20,896	68.5

Ⅲ 役職員名簿

表11 役員名簿

役員名	氏 名	職 名
理事長	柴 田 重 徳	京都市文化市民局長
専務理事	岡 田 秀 人	京都市文化市民局文化部担当部長
理 事	森 口 源 一	京都市文化市民局文化部長
理 事	井 上 満 郎	京都産業大学教授
理 事	上 田 正 昭	財団法人世界人権問題研究センター理事長
理 事	川 上 貢	財団法人京都市埋蔵文化財研究所所長
理 事	田 辺 昭 三	神戸山手大学教授
理 事	角 田 文 衛	財団法人古代学協会理事長・古代学研究所所長
理 事	西 川 幸 治	滋賀県立大学学長
理 事	佐々木 弘 史	京都市埋蔵文化財調査センター所長
理 事	村 井 康 彦	京都造形芸術大学教授・京都市歴史資料館館長
理 事	石 崎 了	京都市文化市民局文化部文化財保護課長
理 事	和 田 晴 吾	立命館大学教授
監 事	堺 眞 實	京都市会計室長
監 事	廣 瀬 伸 彦	税理士・廣瀬伸彦税理士事務所所長・京都府監査委員

III 役職員名簿

表 12 職員名簿

平成 16 年 5 月 1 日現在

担当業務	職名	氏名	備考	担当業務	職名	氏名	備考
	専務理事	岡田 秀人		[資料業務]	資料課長	長宗 繁一	
	所長	川上 貢			統括主任	久世 康博	
	次長	小西 一郎			主任	出水 みゆき	
[総務業務]	総務課長	平方 幸雄			主任	児玉 光世	
	庶務係長	総務課長事務取扱			主任	清藤 玲子	
	事業係長	金島 恵一			主任	小森 俊寛	
	業務推進係長	事業係長兼職			主任	幸明 綾子	
	統括主任	本田 憲三			主任	卜田 健司	
	主任	上田 栄治			主任	宮原 健吾	
	主任	西大條 哲			主任	村井 伸也	
	主任	佐藤 正典			主任	村上 勉	
	事務職員	西村 洋子			主任	竜子 正彦	
[調査業務]	調査課長	鈴木 久男		[考古資料館業務]	館長	永田 信一	
	担当係長	辻 純一	(調査業務総括)		副館長	村木 節也	
	担当係長	吉崎 伸	(調整)		主任	原山 充志	
	担当係長	本 弥八郎		[勸大阪府文化財センターへ派遣]			
	担当係長	吉村 正親			担当係長	辻 裕司	
	資料係長	中村 敦			担当係長	平田 泰	
	統括主任	上村 和直			担当係長	前田 義明	
	統括主任	加納 敬二			統括主任	木下 保明	
	統括主任	平尾 政幸			統括主任	鈴木 廣司	
	統括主任	丸川 義広			主任	小松 武彦	
	主任	東 洋一			主任	近藤 章子	
	主任	網 伸也			主任	高橋 潔	
	主任	内田 好昭			主任	田中 利津子	
	主任	大立目 一			主任	長戸 満男	
	主任	小檜山 一良			主任	南出 俊彦	
	主任	桜井 みどり			主任	山本 雅和	
	主任	津々池 惣一		[勸富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所へ派遣]			
	主任	出口 勲			担当係長	菅田 薫	
	主任	布川 豊治			主任	伊藤 潔	
	主任	能芝 妙子					
	主任	能芝 勉					
	主任	尾藤 徳行					
	主任	堀内 寛昭					
	主任	南 孝雄					
	主任	モンベティ恭代					
	主任	山口 真					
	主任	吉本 健吾					

平成 16 年度
財団法人京都市埋蔵文化財研究所年報

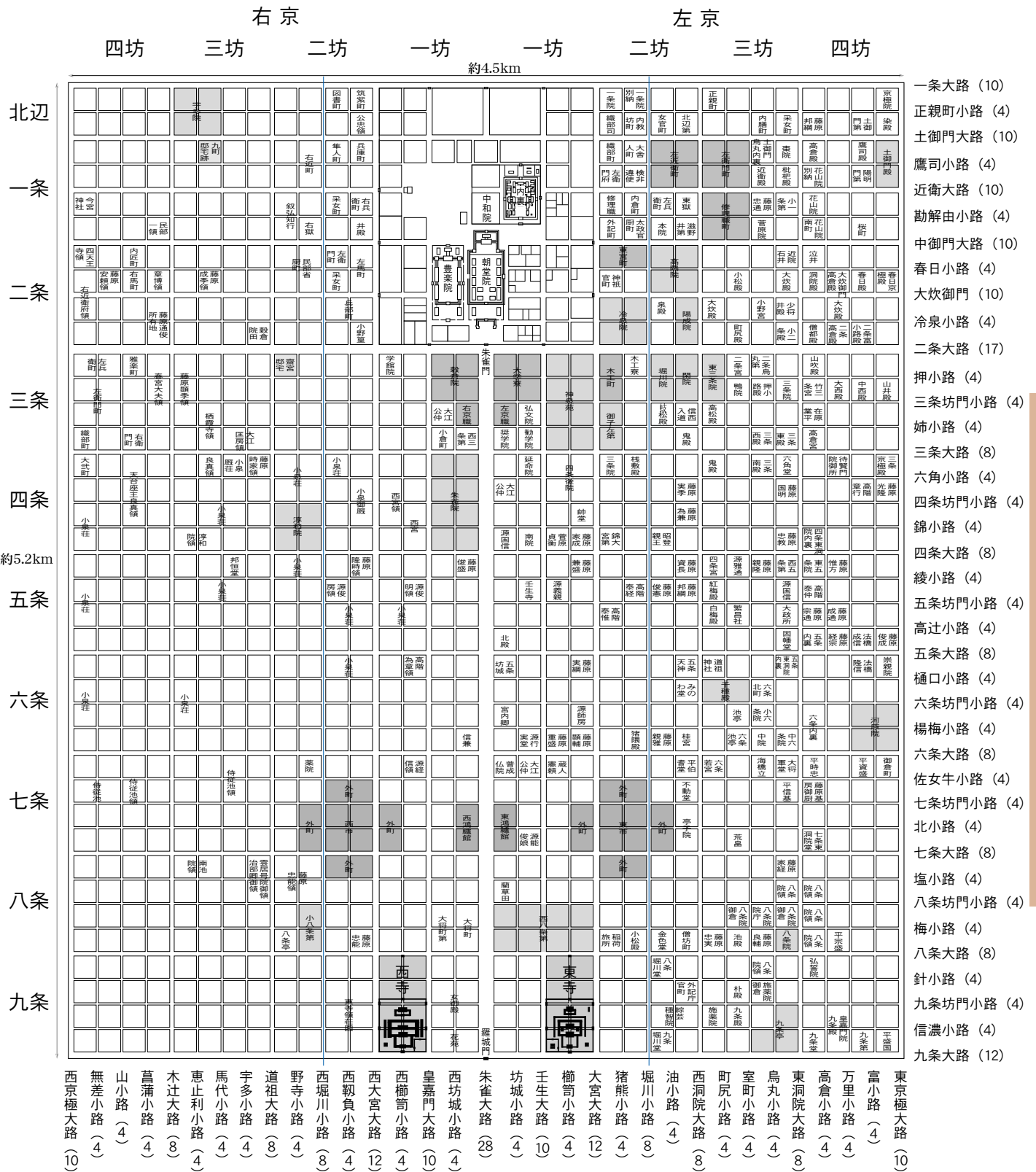
発行日 2006 年 12 月 28 日

編 集
発 行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住 所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印 刷 (有) 関西プロセス

平安京図



凡例
 図中に示した諸司厨町や邸宅名は、『平安京提要』1994年 角川書店 (第三章「左京と右京」 山田邦和) より引用し一部追加した。
 (数字) : 丈数を示す。

平安京図

表紙図：平安宮豊樂殿跡出土鬼瓦 (重文)